2009年度
「庄内セミナー」報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

2009年度
「庄内セミナー」報告書

Contents

はじめに　2

「庄内セミナー」の概要 …… 3

庄内セミナーについて　*4*
1. はじめに
2.「知の共同体」としての大学――庄内セミナーを支える理念
3.「未知」と出会う・「未知」を知る――庄内セミナーの趣旨・目的
4. セミナーのテーマ
5. セミナーの概要
6. セミナー・プログラム

庄内セミナー現地発表会　*15*

グループ・プレゼンテーション…… 19

第1グループ「山伏がおしえてくれたこと」　*20*

第2グループ「温故知新　～鶴岡・未来構想～　未来につなぐ鶴岡のいのち」　*30*

第3グループ「致道館における教育～藩校再考～」　*41*

第4グループ「新たな地方モデル　『素敵な田舎』庄内」　*51*

庄内セミナー活動報告会　*66*

資料編…… 69

はじめに

教養研究センター所長
横山千晶（法学部教授）

私たちは生きていく過程で実に多くの人や物事と関係を持ちます。そして関係を持つということはときとして、「裏切られること」でもあります。私たちはそれぞれがそれぞれの時代に生きていますが、今周りを見ると、時代は多くの人々の夢を踏みにじり、人々を分断しています。同時に私たちが希望を託したはずの政治家は、これもまた仮面の下に持ついくつもの顔で私たちを混乱させています。あるいは本当の姿が何であるのかすらわかりません。

物語が行き交い、それぞれがそれぞれの立場で語り倒し、投げつけられる言葉は私たちの心を冷たく叩いて奥には届かずぱらぱらと落ちていくばかりです。もちろんこのような時代は今のことだけではありません。その昔、庄内でも同じような出来事がありました。幕末の 1872 年、戊辰戦争で官軍に敗れ、時代に翻弄された庄内藩士たちの胸中はいかばかりだったことでしょう。その証が松ヶ岡です。総勢 3000 人の藩士たちは 34 組に分かれ、93 万 9000 坪の土地を苦難に耐えながら開墾していきました。その苦労は天と地が知っている。西郷隆盛はその開墾精神を「気節凌霜天地知」の箴言で励ましたのですが、彼らはここで自らの命を時代から切り離し、この土地と自然の中に刻み込んで生きました。確かに今もこの場所がその人々の理想と艱難辛苦をしっかりと覚えているのです。しかもその特徴は土地を私有化することのない土地共有制にありましたが、今でもその精神は松ヶ岡に息づいています。

私たちが今、このような時代に生きているからこそ、2009 年の庄内セミナーはこの松ヶ岡開墾場を舞台に活動を展開しました。広々とした緑の大地と大きな空に見守られたこの松ヶ岡開墾場に出向くと、新たな場作りのひとつのモデルを見る思いがします。立派に使いこなし、慣れ親しんだ酒袋の中に上等な新酒が入っている味わいともいえましょうか。若い力が結集して、その昔からこの場所に脈打つ歴史の鼓動を大切に感じながら、記念館、ギャラリー、カフェ、映画村など、全国的に話題に上る活動が繰り広げられています。おそらくこの場所は、21 世紀に繰り広げられるこれらの活動が、決して歴史を裏切るものでないことを知っているのです。

今回のセミナーのテーマも去年に引き続き「いのち」であることに変わりはありません。そして私たちが重要視したことは、この「生きる」ことの本来の意味です。場所とつながり、過去とつながり、ここに住む人々につながってみる。そして未来へと手を伸ばしていくために、このからだを十分に使いこなして、今一度自分のいるこの場所を、そして生きていることを味わう。ひとりの人間ははかなくもろいものですが、場と人と時間がつなぎ合わさっていくことで私たちは自分たちがどれほどの包容力の中で、生かされ、活かされているのかを知るはずです。この報告書はその体得の記録です。

松ヶ岡の皆様方、酒井家の方々を始めとし、今回のセミナーにおいても実に多くの方々が私たちをしっかりと受け止め、支えてくださいました。そして、年間を通して 2009 年度の庄内セミナーの活動を可能にしてくださった大勢の皆様方に開催校である、東北公益文科大学と慶應義塾大学を代表して御礼を申し上げます。そしてこれからの庄内セミナーの成長を多くの方々に見守っていただきたいと心から願ってやみません。

2009 年度「庄内セミナー」報告書

「庄内セミナー」の概要

庄内セミナーについて

1．はじめに
2．「知の共同体」としての大学――庄内セミナーを支える理念
3．「未知」と出会う・「未知」を知る――庄内セミナーの趣旨・目的
4．セミナーのテーマ
5．セミナーの概要
6．セミナー・プログラム

庄内セミナー現地発表会

庄内セミナーについて

羽田　功（庄内セミナー・プロジェクトリーダー／経済学部教授）

1. はじめに

慶應義塾大学教養研究センターは、2008年度の鶴岡セミナーに続いて、2009年度に庄内セミナーを主催いたしました。何よりも特筆すべきことは、鶴岡セミナーでご協力をいただいた東北公益文科大学が今回は共催者として一歩踏み込んだ関わり方をしてくださったことです。

庄内セミナーは、2009年8月1日のプレ企画を皮切りに、8月31日から9月3日に山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を中心として実施された合宿セミナーをメイン企画として、11月14日に慶應義塾大学日吉キャンパスで行われた成果報告会にいたるまで、関連企画も含めるとほぼ半年にわたって行われました。

ここでは、このセミナーを支える理念、セミナーの趣旨・目的、テーマ、概要、プログラム（プレ企画・合宿セミナー・成果報告会）、関連企画、スタッフについてご紹介したいと思います。

2.「知の共同体」としての大学 ―庄内セミナーを支える理念

慶應義塾大学教養研究センターでは、2005年度から2007年度にかけて、文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクト・「バリアフリー・キャンパス構築をめざして」を展開してまいりました。これは21世紀型の教養教育の慶應モデルの作成を目指したプロジェクトです。

プロジェクトでは、教養教育のあり方を抜本的に見直し、学ぶべきコンテンツと学びの場とを併せて、受け継ぐべきは受け継ぎ、正すべきは正し、生み出すべきは生み出すことに留意しつつ、新たな教養教育を総合的に捉えた全人教育プログラムを構築してきました。プログラムのキーワードは5つ：

①「知の共同体」

大学とはさまざまな構成員によって「知」をめぐるダイナミックな活動が行われる「共同体」です。そこでは相互に教えあい、学びあう関係、つまり半学半教の関係が構築されなければなりません。

②「バリアフリー」

こうした共同体の活動と構成員の関係をより有意なものとするためには、しかし、まず大学自体が、またその構成員があらゆるものに対してバリアを設けることなく、これに接することのできる姿勢を持たなければなりません。バリアからの解放が求められる所以です。

③「自律性」

知の共同体では半学半教、相互啓発といった学びが重視されますが、これが実現するためには、何よりも共同体の構成員一人ひとりが「学ぶ自分」「教える自分」を相対化して眺める視点を持たなければなりません。自己を、他者を、共同体そのものを俯瞰する目が必要です。このような自律性の涵養は共同体の大きな課題です。

④「社交力」

共同体における活動は協働作業が基本となります。つまり、他者とどのようにつながるか、そのつながり方が活動の成否を決めるわけです。そのためには、当然のことながら他者とつながり、共に活動を展開するための力が必要とされます。そうした社交力を育むことも不可欠です。

⑤「ポートフォリオ」

共同体において学んだこと、教えたことをただそのままに置いておくのではなく、これをポートフォリオとしてしっかりと記録し、ファイル化することで、過去を振り返り、現在を見つめ、未来を構想するための宝箱にしなければなりません。これは生涯にわたって個人が「よりよく生きる」ための貴重なアーカイブの役割を担うものです。

3.「未知」と出会う・「未知」を知る ―庄内セミナーの趣旨・目的

私たちが作成したプログラムにおいて特に重点を置いたのが「身体知」でした。すなわち、とかく座学に傾きがちな学びを、実際に身を以って体験することで身に染みこませること、また座学だけでは学ぶことの難しい分野・領域を実体験することの重要性を強く意識しています。

慶應義塾の抱える三田、日吉、矢上、信濃町、湘南藤沢、芝共立キャンパスあるいは丸の内シティキャンパスなどの主要なキャンパスは首都圏に集中しており、学生たちは学びに関わる多くの時間をこれらのキャンパスで過ごしています。もちろん、慣れ親しんだキャンパスにおいて充実・集中した生活を送ることの意義には大きなものがあります。しかし、慣れ親しむがゆえに、ふと見落としてしまう大切なものがあるかもしれません。首都圏のキャンパスは、そうした見落としを再発見することや見慣れたものの中に新たなものを発見するための学びの場だと言えるでしょう。

と同時に、日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びのフィールドを広げることも教養教育には欠かせない要素であると考えます。その環境を与えてくれるのが鶴岡にほかなりません。残念ながら慶應義塾大学の学生たちの間での鶴岡タウンキャンパスの認知度は高いとは言えません。だからこそ私たちは鶴岡タウンキャンパスを基軸とする庄内地方に注目いたしました。日吉や三田のキャンパスを離れて、鳥海山・出羽三山を背後に控え、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた庄内をフィールドに、存分に心と体と頭を使いつくすプログラムを学生たちに体験させることが庄内セミナー最大の目的です。

また、セミナー参加者として、共催校の東北公益文科大学の学生が加わってより多様な経歴や視点、価値観を持ったグループを構成することで、普段経験することのできない活発な「知」の交流の場を作り出すことを目指してもいます。さらに、セミナーの一部を地元の方々に一般公開することでさまざまな世代にまたがる交流の機会を提供することも目的の一つです。

かつて庄内藩の藩校「致道館」では、学習者一人ひとりの天性に応じた長所を伸ばすために、詰め込み型の知識学習を排して自学自習を重要視した徂徠学を基盤に置いた教育が行われていました。社交力と共に自律的学習者の育成を目指す本プロジェクトは、そうした「致道館」の歴史を持つ庄内においてセミナーを開催することに大きな意義を見出しています。ここからは、必ずや新しいダイナミックな「知」の活動が誕生してくるはずですし、それが新しい学びの可能性や具体的な学習・研究の成果を生み出すことにもつながるはずです。これこそが「庄内セミナー」の趣旨にほかなりません。

4. セミナーのテーマ

庄内セミナーでは、総合テーマと基調テーマ、そして年度ごとのテーマを設定しています。総合テーマはセミナー全体を包み込む大枠です。庄内において、とりわけ「生命」に焦点をあてたセミナーであることを物語るものとして設定しています。これに対して基調テーマは、「心と体と頭と」を存分に使い尽くして「学び」の場を広げることを意識して、「行動する教養」あるいは「教養する」ことを強調しています。セミナーの土台を示すテーマです。そして、年度ごとに庄内からさまざまなテーマを選び出したものが年度テーマです。これが参加者たちにとってはグループワーク、プレゼンテーションの実質的な課題となります。すなわち――

◇総合テーマ:『庄内に学ぶ「生命(いのち)」－心と体と頭と－』

鶴岡を中心とした日本海・庄内平野・出羽三山が織り成す小宇宙とその歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、慶應義塾において進められている「生命」に関わる多様な研究・教育の成果をも取り入れることで、「生命」を総合的に考えることを趣旨としたテーマです。

◇基調テーマ:「知る・見る・表現する－行動の教養学入門」

◇2009 年度テーマ:「激動の時代を生き抜く－松ヶ岡開墾場に学ぶ生命(いのち)のつながり」

具体的には、松ヶ岡開墾場での開墾事業とこれに関わった元庄内藩士たちの精神的土壌を培った藩校・致道館における徂徠学に焦点を当てて、講義とフィール

ドアクティヴィティによる学びを経験しました。

5．セミナーの概要

セミナーのメイン企画である合宿セミナーの概要は以下の通りです。

◇期間：2009年8月31日～9月3日（3泊4日）

◇場所：松ヶ岡開墾場、松ヶ岡農場、東北振興研修所、慶應義塾鶴岡タウンキャンパス・東北公益文科大学大学院ホール、鶴岡市（旧藩校「致道館」、致道博物館ほか）、羽黒山

◇参加者構成：講師・学生・社会人・教職員スタッフ・コメンテーター

◇参加者数：講師4名・慶應義塾大学学生13名・東北公益文科大学学生6名・コメンテーター6名、協力者4名、スタッフ9名

◇宿泊場所：東北振興研修所

6．セミナー・プログラム

すでに記した通り、庄内セミナー全体は、プレ企画・合宿セミナー・活動報告会の三部構成となっていますが、今年度はこれにいくつかの関連企画が加わりました。関連企画も含めて、次にそれぞれのプログラムの詳細をご紹介します。

◇庄内セミナー・プレ企画　8月1日（土）

・13:00～14:00：事前説明会（慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1F 103・104号室）

合宿セミナー参加者に対するセミナー詳細についての説明を行いました。東北公益文科大学からの参加者に対しては、テレビ会議システムを利用して日吉

キャンパスと東北公益文科大学酒田キャンパスを結んでの説明会となりました。

・14:20～16:30：映画『おくりびと』上映会（慶應義塾大学日吉キャンパス協生館2F 藤原洋記念ホール）

合宿セミナー慶應側参加者に加えて、一般学生・教職員・塾員・地元市民・社会人を対象とした一般公開企画としました。240名ほどの来場者がありました。

・16:40～18:00：講演会慶應義塾大学日吉キャンパス協生館2F 藤原洋記念ホール）

映画上映に引き続いて、『おくりびと』の地元プロデューサーでもある宇生雅明氏（庄内映画村株式会社代表取締役社長）をお招きして、「山形庄内地方の魅力と庄内映画村の活動」をテーマにご講演いただきました。これも一般に公開しました。

◇庄内セミナー　8月31日（日）～9月3日（水）

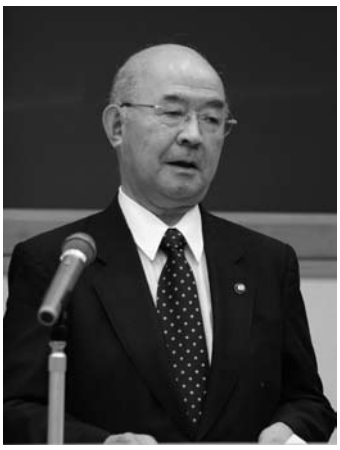
セッションⅠ：全体学習「庄内を知る」＝一般公開

【8月31日（日）】

14:00　参加者集合（TTCK）

14:00　開場（東北公益文科大学大学院ホール）

14:30　開会 ― 主催者・共催者挨拶、セミナーの趣旨説明



左から富塚陽一前市長、東山昭子氏、須藤良弘氏

14:45　来賓ご挨拶　富塚陽一氏（鶴岡市長［当時］）
14:55　セミナー基調講演 1
・テーマ：「庄内の風土　人と文学 ― 藤沢周平の世界」
・講師：東山昭子氏（鶴岡市総合研究所研究顧問）
16:10　セミナー基調講演 2
・テーマ：「湊町・酒田の発展」
・講師：須藤良弘氏（元酒田市史編纂専門委員）
17:20　セッションⅠ終了（その後、TTCK 内 レストラン「百けん濠」にて懇親会を開催）
19:30　東北振興研修所へ移動
21:30　羽黒修験・秋の峰入り（最終夜の「八朔祭」）を見学（羽黒山山頂）
23:30　宿舎着

セッションⅡ：「激動の時代を生き抜く ― 松ヶ岡に学ぶ生命のつながり」

【9月1日（月）】
〈フィールド・アクティヴィティ① ― 羽黒山を登る〉
05:00　起床

参道（2446 段の石段）を登る

羽黒修験・秋の峰入り―八朔祭

二の坂茶屋で休憩

案内役：伊藤賢一氏（羽黒山伏）

山頂・出羽三山神社（羽黒山三神合祭殿）

05:30　宿舎発
05:50　羽黒山登山
　　伊藤賢一氏（羽黒山伏・鶴岡市羽黒いでは文化記念館調整主任）による案内
08:30　宿舎着（途中、温泉施設「ゆぽか」で入浴）
08:45　朝食（松ヶ岡開墾場内「待カフェ」）
〈全体学習②：松ヶ岡に学ぶ生命〉
09:30　東北振興研修所案内（同研修所理事長・田中茂雄氏）
10:00　講義①「松ヶ岡に学ぶ生命」
　　講師：酒井忠久氏（財団法人 致道博物館館長）
12:00　昼食（「待カフェ」）
〈フィールド・アクティヴィティ② ― 松ヶ岡を知る〉
13:00　松ヶ岡開墾場内諸施設見学

国指定史跡・松ヶ岡開墾場

酒井忠久氏の講義（於・東北振興研修所）

松ヶ岡本陣（開墾事業の拠点）

松ヶ岡開墾記念館（一番蚕室）

一翠苑（二番蚕室）
1階右手には食事をいただいた待カフェがあります

・松ヶ岡本陣
・松ヶ岡開墾記念館
・庄内農具館
・庄内映画村資料館館長・平野克己氏による案内

15:45　松ヶ岡農場での農業体験（だだ茶豆・サツマイモの収穫作業）
松ヶ岡開墾場理事長・山田鉄哉氏による指導
（並行して、宿舎ではスタッフがイモ煮、おにぎり、デザート［だだ茶豆入りスイートポテト］の準備）

17:00　参加者全員による夕食準備と入浴（「ゆぽか」）

19:00　夕食（宿舎内食堂）

20:30　ミニ講演会「天体観測の新しい可能性を開く」
講師：表實氏（東北公益文科大学副学長）
＊フィールド・アクティヴィティ②の一環として予定していた「星を見る会」が悪天候で中止となったため。

21:30　自由時間

庄内農具館（四番蚕室）

庄内映画村記念館（五番蚕室）
右端は資料館館長・平野克己氏

おくりびと？

山田鉄哉氏による事前指導

収穫中！

運搬中？

洗う──夕食準備

田中茂雄氏（東北振興研修所理事長）による
研修所成り立ちについてのミニ講演会

剥く──夕食準備（ただし、セミナー・スタッフです）

食べる！

表實氏（東北公益部文科大学副学長）による
ミニ講演会「天体観測の新しい可能性を開く」

【9月2日（火）】

〈全体学習③：藩校・致道館と徂徠学〉

07:00　起床

07:30　朝食（「待カフェ」）

08:30　宿舎発

08:50　藩校・致道館着

09:00　講義②「致道館徂徠学と福澤徂徠学 ── 松ヶ岡の意味と意義」
　　講師：松村宏氏（慶應義塾大学名誉教授）

10:30　特別企画「庄内論語に触れる」
　　指導：細井功氏（致道館文化振興会議会長）

11:00　致道館見学

12:00　昼食（「桂や」）

〈フィールド・アクティヴィティ③ ── 調べる〉

13:00　致道博物館見学・同博物館所蔵松ヶ岡関連資料の閲覧

15:00　自由行動（鶴岡市内を中心としたグループワーク）
　　調査先：鶴岡市役所（市長へのインタビューなど）、鶴岡市郷土資料館、いでは文化記念館（伊藤賢一氏へのインタビューなど）、鶴岡市内各所（市民への聞き取り調査）

19:00　夕食（「待カフェ」）

20:00　自由行動（以後、翌朝までプレゼンテーション準備）

セッションⅢ：プレゼンテーション ── 一般公開

【9月3日（水）】

07:00　起床

07:30　朝食（「待カフェ」）

旧藩校・致道館

致道館見学

松村宏先生による講義

講義風景

細井功氏（特別企画：「庄内論語に触れる」）

記念撮影

08:30　宿舎発
09:00　プレゼンテーション最終準備（東北公益文科大学大学院ホール）
09:30　開場
10:00　開会
10:05　プレゼンテーション開始（1 グループ 10 分＋質疑 10 分）
・第 1 班「山伏がおしえてくれたこと」(10:10 ～ 10:30)
林　靖英（慶應義塾大学 文学部 1 年）
鈴木　駿（慶應義塾大学 経済学部 2 年）
土岐田彩（慶應義塾大学 商学部 3 年）
佐藤陽香(東北公益文科大学 公益学部 3 年)
菊地高史（慶應義塾大学 理工学部 4 年）
・第 2 班「温故知新～受け継がれる徂徠学～」(10:35 ～ 10:55)
保元大輔（慶應義塾大学 経済学部 1 年）
佐々木勇輔(東北公益文科大学 公益学部 2 年)
神野　翔(慶應義塾大学 総合政策学部 2 年)
奥泉佳子(東北公益文科大学 公益学部 3 年)

菊池安奈（慶應義塾大学 文学部４年）

・第３班「致道館における教育～藩校再考～」（11:00 ～ 11:20）

廣瀬高志（慶應義塾大学 法学部２年）
佐々木玲應奈（慶應義塾大学 法学部３年）
竹内奈月（東北公益文科大学 公益学部３年）
鈴木佐知子（慶應義塾大学 文学部４年）

・第４班「中間報告・パースペクティブ2050at庄内」（11:25 ～ 11:45）

横山　翔（慶應義塾大学 経済学部１年）
川井俊輝（東北公益文科大学 公益学部２年）
佐藤和賀子（慶應義塾大学 法学部２年）
田中謙伍（慶應義塾大学 環境情報学部３年）
高橋　要（東北公益文科大学 公益学部４年）

11:50　コメンテーターによる評価・アドバイス
酒井忠久氏（財団法人 致道博物館館長）
酒井忠順氏（松岡物産株式会社社長）
松村　宏氏（慶應義塾大学名誉教授）
黒田昌裕氏（東北公益文科大学学長）
不破有理氏（慶應義塾大学経済学部教授）

13:00　閉会

（その後、「百けん濠」にて昼食会を開催・現地解散）

◇庄内セミナー活動報告会　　11月14日（土）

庄内セミナー活動報告会は、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて、以下の要領で開催されました。

なお、グループ・プレゼンテーションの内容については第２部をご覧ください。

・場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1Fシンポジウムスペースおよび日吉図書館

・報告会プログラム：

13:30　開会 羽田功［進行］（プロジェクト・リーダー／慶應義塾大学経済学部教授）

13:35　主催者挨拶　横山千晶（教養研究センター所長／慶應義塾大学法学部教授）

13:40　来賓ご挨拶　岩城公志氏（山形県鶴岡市東京事務所所長）

13:45　庄内セミナー紹介　羽田功

14:10　グループ・プレゼンテーション①（発表20分・質疑10分）

14:15 ～ 14:45
第１班「山伏がおしえてくれたこと」

会場：東北公益文科大学大学院ホール

14:50 ～ 15:20
第２班「温故知新～受け継がれる庄内の選択～」

15:20　来賓ご挨拶　清家　篤氏（慶應義塾長）

15:30　グループ・プレゼンーション②（同上）

15:30 ～ 16:00
第３班「致道館における教育～藩校再考～」

16:05 ～ 16:35
第４班「新たな地方モデル『素敵な田舎』庄内」（発表メンバーは鶴岡のプレゼンテーションと同じため省略）

16:40　コメント
酒井忠久氏（財団法人 致道博物館 館長）

酒井忠順氏（松岡物産株式会社社長）
松村　宏氏（慶應義塾大学名誉教授）
大歳恒彦氏（東北公益文科大学大学院 研究科長）
不破有理氏（慶應義塾大学経済学部教授）

17:45　セミナー関連展示企画『慶應義塾と庄内 ―「ハートの教育者」田中一貞』見学とギャラリートーク（解説・羽田功／於・日吉図書館）

18:15　閉会（その後、懇親会を経て解散）

・来賓（敬称略）
清家　篤（慶應義塾長）
酒井天美（財団法人致道博物館常務理事）
東山昭子（鶴岡市総合研究所研究顧問）
岩城公志（鶴岡市東京事務所長）
渡部幸一（鶴岡市企画調整課主任）
阿部知弘（鶴岡市東京事務所係長）
安達哲郎（庄内日報東京支局長）
佐藤裕樹（山形新聞鶴岡支社編集部）
白 迎玖氏（東北公益文科大学准教授）

◇庄内セミナー関連企画

5 月 23 日（土）
慶應義塾生活協同組合総代会会場に庄内展示ブースを設置

6 月 13 日（土）
慶應義塾生活協同組合「生協食堂祭り」に出展

10 月 10 日（土）
日吉フェスタ（慶應義塾大学・日吉商店街共催）に出店・物産販売

10 月 26 日（月）～ 11 月 17 日（火）
展示企画（慶應義塾日吉図書館）

慶應義塾大学生協総代会での展示ブース（5 月 23 日）

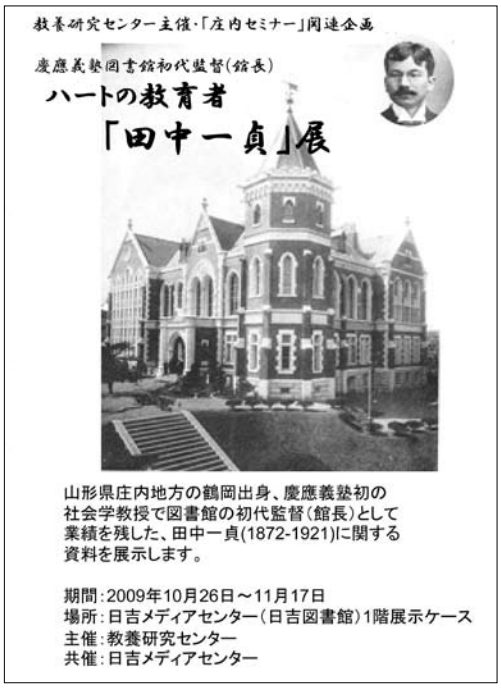
慶應義塾大学生協（日吉）・食堂祭り（6 月 13 日）

日吉フェスタ出店（10 月 10 日）

日吉フェスタ

慶應義塾大学生協（日吉）庄内フェア　庄内関連書籍展示

『慶應義塾と庄内 「ハートの教育者」田中一貞』
（田中一貞は鶴岡出身の慶應義塾大学図書館初代監督［館長］）
11月9日（月）～14日（土）
慶應義塾生活協同組合（日吉）･庄内フェア開催
ランチ提供（イモ煮＋庄内米おにぎり）
庄内名産菓子類の販売
庄内関連図書の展示･販売
協力：庄内観光コンベンション協会・慶應義塾図書館・慶應義塾大学日吉メディアセンター・慶應義塾福澤研究センター・慶應義塾大学生活協同組合（日吉）



図書館展示企画『慶應義塾と庄内 「ハートの教育者」田中一貞

慶應義塾大学生協（日吉）庄内フェア　庄内ランチ

慶應義塾大学生協（日吉）庄内フェア　庄内物産販売

庄内セミナー現地発表会

不破有理（教養研究センター副所長／経済学部学部教授）

2009年9月3日（木）午前10時より、東北公益文科大学鶴岡キャンパス、大学院ホールにて、現地成果の報告会が開催されました。今年は「激動の時代を生き抜く――松ヶ岡開墾場に学ぶ生命（いのち）のつながり」をテーマに慶應義塾大学の学生と東北公益文科大学の学生計19名が庄内について学び、最終発表の11月14日に向けて中間発表を行いました。

当日は地元の方々、鶴岡市役所、報道関係者を含め総勢100名近い方々がお集まりくださいました。司会は慶應義塾大学経済学部長田進准教授が務め、まずプロジェクトリーダーの羽田功経済学部教授によるプロジェクトの概要説明から始まり、引き続き、4グループに分かれた学生が15分間でパワーポイントによる発表を行いました。最後にゲスト・大学関係者の方々からコメントをいただきました。まず酒井忠久致道館博物館館長、郷土文学研究家東山昭子氏、そして酒井忠順松岡物産社長、松村宏慶應義塾大学名誉教授からそれぞれコメントを頂戴し、両大学より黒田昌裕東北公益文科大学長と慶應義塾大学経済学部教授不破有理がコメントをいたしました。会の最後は東北公益文科大学大学院研究科長の大歳恒彦氏が閉会の辞を述べられました。

【発表と質疑の内容】

グループ1は「山伏が教えてくれたこと～鳥居の上の世界～」と題して行いました。8月31日の八朔祭でみかけた山伏の姿や羽黒登山に随行してくださった鶴岡市役所勤務の山伏さん伊藤賢一氏のお話、東山昭子先生の講演で述べられた「お山がみている」という言葉に感銘を受けて、庄内の信仰と修験道の観点から庄内の現代に生きる人々の生活のかかわりを論じようとした試みです。「鳥居の上の世界」という表題の秀逸さに修験者の後藤さんからも好意的なコメントが寄せられました。グループ2の「温故知新～受け継がれる徂徠学」と題した発表は、松村先生の講義から学んだ徂徠学の考えと、東山先生との話から得た「鶴岡らしさとは」への疑問に答えようと、精力的に短期間でまとめた力作でした。過去への意識と新しいものを取り入れる気質、古いものと新しいものの調和をどのように結び付けているのかという問いに、鶴岡市長への突撃インタビューの結果も踏まえた中間発表となりました。この場を借りて、学生の思いにおおらかに応えてくださった富塚陽一鶴岡市長（当時）に心より謝意を表したいと存じます。鶴岡工業高等専門学校の安斎弘樹准教授から、鶴岡のモデルとして徂徠学から論を展開しているが、徂徠学が万能だったのか、人口が同程度の10万人都市として参考になりそうな発展モデルがあるかどうかというご質問がありました。またさらに鶴岡市民の加藤さんから鶴岡に慶應の生命先端研究所がある必然性を感じるかどうかという問いには、生命の科学を扱う研究所とは、鶴岡の自然、凛とした風土の特殊性に潜在力があるからこそ、生命を研究する先端研究所の存在意義があるのではないか、と学生が落ち着いて答えた姿は頼もしく感じられました。

グループ3の「致道館における教育～藩校再考～」は致道館の教育を現代に生かせるのではないか、との着眼点から発表をまとめました。致道館の設立の目的から説き起こし、初代校長の白井矢太夫のことばを引いて、「教育の道を示せば、学生自ら学習するようになること、学問は教わるものではなく、自分で学びとるものだ」という自学自習の主張に感銘を受けたようです。さらに朱子学との相違を比較すると、徂徠学が現代のゆとり教育の趣旨に類似すること、また個々人に則した学ぶ道筋を示せばおのずと学ぶようになるという教師へのアドバイスともいえる教訓を読み取り、致道館の教育方針が現代におけるエリート教育に転用できるのではないかとの提言へとつなげようとしています。藩校の見学をもとに、地元図書館で調べた結果を簡潔にまとめることができました。コメンテーターの黒田先生からは、

今後の計画として挙げられた「新・致道館におけるエリート教育構想」に対してはエリートという言葉の用法に注意が必要だとの意見がありました。また慶應義塾大学SFCの田中君は個性重視、自学自習などの教育に対しては現在、揺り戻しの動きがあるように思えるが、世の中にどのような新しいメッセージを発していくべきかとの質問がありました。学生の教育の在り方への関心の高さを感じる発表と質疑でした。

グループ4「中間報告〜パースペクティブ2050 at庄内」と題して、「新たな地方モデル」として庄内の魅力を分析したいという思いが込められていました。昔話風に庄内の現在を語り始め、発表にアクセントを加える工夫がみられ、さらに「2050年の庄内を構想する」出発点としてまず、町の人々へのアンケートから「このまま変わらないでほしい」という思いを掬いあげている点は見事です。そのうえで、庄内の歴史を振り返り、松ヶ岡開墾の開拓を突き動かした「沈潜」の風、みずから切り拓こうとする力や公益的な社会を作ろうとする精神性が現代に生きていることを読み取ろうとしていました。今後は情報発信が要となること、また今ある資源を活かして新しいものを作り上げる必要性を指摘しました。「待カフェ」や庄内映画村などの試みを成功の例として挙げ、今後の街づくりの可能性と絡めて理解した点も今回の庄内セミナーで体験した成果といえるでしょう。だだちゃ豆の収益増を農業データで跡付けたことも説得的でした。

最終報告に向けて、立地の異なる二つの大学が協働する庄内セミナーの利点を生かし、役割分担を明示した点も方法論的に評価できるでしょう。今後の計画として、公益文科組は庄内でのフィールドワークとインタビューを中心に庄内の思いをまとめ、慶應義塾組は変わらない庄内のために何が必要なのか、まちづくりの方法を模索すること、最終報告会ではグループワークの報告が東北公益文科大学の河合君の学士卒業論文の骨子となる予定であることと成果への目配りもありました。

発表への質問には庄内の人口減、老齢化の現状がなぜ生じていると思うかとの切実な質問や、庄内銀行の方からは地域経済の活性化のための地元の有識者会議もあり研究に必要な資料の提供を申し出てくださる一方、若い発想から現実的な解決の糸口を得たいという地元の方の熱い思いが伝わりました。

黒田昌裕氏

スライドより（4班）	教育	思想	経済
過去	致道館教育 自学自修	出羽三山信仰 公益的な社会	伝統工芸 養蚕
現在	庄内論語	公益的な社会 （出羽三山信仰）	観光 だだちゃ豆
未来	良いテキストを残すこと	公益的な社会 文化は大切に残す	資源を活用して新しいものを作りだす

【ゲストおよび教員のコメント】

酒井忠久氏からは、短期間で発表をまとめ上げた学生の努力と力量に高い評価をしてくださったと同時に、古来より北前船で新しい文化も取り入れる土地柄なので、学生さんからも意見を寄せてほしい、また出羽三山は必ずお礼まいりをしなければならないといわれているように、必ず庄内に戻り、住んでほしいとのご意見をいただきました。単なる一過性の行事ではなく、庄内の未来につなげていきたいという酒井家18代目の当主としてのお気持ちの表れであったと思います。

東山昭子先生からは学生の集中力への高い評価をいただきつつ、各グループへの丁寧なコメントをいただきました。第1グループには、東北における生と死をめぐる資料があるので、資料を通して山伏信仰を捉えることが必要であろうとの点、第2グルー

プは庄内の気風を理解することも必要であろうし、庄内の情報発信の不足と地域の果たすべき役割について考えてほしいとのご教示があり、さらに第３グループには徂徠学は古きを守りながらも絶えず変化していった学問であることを踏まえ、仮説を立てて実証する方法論の必要性に触れていただけました。第４グループには食教育の理念と関係づけながら、「しなやかにしたたかに」生きる庄内の精神があることを理解すべきであるとのコメントと共に、背後には出羽三山が控えているというという温かい見守りをはぐくむ庄内らしいエールを、学生へ送ってくださいました。

つづいて酒井忠順氏は、外から見た庄内と中から見た庄内を改めて考える際に､観光客の数は映画『おくりびと』効果で増加しているが、歴史と伝統のある鶴岡をもっと知ってほしいという思いを強くしてらっしゃると述べられました。成果を最終報告会に向けて発表する折には時間を守るのが原則との重要な点をご指摘いただけました。さらに就職活動などに庄内セミナーで得たことを通して自分がやりたいことをみつめて頑張ってほしいこと、また鶴岡に戻ってきてほしいというお言葉に大きな拍手があり、このセミナーに対する庄内の方々の期待を新たに体感することができました。

松村宏先生は徂徠学と明治維新における西郷隆盛と松ヶ岡との関係についての論を展開されるとともに、庄内に存在する商業の中心である酒田と鶴岡の土地柄は正反対の価値観をもつが、異なる地域差、異なる価値観を徂徠学という大きな学問が包含しているとご教示くださいました。「頑張って」とは徂徠学では言わないそうで､「集中して悠々と、勉学をして下さい」と、学生を励ましてくださいました。

黒田先生は短期間の合宿でまとめた学生に集中力を評価してくださると同時に、徂徠学とは実学であり、江戸時代に即した徂徠学であるので、時代背景を押えたほうがよいのではないかという点、および徂徠学的な実学を積み上げていくことが公益の立場からも大切であろうとのご指摘がありました。エリート教育の実現とはなにか、言葉の使い方に注意が必要であろうと指摘もなさいました。

不破は松村先生の講義で示されたいくつかの「官と民」などのキーワードから明治時代の転換期を捉える上でも、また庄内の在り方を考える上での対立軸を設けることでより深い理解ができるのではないかと提案しました。全体としてグループ２にみられたように、問題設定から解決をどのように導き出そうとするのか、プレゼンの全体の構成を示すことによって発表の流れを作っていく工夫をするとよいのではないか、またグループ４のように、鶴岡の学生さんが現地の情報収集力を発揮し、慶應の学生は調査分析をするという二つの大学の協働力を生かした研究を進めることが大切であること、また致道館教育や荻生徂徠については精査された基本文献をもとに論を展開する必要があることを指摘しました。

最後に大歳氏より地元では気づかないことを慶應の学生と共に見直し、新しい発見をしたきっかけとし、発表に生かしてもらいたいという希望を述べられ、慶應側の教職員･学生の素晴らしいチームプレーを評価してくださいました。

【最後に】

庄内セミナーに向けて、『おくりびと』の上映会や庄内映画村社長の宇生雅明氏の講演などのプレ企画を通じで、庄内への理解を少しずつ深めたとはいえ、実質、本セミナーまではお互いにほとんど見知らぬ学生同士がグループを組み、おそらく初めて踏み入れた庄内の土地で体験したもろもろの刺激を、４日目にひとつのテーマに収斂させ、発表をするという作業をなし終えた学生の協働力と発表能力に、限りない可能性を感じる発表会でありました。また会場に集まってくださった地元の活性化をめざす市民グループの方々からのご質問や提言をいただけたことも特筆すべきかと思います。まったくの素人である学生たちの発表に地元の方々が関心をもってくださっているだけでなく、地域活性化に学生が貢献しうるかもしれないとの期待を寄せてくださっている様子を感じることができました。これは大学キャンパス内では決して体験できない出会いの相乗効果であろうと、あらためて本セミナーの可能性を示唆される場であったことを申し添えたいと存じます。本セミナーでは、本当に多くの方々にお世話になりました。とりわけ食の面では芋煮食材を教えて下さった酒井天美様、だだちゃ豆を大鍋で豪快に、かつまた、愛おしげにゆで上げてくださった東北振

興研修所の田中茂雄さんと高山邦雄さん、また発表の場に足を運んで下さった方々、すべてに目配りを多々してくださった東北公益文科大学の職員の方々、献身的にサポートをしてくださった鶴岡市役所の皆さま、ほんとうにさまざまなご配慮、ありがとうございました。心より、感謝申し上げます。

2009年度「庄内セミナー」報告書

グループ・プレゼンテーション

2009年11月14日（土）に活動報告会が開催され、庄内セミナーの最終成果を各グループが発表しました（会の詳細については、** 頁をご参照ください）。当日の発表原稿ならびにパワーポイントのスライドを掲載します。

第１グループ「山伏がおしえてくれたこと」

Gr.1 ５名	菊池高史（慶應義塾大学理工学部４年）	土岐田　彩（慶應義塾大学商学部３年）
	鈴木　駿（慶應義塾大学経済学部２年）	佐藤陽香（東北公益文科大学公益学部３年）
	林　靖英（慶應義塾大学文学部１年）	

第２グループ「温故知新　～鶴岡・未来構想～　未来につなぐ鶴岡のいのち」

Gr.2 ５名	神野　翔（慶應義塾大学総合政策学部２年）	菊池安奈（慶應義塾大学文学部４年）
	保元大輔（慶應義塾大学経済学部１年）	奥泉佳子（東北公益文科大学公益学部３年）
	佐々木勇輔（東北公益文科大学公益学部２年）	

第３グループ「致道館における教育～藩校再考～」

Gr.3 ４名	佐々木玲應奈（慶應義塾大学法学部３年）	鈴木佐知子（慶應義塾大学文学部４年）
	廣瀬高志（慶應義塾大学法学部２年）	竹内奈月（東北公益文科大学公益学部３年）

第４グループ「新たな地方モデル　『素敵な田舎』庄内」

Gr.4 ５名	田中謙伍（慶應義塾大学環境情報学部３年）	佐藤和賀子（慶應義塾大学法学部２年）
	横山　翔（慶應義塾大学経済学部１年）	川井俊輝（東北公益文科大学公益学部２年）
	高橋　要（東北公益文科大学公益学部４年）	

第1グループ

山伏がおしえてくれたこと

林　靖英／鈴木　駿／土岐田彩／佐藤陽香／菊地高史

1. はじめに〜山伏との出会い

私たちは、庄内セミナーを通じて、幾多の歴史、食べ物、文化に出会い、貴重な新しい体験をすることができた。上流武士たちによる松ヶ岡の開墾や、今なお論語の素読が続けられている致道館といった「歴史」―だだちゃ豆や芋煮に代表される庄内の美味しい「食べ物」――『おくりびと』に代表される映画舞台としての「新たな産業」――さまざまなものに出会ってきた。その中で、私たちが一番心を動かされた場所は、羽黒山であり、そして一番心を動かされたのは、山伏であった。初日（8月31日）の晩に、私たちは八朔祭を見に行った。修験を終えられる修験者たちが神社に集まる、丁度その時を目の当たりにした。霧が立ち込める夜の境内に白い装束を着た修験者たちが集まり、一人ずつ「うけたもう！」と声を発する光景は、とても印象的なものであった。翌日（9月1日）の朝は、山伏の方のご案内のもと、杉並木の中の2,446段の石段を上り、羽黒山頂上の出羽三山神社を参拝した。三日目（9月2日）には出羽三山記念館といでは文化記念館を訪れ、学芸員の方のお話を頂くことができた。その方は、前日は山伏さんとして私たちの先達となってくださった方であった。

私たちは、羽黒山という一番心を動かされた場所を軸に、庄内を見ることを試みた。出羽三山の修験道から、生と死とが入れ子の構造をなす死生観を眺めた。それをもとに、「沈潜」や「他言無用」などの庄内の精神的文化の中で、出羽三山がどのような役割を担ってきているかを考察した。

2. 出羽三山と修験道

出羽三山を形成する三つの山は、庄内平野の南東側にそびえ立つ羽黒山・月山・湯殿山を指す。

これらの各々の山には寺院や神社が混在しており、三つの山にある寺社を総称して出羽三山と呼ばれている。

出羽三山の開山は、6世紀末の、第32代天皇崇峻天皇の子の蜂子皇子である。蜂子皇子は、海路を北上し、三本脚のカラス（ヤタガラス）に導かれ、羽黒山を登拝し、月山・湯殿山をも感得し、三山の開山となった。

出羽三山には、羽黒山に出羽三山神社と荒沢寺があるように、さまざまな宗教が混在している。これは神仏習合と呼ばれる形態であるが、神道や仏教のみならず、道教や密教なども含まれている。古くか

図1. 空から眺めた出羽三山

表 1. 出羽三山を構成する三つの山

山	標高
羽黒山	419m
月山	1984m
湯殿山	1504m

ら神仏習合の形をとってきたが、明治維新のときの神仏分離令のときに、強引に国家神道として寺院が切り離されるなどの歴史も持っている。

山は川下の平野に豊かな水を恵み、その水が田畑を潤して作物を実らせる。そのために、古来、日本において山は敬われてきた。また、「お山が見ているから、悪いことはできない」という考え方も定着してきた。これは日本各地でみられることであるが、庄内では特に強く定着していた。

出羽三山の修験道において、羽黒山は「現世」、月山は「死後」、湯殿山は「再生」という意味を持っている。すなわち、修行において三山をめぐることが、「羽黒山で現世を生き、月山で死後を安らぎ、そして湯殿山で新しく蘇る」という、擬死再生の意味を持っているのである。ここでの月山が「先祖」を意味することにより、「先祖がお山となって私たちを見ている」と、先の考え方がより身近なものになったとも考えられる。

擬死再生とは、厳しい修行を経ることで、生きながらにして死に、生まれ変わり、神に近づくという思想である。修験者たちは、修行中の様々な体験の中で、日々生きることができるすばらしさを再認識する。この修行を積み、験力を修めた者こそ、我々が出会ってきた「山伏」という存在である。また、修行を極め、生きながらにして仏になったのが即身仏である。即身仏は、庄内地方には多く残っており、庄内地方の宗教を特徴づけるものとなっている。

3. 出羽三山の運営

鶴岡と羽黒山を結ぶ道路に、道路を跨いだ大きな鳥居が存在する。江戸時代はこの鳥居 (があった場所) を境に、庄内藩の城下町・鶴岡と、修験者たちが集まる寺院・羽黒に管轄が分かれていた。つまり鳥居の上の世界―鳥居を挟んで羽黒側は、藩の力が及ばないところであった。この二者の関係は決して

図 2. 鶴岡と羽黒山の間の道路にある鳥居
（羽黒山側が「鳥居の上の世界」）

良好なものだけだったわけではなく、水利をめぐった争いごとなどもあった。

現在の出羽三山を存続させようという力の源は、宿坊が集まる麓の集落・手向の旧山麓衆徒である。古来の宿坊と道者の関係は、手向と千葉県などにおいて今なお脈々と続いている。また、この旧山麓衆徒はすぐれた組織性を持って出羽三山を運営している。羽黒山の石段の横に杉並木を植え、それが現在の羽黒の風光明媚な景観をなしている。また、1949 年に国からの国庫供進金が廃止されて、出羽三山神社が自力運営をしなければならなくなってからは、神社は観光客の取り込みに力を入れてきている。具体的には、麓から羽黒山頂に至る有料道路の建設や、バス網の整備などが挙げられる。月山にも 8 合目までバスが開通し、手向では古来の道者に加えて観光客が増大していった。

現在の出羽三山が存続しているのは、出羽三山神社にすぐれた教義があるからだけというのでは決してなく、このような現実的に観光客を集めるための動きと、それを支える組織の力による貢献が大きい。

4. 出羽三山の死生観

ここでは、出羽三山での修行の具体例として、荒沢寺にて 8 月 24 日から 8 月 31 日まで行われる「秋の峰」という修行に着目し、そこにどのような死生観があるのかを考察した。

24 日に行われる笈からがきは、葬式を意味するもので、峰における本尊である笈に経をあげる。25 日には梵天を堂の方へ向けて倒す儀式をする。これは男

女の交わりを意味し、修験者たちはここから荒沢寺に入る。儀礼は一の宿から三の宿までに分かれている。荒沢寺は母胎の意味をもっている。
南蛮いぶしや断食などといった修行の内容は、ただ単に擬死再生を表すだけでなく、普通の人間が母胎内で成長して仏になる段階とされている。荒沢寺の秋の峰には、現在の生活からの死と、仏としての性格を備えた人間としての再生があると考えられる。

5. 庄内の精神的文化の中での出羽三山

ここでは、「公益」というキーワードをもつ庄内の精神的文化において、出羽三山が持つ役割というものを捉える。そのために、出羽三山と同様に修験道のメッカとして著名な、熊野三山を引き合いに出し、出羽三山と比較することで、精神的文化における「庄内の独自性」をあぶりだすことを試みた。

蜂子皇子が出羽三山の開山となったのが6世紀末であったのに対し、熊野三山の開山は4世紀頃である。

両方の開山の話において、ヤタガラスという三本脚のカラスが登場する。五来によれば、三本脚のカラスは熊野の象徴であり、羽黒が熊野の影響を受けていたことを示すものであるという。

熊野三山の修験者は本山派と呼ばれているのに対して、出羽三山の修験者は羽黒派と呼ばれている。

熊野は、神話においてイザナミが葬られたことや、その急峻な山岳地形によって「死の世界」とされてきた。「熊野に行くことは浄土に行くこと」とされていたように、熊野には日常とかけ離れた「辺境の地」という意味合いが古くからある。一方で、出羽三山においては月山が「死の世界」とされているが、こちらはむしろ地元の人たちにとっての日常の「そばにある」という意味合いも強くなっている。

気候に着目すると、出羽三山を抱える庄内地方は、冬に雪が多く、吹雪や、年を通して風害が多い地方である。対して、熊野三山を抱える紀伊半島南部は、年平均降水量が4000mm前後に達する多雨地帯である。

熊野三山は2004年に高野山とともにユネスコの世界遺産「紀伊半島の霊場と参詣道」に登録されたが、出羽三山は2009年現在、世界遺産には登録されていない。

以上の観点から、出羽三山を熊野三山と比較してきたが、出羽三山が庄内の精神的文化にもたらす影響に一番強く結び付くのは、「死の世界」のスタンスであると考えることができる。双方の「死の世界」のスタンスの違いから、

山が平野を潤して人々にいのちをもたらし、
人々が死ぬと山になって、湯殿山でまた蘇る

という、(庄内平野－出羽三山)の地域の中で完結した、入れ子のような形の死生観の存在が、「庄内の独自性」としてあぶり出される。

次に、同じ庄内地方の、図2の鳥居の向こうの庄内藩に眼を向ける。江戸時代以降、庄内藩では、藩校の致道館において徂徠学が定着した。出羽三山と徂徠学の間には、歴史的に直接的なつながりはみら

れない。しかし、この二つに共通していえることをあえて列挙してみるなら、次のことが挙げられる。
まずは、観光客を集めている出羽三山神社の傍ら、質素に粛々と修行をおこなっている荒沢寺や、「沈潜」を重んじる致道館において、どちらとも内在する価値を重視していることがあげられる。
ここで、修験者たちは、必ずしも自分たちの自己満足のためだけに修行をしているわけではない。たとえば、即身仏は、世を思って、人を思って、自らを生きたまま仏となしたのである。そこには庄内を語る上でのキーワードとなる、「公益」の精神がある。そして、さまざまな宗教が交じり合って、山岳信仰と修験道として確立した出羽三山―論語などの原典を素読することによって庄内を支える人材を育てる致道館―両者とも、他を受け入れて、それを独自の形にしていこうというスタンスがある。

6. まとめ

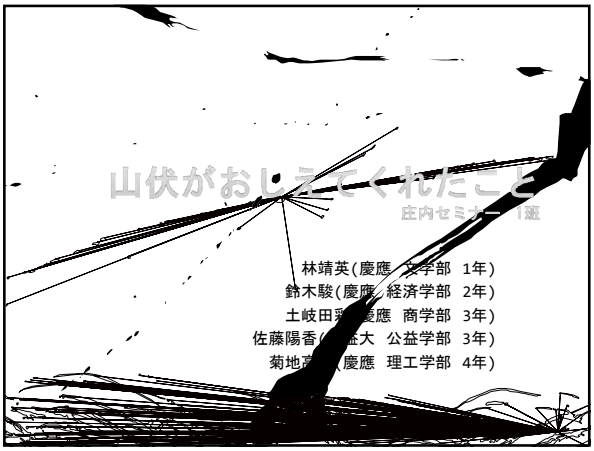
庄内平野のバックにそびえ立つ羽黒山・月山・湯殿山の三つの山は、「田畑を潤してくれる」「お山が見ている」という山岳信仰の対象であるとともに、現世→死後→未来という流れをもった修験道の山でもある。これから、庄内平野と三つの山との間でローカルに完結する「いのち」のサイクルが形成されて、入れ子のような死生観が庄内に定着したと考えることができる。自分が生きている間に世のため人のために施したことが、死んで、また生まれ変わり、庄内平野に戻ってきたときに助けてくれる。庄内の精神的文化を語る上でキーワードとなる「公益」は、この死生観がバックボーンになっていると考えることができる。

鳥居をはさんだ出羽三山と致道館を比べると、他にも、「内面を重視する」考え方や、「他を受け入れて、それを独自の形にしていこう」というスタンスがあった。これらのアンチテーゼを考えてみると、「排他的なスタンスを持ちながら、外に見えるものをきれいにしていく」ということであり、歴史的にこれにもっともあてはまるのは、神道を国教化して神仏習合を否定し、富国強兵を目指した明治政府となるのではなかろうか。

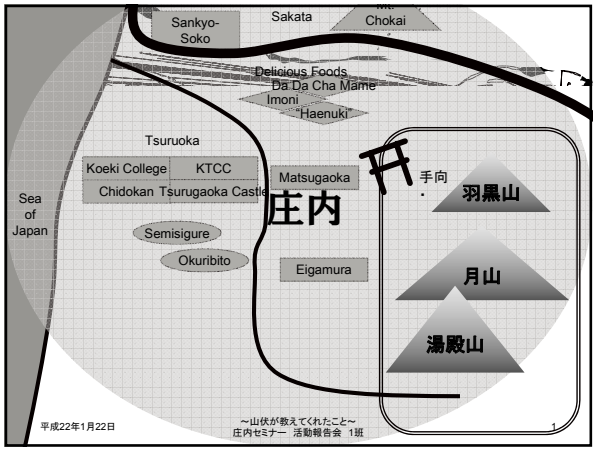
もっとも、どちらがいいか悪いかという議論は避けたい。ここで注目されたいのは、出羽三山の文化がこのような歴史の中で破壊されつつも、現代にも本質的には残っているということである。そしてこの出羽三山が、庄内平野の「公益」という考え方のバックボーンになっている。その「公益」の考え方が、最近では「映画舞台」として新たな発展をしつつある庄内を支えている。
今回の庄内セミナーで私たちが軸足を置いた出羽三山―「鳥居の上の世界」は、庄内の精神的文化にとってこのように、重要な役割を担っていると考えることができる。

参考文献

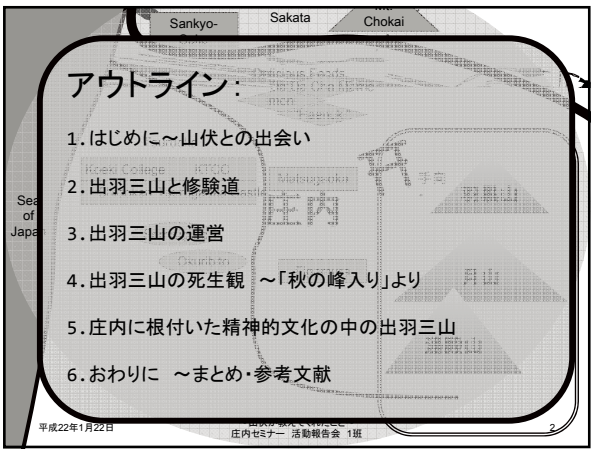
宮家準『羽黒修験　その歴史と峰入』、東京都：岩田書院、2000 年。
五来重『山の宗教』、角川書店：東京都、1991 年。
鎌田東二『神と仏の出逢う国』、角川書店：2009 年。
俳聖 松尾芭蕉・芭蕉庵ドットコム（オンライン）入手先：http://www.bashouan.com/（参照 2009-11-12）
出羽三山神社　パンフレット


山伏がおしえてくれたこと
庄内セミナー 1班
林靖英(慶應 文学部 1年)
鈴木駿(慶應 経済学部 2年)
土岐田彩(慶應 商学部 3年)
佐藤陽香(立大 公益学部 3年)
菊地高(慶應 理工学部 4年)

1


Sankyo-Soko
Sakata
Chokai
Delicious Foods
Da Da Cha Mame
Imoni
Haenuki
Tsuruoka
Koeki College
KTCC
Chidokan
Tsurugaoka Castle
Matsugaoka
庄内
手向
羽黒山
月山
湯殿山
Sea of Japan
Semisigure
Okuribito
Eigamura
平成22年1月22日
～山伏が教えてくれたこと～
庄内セミナー 活動報告会 1班

2


アウトライン：
1.はじめに～山伏との出会い
2.出羽三山と修験道
3.出羽三山の運営
4.出羽三山の死生観 ～「秋の峰入り」より
5.庄内に根付いた精神的文化の中の出羽三山
6.おわりに ～まとめ・参考文献
平成22年1月22日
庄内セミナー 活動報告会 1班

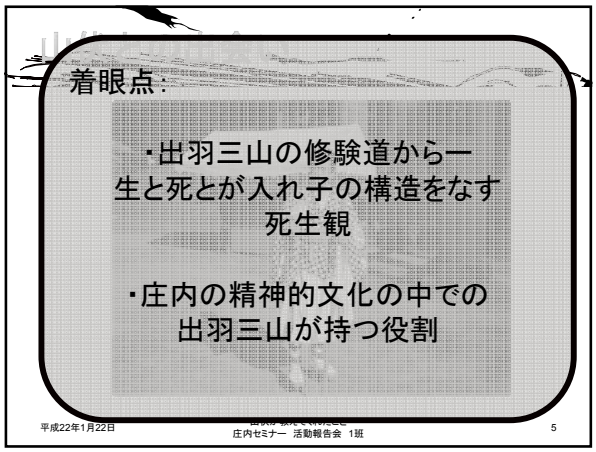
3

1. はじめに
羽黒山で
山伏にお会いして
平成22年1月22日
～山伏が教えてくれたこと～
庄内セミナー 活動報告会 1班

4

山伏との出会い
平成22年1月22日
～山伏が教えてくれたこと～
庄内セミナー 活動報告会 1班

5


着眼点：
・出羽三山の修験道から一
生と死とが入れ子の構造をなす
死生観
・庄内の精神的文化の中での
出羽三山が持つ役割
平成22年1月22日
庄内セミナー 活動報告会 1班

6

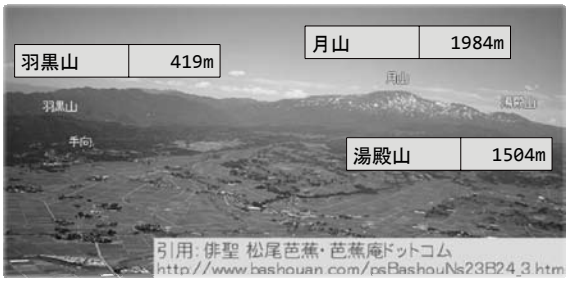
2. 出羽三山と修験道

- 出羽三山神社とは？
- 山岳信仰とは何か？
- 修験道とは何か？

平成22年1月22日 ～山伏が教えてくれたこと～ 庄内セミナー 活動報告会 1班 6

7

芭蕉も訪れた 三つの山



平成22年1月22日 ～山伏が教えてくれたこと～ 庄内セミナー 活動報告会 1班 7

8

開山・開祖

6世紀末、蜂子皇子
海路を北上し…

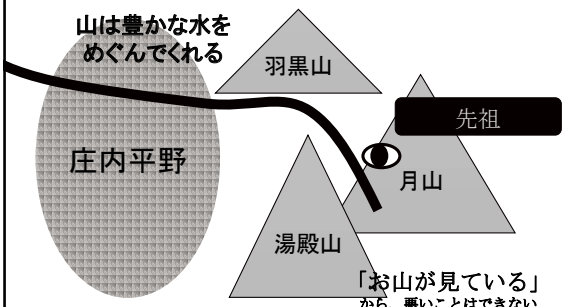
(日本フットボール協会のヤタガラス)

三本脚のカラスに
導かれ、羽黒を登拝
月山・湯殿を感得

平成22年1月22日 ～山伏が教えてくれたこと～ 庄内セミナー 活動報告会 1班 8

9

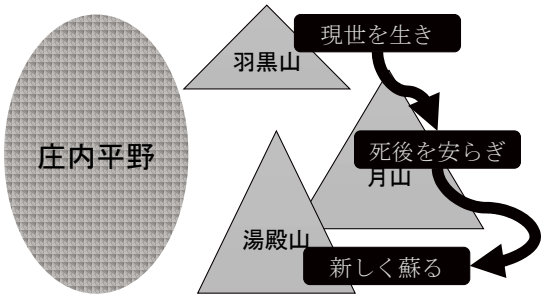
出羽三山の山岳信仰



平成22年1月22日 ～山伏が教えてくれたこと～ 庄内セミナー 活動報告会 1班 9

10

出羽三山の修験道



平成22年1月22日 ～山伏が教えてくれたこと～ 庄内セミナー 活動報告会 1班 10

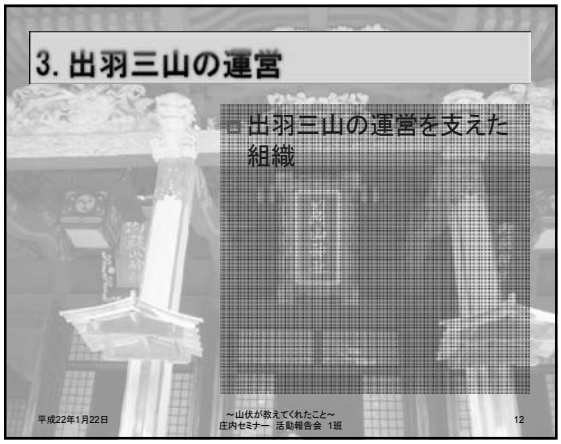
11

擬死再生…修験道の思想

- 擬死再生
  - 厳しい修行を経ることで、生きながらにして死に、生まれ変わり、神に近づく
  - 験力を修めた者が「山伏」
  - 様々な体験の中で、日々生きることのできるすばらしさを知る
  - 即身仏になった者も

平成22年1月22日 ～山伏が教えてくれたこと～ 庄内セミナー 活動報告会 1班 11

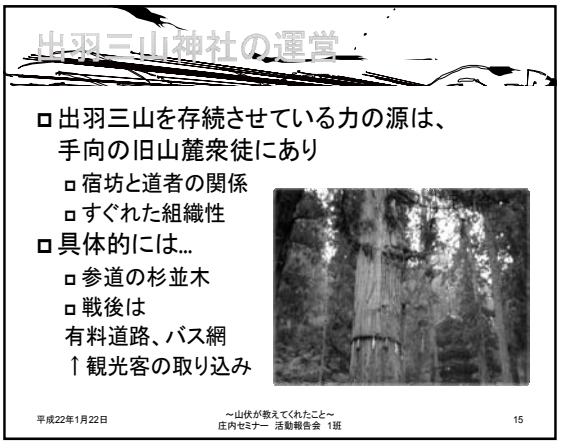
12



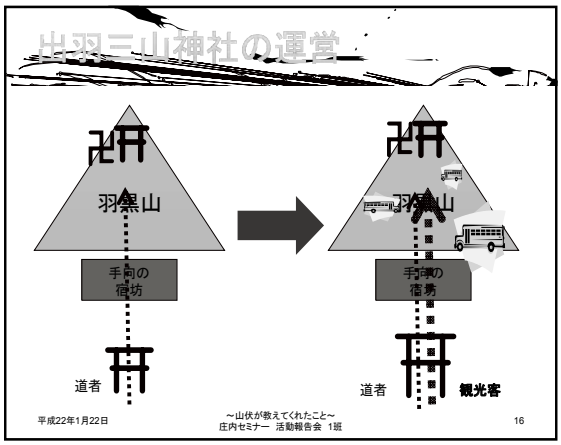
13

14

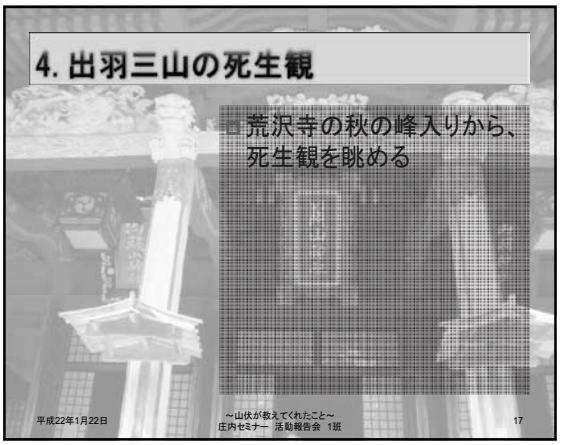
15



16



17



18

秋の峰入り

- 8月24日から8月31日まで、荒沢寺にて行われる
  - 24日　笈からがき
    - 峰における本尊である笈に経をあげる
  - 25日　梵天を堂の方へ向けて倒す儀式
    - ここから荒沢寺に入る
- 儀礼は一の宿、二の宿、三の宿に分かれている
- 荒沢寺は母胎の意味をもつ

Reference:
『羽黒修験　その歴史と峰入』 宮家準、2000年、岩田書院

19

秋の峰入り

※おもな修行とその意味

- 小木、閼伽、床散杖：鎮魂の儀礼
- 南蛮いぶし：地獄
- 断食：餓鬼
- 水断：畜生
- 相撲：修羅
- 懺悔：人間
- 鳴子：天

20

秋の峰入りから考える死生観

- 現在の生活からの死

および

- 仏としての性格を備えた人間としての再生

21

5. 庄内の精神的文化の中の出羽三山

- 庄内の精神的文化の中で出羽三山が持つ役割

22

羽黒と熊野の比較

	出羽三山（羽黒・月山・湯殿山）	熊野三山（本宮・那智・速玉）
開山	6世紀末	4世紀頃
ヤタガラスの導き	○	○
宗派	天台宗(羽黒・月山) 真言宗(湯殿) 神仏習合	神道
修験者	羽黒派	本山派
特色	即身仏	補陀落浄土
スタンス	死の世界(月山)、 **しかし 日常のそば**	死の世界、 非日常の辺境の地
地域の気候	冬の豪雪、吹雪 風害	台風 日本一の多雨地帯
世界遺産に登録	まだ	2004年

23

熊野三山との比較より

- 死の世界が「日常のそばにある」
  - 「生」と「死」が積み重なっている
- 特筆されるのは、入れ子の死生観
  - 庄内の独自性

山が平野をうるおして
人々にいのちをもたらし、
人々が死ぬと山になって、
湯殿山でまたよみがえる

24

鳥居の向こうと比較より
「公益」という言葉を通して

- 内在する価値の重視
  - 出羽三山の荒沢寺
  - 致道館の徂徠学の「沈潜」
- 公益の精神
  - 出羽三山の修験道･･･

    修験者たちは、単に自分の満足を求めるのではなく、修行を通じて他者のため社会のためになろうとした

    その精神を実践するための「擬死再生」

25

鳥居の向こうと比較より

- 他を受け入れて、それを独自の形にする
  - 出羽三山—さまざまな宗教の習合
  - 致道館—今なお続く原典の素読

26

6. おわりに

- まとめ
  - 「公益」という考え方のバックボーンとして
- 参考文献

27

まとめ

- 山岳信仰の対象であり、修験道の山
  - ローカルに完結する

    「いのち」のサイクルの形成
  - 生きているうちに施したことが

    庄内平野に戻ってきたときに助けてくれる
- 「内面重視」「他を受け入れる」
  - ⇔「排他的、外に見えるところを美化」

28

まとめ

- 「公益」の考え方
  - 公益：庄内の精神的文化のキーワード
  - 「公益」という精神的文化が

    「映画舞台」という新たな産業を支えている
  - 出羽三山もまた、そのバックボーン

    Ex.修験道、「お山(先祖)が見ている、」･･･
- 「鳥居の上の世界」もまた

  重要な役割を担っている。

参考文献

1. 『羽黒修験　その歴史と峰入』 宮家準、2000年、岩田書院
2. 『山の宗教』五来重、1991年、角川選書
3. 『神と仏の出逢う国』 鎌田東二、2009年、角川選書
4. 俳聖 松尾芭蕉・芭蕉庵ドットコム(オンライン)
   入手先：http://www.bashouan.com/ (参照 2009-11-12)
5. 出羽三山神社　パンフレット

31

第2グループ

温故知新
～鶴岡・未来構想～　未来につなぐ鶴岡のいのち

奥泉佳子／菊池安奈／佐々木勇輔／神野翔／保元大輔

1. イントロダクション（1）

「鶴岡は何か違う」

初めての鶴岡で、我々はある違和感を覚えた。それは、鶴岡の人々が自分たちの町に自信と誇りを持っているということだ。一般的な地方であれば、地元の人々は都会や他地域から来た人に対して、「なぜこんな何もない所に来たのか」と言うことだろう。しかし、鶴岡は違った。「よく来た。魅力を見つけて思いっきり勉強して」と何人もの鶴岡の人が我々に声をかけてきたのだ。もちろん、庄内セミナーに関わっている人たちと主に接したので、そのような声を聞くのは当然かもしれない。だが、そうだとしても、彼らから他地域とは違う自分たちの町への自信を感じられたのだ。そのことから、我々は鶴岡には、他地域にない‘何か’が潜んでいるに違いないと確信し、今回の庄内セミナーでは、その‘何か’を探る冒険に出ることにした。

先に結論を言うと、我々が探していたものは、タイトルをご覧になって分かる通り鶴岡の「温故知新」であった。鶴岡は高度な温故知新の地である。それが鶴岡の独特さと良さを生み出している源となっている。今から、我々の調査から発見したこと、問題意識、提案を踏まえ、なぜ温故知新の地なのかを説明していく。

2. 鶴岡に対する発見（2）

1）独特の存在である鶴岡

1. イントロダクションで、鶴岡の人々と話した時、この地は何か違うと感じたことを紹介した。このことをより強く感じた二つの言葉がある。「鶴岡らしさ」と「新しいもの好き」である。鶴岡には鶴岡らしさがあり、また新しいもの好きなところがある、という説明を受けた時に出てきた言葉なのだが、よく見るとこれらの二つの言葉には両立しにくい2つの性質が存在している。まず、鶴岡らしさの「らしさ」という言葉が出てくる時点で、そこに住む人々は、過去への憧れを持っているはずだ。あの頃は良かった、昔と変わらないでほしい、前に戻ってほしい、と願っているような共同体では、好んで使われる言葉であるように思う。次に、新しいもの好きという言葉は、明らかに未来に期待している。古いものを捨て新たなものを取り入れたい時、あるいは過去に否定的な時や、昔からの跋扈の状態に陥っているものを取り除きたい時に用いられているように思う。つまり、鶴岡は過去への「鶴岡らしさ」を意識しつつも「新しいもの好き」で未来を期待するという、過去も未来も意識している、おもしろい存在なのだ。多くの地方都市では、前者だけである。人口減少や高齢化、産業の衰退に直面している地方都市なら、繁栄し町が活気づいていた過去に郷愁の念を持っているであろう。ご多分に漏れず、鶴岡もその内の一つであるはずなのだが、なぜか鶴岡は両方の

性質を持っている。鶴岡は、独特の存在であることが分かった。はじめの「よく来た。魅力を見つけて思いっきり勉強して」という言葉は、それを証明しているように思う。

2）フィールドワークで分かった鶴岡

鶴岡の町を歩き、市民の方々の意見を聞いてみることにした。調べてみると、他にも鶴岡や庄内に対する発見があった。庄内平野は酒田と鶴岡を中心に発展している。酒田が商業的で社交的、商人気質、鶴岡が文化的で秩序を重んじ、武家気質である。この二都市が文化の中心として発展し、競争しあいながらも共存することで庄内は発展してきた。酒田も鶴岡と同じで新しいものを取り入れている。ただし鶴岡の方が他の人の顔色をうかがって行動するという意見が多かった。これは、新しいことを取り入れるときは見極めてから行なっていることと徂徠学（後述）の個性重視が関係していることが読み取れる。また、庄内の自然に関しては、西には海、その他の方位には山が位置しており、異種の鎖国状態を形成していた。もっとも日本らしい光景がここにはある、と小説家たちに言わしめたほどの自然豊かな土地である。美しい自然、四季折々の変化に富んだ風土や豊かな暮らしは、人々の心に信仰心を形成し、庄内の人々に「生命感」を宿した。

3. 徂徠学の歴史と致道館の開校（4～5）

庄内の藩学として取り入れられたのが、徂徠学である。徂徠学は、日本の独自性を強く出した儒学として特徴づけられる。ここでは、徂徠学の歴史、ならびに致道館の開校の経緯を紹介し、後の庄内における徂徠学の重要性を考えることへとつなげる。

1）徂徠学の歴史

江戸時代は鎖国もあり日本文化の凝集したものが一斉に花開いたと言われている。儒学においても様々な学説が出てきている。この中で一番主体になったのは、中国の宋時代の朱子が打ち立てた朱子学という考え方である。「道徳的な人間」「人格の公正な人間」を育成することを目的にした朱子学が日本でも発展した。それが徳川幕府に取り入れられ、官学にもなる。ただ、朱子学は儒学を壮大な哲学として集約しているが、あらゆる人に道徳を強要するというきらいもあり、反発もあった。それで伊藤仁斎の仁斎学や陽明学といった学説が出てくるが、江戸中期になって荻生徂徠が提唱した徂徠学が画期的な学問として広く受け入れられた。徂徠学とはどちらかというと治国安民の学問である。個人道徳を啓蒙するだけでは世の中を治めることができないのではないかというわけだ。元々儒学は、歴史上の偉人聖人がでてきて、世の中を、天下を非常にうまく治めていく、そういう人たちの理念・業績をもとに儒学の研究をしようという立場から、直接孔子の教えに迫ろうと古い文字を研究しその意味を悟る（古文辞学）ことを荻生徂徠が一つの学問として作り上げた。したがって、朱子学とは違うものであり、その基盤となっているのが、政治をいかに良くしていくかということだ。古い時代の聖人と呼ばれる人たちが治めた政治を模範とした天下の治め方を、地方の各藩の一つの理念として考え、実際の政治に役立てようと徂徠学は説いた。ただ道徳や理論を示した朱子学とは違った形で受け入れられた。

2）致道館開校の経緯

庄内藩は、当時の家老・水野元朗の英断によって、

徂徠学を取り入れた。そして、家老・水野元朗の後を受け継いだのが、致道館初代校長を務めた白井矢太夫である。彼は、政治や困窮した農政を立て直す改革を行っている。その時の藩主・酒井忠徳は、「学問というものはこういう面で藩政に活かされるということを初めて知った。これは白井のおかげだ」という発言をしている。こうして、徂徠学は実際に藩政に非常に役立つ学問として受け入れられたのである。

庄内藩に徂徠学を取り入れてから80年余り経った1790年に、朱子学を正学とする「寛政異学の禁」が幕府より発せられるが、それにも関わらず庄内藩では徂徠学を教学にも取り入れて学校の規範にした。これが、1805年の致道館開校につながる。

酒井忠徳氏は、士風刷新（平和な世が続き、士気の乱れた武士の考え方や行動を正そうとすること）は教育の振興にあると考え、致道館を開校したが、忠徳氏が白井に士風刷新の方法について尋ねると、「少し時間がかかるかもしれないけれども、学校を建てて教育するしか方法はないでしょう」と進言したという。このことは、当時にしては、なんと賢明な考え方であったか。このようなすばらしい考え方を持った人物はそういなかっただろう。

致道館の教育思想は、徂徠学に基づくものだ。致道館の教育方針は、好きなことに興味を持たせる、それぞれの個性を重んじる、自学自習をすることで自分がやろうとする志を持たせる、というもので、大きな特色となっている。これらを実践させ、知識を詰め込むだけではなく、学ぶ意欲を高める教育をし、本当の学問をさせようとした。当時としては画期的な考え方である。そのような致道館の学びの精神が、現在にも脈々と受け継がれている。鶴岡の学術・教育の根本になっているのだ。

4. 致道館の徂徠教育から分かること（4～5）

1）現代に求められている教育を既に実践

個性尊重、自学自習、学びの意欲向上など、今求められている教育を既に200年前から実践していた。会業と言う、今のゼミのような少人数であるトピックを討論し学びを深化させることもやっていたそうだ。やっと大事だと叫ばれ出した教育を、既に取り入れていた致道徂徠教育は、良い教育とは何かを理解していたのだと思う。それを受け入れた庄内藩の判断に驚く。

2）徂徠学を受け入れた庄内藩は、昨今必要とされる補完性原理に類似

補完性原理というのは、基本的には個人や小規模グループのできないことだけを政府がカバーするという考え方である。この考えの基本には「個人の尊厳」があり、国家や政府が個人に奉仕するという考え方がある。補完性原理は個人および個人からなる小グループ（家族、ボランティアグループなど）のイニシアティブを重視する。EC（現EU）と加盟国各国との原理で採用され、日本の民主党政権でこの考え方の元で改革が進められ、新しい公共として注目を集めている。これに、致道徂徠が似ているのだ。

一般的な江戸時代の学問は、儒学を含め、ただ道徳や理論を示すだけに終わる。しかし致道徂徠学は、一武士自らが自分たちの藩の政治をいかに良くしていくか、考えさせることに基盤を置いている。政治を模範とした天下の治め方を、地方の各藩、とりわけそこにいる武士が考えることを理念としており、実際の政治に役立てようと致道徂徠学は説いた。

実際に、先述にもあるように、庄内藩に徂徠学導入の任務を受け継いだ、致道館初代校長 白井矢太夫（藩の執行部ではない！）が、政治や困窮した農政を立て直す改革を行った。その結果、藩主・酒井忠徳は、学問を学んだ非執行部の武士白井を讃え、「学問というものはこういう面で藩政に活かされるということを初めて知った。これは白井のおかげだ」と言った。これは、藩主やその周りの執行部だけが藩の政治をするというのではなく、学問を学んだ一武士 白井が藩の政治に関わるという、当時にしては考えられないことを庄内藩は成し遂げた。これを藩主の酒井も白井も当然のことと言うかのように認め学んでいる。白井は、自学自習、個性尊重などの教育を実践する致道徂徠学を自らが体現したのだ。

かつてケネディ大統領は、「国民は政府に何かを求めるのではなく、政府のために自らが何をできるかを問うべきである」と有名な文句を残した。政府になんでも頼りっきりではなく、個人が何をできるかを考え実行するのが大事なのである。これは日本の今においても重大な問題である。行政の役割に対

する個の役割を増やす「新しい公共」の考え方は、ここ数年のトレンドとなっている。

今の時代でもなかなか難しいことを、200 年前の庄内藩は既に成していたのだ。それを支える思想も根付いていた。この事実は、すごいとしか言いようがない。

3）福澤諭吉の思想と類似

福澤諭吉は、基礎学問としての徂徠学を幼少期から青年期にかけて学んだ。松村宏先生によると、福澤諭吉は徂徠学者であったということだ。したがって、根本思想は徂徠学であった可能性が高い。「独立自尊」や「半学半教」は致道徂徠教育の教育方針と似ている。初期の慶應義塾も致道教育と方針やカルチャーが似ていた可能性が高い。ちなみに、当時の明治の学者の中で、徂徠学を基礎学問とする者は多かったという。

4）徂徠学を取り入れた文化的土壌

江戸と遠く離れていながら、当時の最高の学者の意見をすぐに取り入れたというのは、庄内に文化的土壌があったからだろう。明治維新後に西郷隆盛と深い結びをするが、時代の一流の人物と親交を結ぶという庄内の風土は優れている。

5）自然環境と合っていた

庄内は、海と山に囲まれた地域である。その地形から、外から入ってくるものを堆積しつつも、消化をし、ろ過してきた。雪崩のように外部のものを取り入れず、自分のペースを作った。庄内では、徂徠学が溶け込み、徂徠学が息づいてきたのはこのためだと考えられる。

5. 富塚陽一前鶴岡市長にインタビュー（3）

鶴岡に滞在中、富塚陽一前鶴岡市長に一鶴岡市民としてのお考えをインタビューした。

1）ご自身が致道館教育を受けて育ったことについて（本文中は富塚氏の発言をまとめたもの）

徂徠学では、無理やり覚える体験をした。苦しい経験、悩んだ経験をした結果、体に深く学問がしみ込んだ。その経験が、今の自分のがんばる活力となっている。鶴岡の伝統を自分なりに解釈し、それをエネルギーにするのはおもしろいことだ。

致道館教育を行ってきた鶴岡というのは、実践哲学を養う所だ。それは生き方であり、チャレンジだ。生命を感じることであり、健康であればよいのだ。都会の論理や単なる経済学的なもの（東京資本の工

場を持って来て経済を活性化させよう、という安易な考え方）が通用する所ではない。

今あるものを知的に工夫することの方が、鶴岡で新しい産業を創出することにつながる。これは、徂徠学に基づいた考え方である。

これは、江戸時代の子どもの遊び方に似ている。元々あるものを使って遊びを見つける。

2）インタビューから分かったこと

市長ご自身も、徂徠学を体現されている。先に説明した通り、徂徠学は200年前から、今の社会でも求められている教育を既に行っていた。富塚氏が言う実践哲学というのはそのことであり、これはよく慶應義塾でも叫ばれている「実践知」であると考える。それは生き方であり、チャレンジであり、生命を感じることである、とおっしゃっている。私はこれに、新たなヒントが隠されているように思う。

鶴岡で新たな産業を生み出すには、今あるものを知的に工夫するやり方が必要である、という考え方は納得できる。例えば、ある田舎では、眠っている元気な高齢者の労働力を活かしたことで、高齢者の収入を増やし、町の社会保障費を軽減させ、町政状態が良くなったという事例がある。また、少子高齢化に伴う外国人労働者受け入れの問題にしても、細かい議論は別にして、労働力不足分を外国人で補ったらいいじゃないか、という論が目立っているが、就業意思のある高齢者と女性の活用で、年率5%の就業人口増加により、十分に賄える試算が出ている。何でも新しいものを取り入れたり作ったりすることで、産業は活性化すると思いがちである。しかし今あるものを工夫して活用することで、実はうまくいくこともあるのだ。その視点を得ることができたのが大きかった。致道徂徠教育の特徴が活きているように思う。

6. 身体性を伴った意思決定（6～8）

1）致道徂徠学は、「実践知」の学問

庄内の豊かな自然が人々に与える感性と致道館の徂徠教育。　5. 富塚陽一前鶴岡市長のインタビューから分かったように、200年前から致道徂徠学を取り入れてきた鶴岡は、実践哲学を養う所であると言う。これは、生き方であり、チャレンジであり、生命を感じることであるとされ、これは慶應義塾でも叫ばれている「実践知」であると考えると述べた。これを、もう少し論を展開したいと思う。

まず生命を感じることは、明らかに庄内の自然が影響をしていることは想像できる。この庄内セミナーが、「生命」をキーワードに開催できたのも、庄内のどこよりも美しく、四季折々の変化にとんだ風土があるからこそであると感じる。

2）先進的に「実践知」を可能にした庄内

次に、「実践知」とは何か。これはよく、問題発見・問題解決型の学びの際に用いられる言葉である。世の中の解決が困難な問題に対して、頭で理解するだけではなく、五感で感じながら問題解決策を実践することで、はじめて本質的な問題発見につなげられ、実現したいビジョンに近付け、問題を解決の方向に導くことができる。実践をしながら得るこの問題発見こそが、「実践知」である。この実践知は、五感を必要とする。したがって、身体の完成に則った行動をしなくてはならない。この身体の感性である‘身体性’というものに、庄内の場合、豊かな自然から来る生命感が扶助しており、より繊細な実践知を可能にしているのではないか、と考える。

そもそも、徂徠学の徂徠の語源を探ると、徂は「分かっている目的を取りに行く」、徠は「まわりまわって未知の新しい価値を持ってくる」という意味である。まさしく、実践知である。致道徂徠学の考え方がいかに先進的なものだったのか、驚いてしまう。

7. 問題意識（10～13）

1）課題

庄内や、その中でも鶴岡のポテンシャルは高い。先述の中では、鶴岡に対する発見として、致道徂徠学に関する驚きの事実をまとめ、鶴岡に対する期待感が増した。

しかし、今の鶴岡を見てみると、楽観視できない事実がある。まず、人口減少や少子高齢化に伴う労働力人口の減少、工業出荷額の減少などがある。また大きな問題として、鶴岡を支える徂徠学が明治以降縮小していることである。現状を見てみることにする。

2）現状把握

鶴岡市市勢要覧（平成 18 年）によると、人口は 1980 年は 15 万 3,330 人、1990 年は 15 万 840 人、2000 年は 14 万 7,546 人、2005 年は 14 万 2,384 人であり、1980 年ころから一貫して減り続け、近年は毎年 1,000 人前後で減り続けている。その減少率は、東北の中でも高いと言われている。

鶴岡市の統計書（平成 19 年版）によると、一人あたりの市民所得も徐々に減少しており、1996 年は 2,524 千円から 2004 年は 2,291 千円と減少した。農家数も減り続け、1975 年は 10,970 戸、1980 年は 10,398 戸、その後徐々に下降を続け、2000 年は 6944 戸、2005 年は 6,428 戸になった。近年は約 10％の戸数が減少している。経済活動別市内総生産を見てみると、1996 年から 2005 年までの 10 年間で、産業全般で減少している。第一次産業は 23,700 百万円から 17,044 百万円、第二次産業は 168,030 百万円から 137,981 百万円と減少し、一方、第三次産業は 311,047 百万円から 322,227 百万円と増加している。鶴岡の強みと思われる第一次産業は縮小の方向へと向かっている。

徂徠学も、そもそも藩学として取り入れていたのは庄内藩と桑名藩だけで、現代にも徂徠学が根付いているのは庄内だけといっても過言ではない。幕府が徂徠学を正学ではないとし、明治維新以後は、徂徠学は佐幕派の学問として排除を受けた。当時の学者は基礎学問として徂徠学を学んだ者も多く、当時の情勢を見て自分は徂徠学者だということを表に出さなかった。そのような経緯もあり、徂徠学をしぶとく受け継いでいる所は、日本国内から殆どなくなった。

8. 庄内のこれから（14 ～ 18）

1）庄内・鶴岡のスタイル

上のような現状を見た時、果たしてこれは庄内や鶴岡にとっての個性なのか、孤独なのか。人口減少やその他産業衰退といった要因が経済的な鈍化につながり、何より近代日本における徂徠学の縮小が思想的な孤立へとつながっている。それが個性であれば、庄内・鶴岡は自らがその道を選択したということになるし、孤独であったとすれば、意思に反してそうせざるを得なかったのだと考えられる。我々は、それは庄内・鶴岡が自らが選択した個性だと考える。

まず徂徠学の縮小に関しては、庄内が思想的には孤立したのは明治以降である。武士道のもとで成り立つ徂徠学は、封建制を成り立たせる精神であった。もう少し述べると、徂徠学は封建制への復古を目的とするもので、近世上級武士道文明を確立し、日本の近代社会の基礎を築いていた。しかし、明治維新から過半の上士層の虚弱化のために残る健康な庄内をも圧服して下級武士文明路線を突き進んだ。これは上士層の精神である武士道の低下を招き、封建制の崩壊（少なくとも表向きでは）、さらに庄内徂徠学の縮小へと向かう転機だった。これを打開するため、庄内は西郷隆盛と手を組み、明治 8 年までにクーデターをするつもりでいた。庄内と薩摩で立派な独立国をつくるつもりだったが失敗。このことに関して、松村宏先生は「庄内の人は、100 年以上我慢してきた。」とし、庄内は日本の選択を 100 年以上我慢し、その一方で自らのスタイルを維持し続けたとしている。鶴岡に酒井家がずっと住み続けてくれており、市民も代々の酒井家藩主に対して「殿」と呼び続けているのは、その表れである。

これらを鑑みて、徂徠学を守り続け独自の個性的なスタイルを維持し続けた庄内・鶴岡は、経済の鈍化は、むしろ庄内・鶴岡が自らのスタイルを守ってきた結果だったのかもしれない。そのことから、鶴岡を見る時、経済が活性化していないからいけない、という単純な見方ではなく、鶴岡のスタイルをいかに持続し後世につなげるか、この良さを明治以前のように他地域に認めさせたり広めたりするにはどうしたらよいのか、というポジティブな見方をするべきだと我々は考える。

2）庄内・鶴岡スタイルがメインストリームに

最近では、この庄内・鶴岡の残してきた財産が内外で認められてきているように思う。例えば全国様々な所で始まった子どもへの論語教育。藩校からの流れで論語を行っているのは庄内のみである。政治面では、「4.　2）徂徠学を受け入れた庄内藩は、昨今必要とされる補完性原理に類似」でも紹介したように、既に 200 年前の庄内が行っていた政体がやっとメインストリームになりつつある。教育面でも、

6. 身体性を伴った意思決定で紹介した「実践知」は、20年ほど前から始まった大学改革のキーワードとなっており、庄内スタイルの教育が現代の学問の在り方として認識され始められている。

3）庄内・鶴岡の選択 -「温故知新」-

以上でふれたように、庄内の個性は活かし続けるべきだ。大事なのは、庄内が他の地域（日本）に思想的、経済的に合わすのではなく、徐々に時代に認められ再発見され始めた、自らのスタイルを守り続けることだ。したがって、庄内が経済的に発展するために他地域の資本を呼んで発展させようとしたり、東京の考え方を適用させようとしたりするのではなく、庄内のスタイルをどう他地域に広めるか、また認めてもらったときにどう庄内のプレゼンスを高めリードしていくかが重要になってくる。そして、庄内が100年以上前に実現したかった庄内致道徂徠学に基づく世界を少しでも実現することが、庄内のこれからの選択ではないか、と考える。

この地は、日本の近代化を受け入れながらも、崩れないスタイルを一貫して維持し続けた。古くからあるものを大事にしながらも、新しいものを取り入れてきた。これこそが、「温故知新」である。この特性を活かし、庄内致道徂徠学という財産も、未だに残している。我々は、この庄内の姿勢に感動した。今後も、庄内が変化を続け、かつ庄内が今の庄内のスタイルで在り続けてほしいと願っている。

9. さいごに

知れば知るほど、深みが増してくるのが庄内・鶴岡である。鶴岡は何か違う、という感じを覚えてから、鶴岡に対する驚きと勉強の連続であった。鶴岡には神秘的な歴史と文化が多く宿っている所であると感じた。

激動の時代を生き抜くには、見えづらくなってきた世界を動かす原理を探さなければならない。例えば資本主義にしかり民主主義にしかり、我々は高等教育までそれらがすばらしい、万能である、という前提で教育を受けてきた。だが実際のところは消去法的に存在した社会システムにすぎない。今ある資本主義は確かに存続すべきだと思うが、よりよい民主主義を構想しなければならない時が来ている。世界各地では、この模索が始まっている。日本もそうである。そんな時期だからこそ、200年前からある庄内の致道徂徠学が様々な形で見直されている気がするのである。

我々は、庄内・鶴岡を知ってしまったからには、これからも今後の日本の進路を見ながら、庄内・鶴岡のこれからを考える責任があると考えている。庄内・鶴岡の応援団をしていけたら幸いである。

参考文献

鶴岡市 市勢要覧（2007年、鶴岡市企画部企画調整課）
鶴岡市の統計書（2007年、鶴岡市企画部企画調整課）
生命いきいき文化都市創造プラン――鶴岡市総合計画（2009年、鶴岡市企画部企画調整課）
広報つるおか特集　　文化の継承（2008年、鶴岡市）
松村宏先生 庄内セミナー当日配布資料
「公共哲学とは何か」（ちくま新書）山脇直司
「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（岩波文庫）マックス ヴェーバー 大塚久雄訳
「ヒューマンセキュリティと総合政策学」（SFC総合政策学ワーキングペーパーシリーズ　No.81）梅垣理郎
「グローバル化時代の地方ガバナンス」（岩波書店）山口二郎・山崎幹根・遠藤乾編
第10章 日本における補完性原理の可能性 ― 重層的なガバナンスの概念化をめぐって

ご協力いただいた方々（順不同・敬称略）皆様に感謝申し上げます。
松村 宏先生
富塚 陽一前鶴岡市長
鶴岡市役所総務部総務課 秘書の皆様
鶴岡市役所企画部企画調整課の皆様
鶴岡市観光案内所の皆様
東山 昭子先生
丙申堂の皆様
無量光苑　釈迦堂の皆様
鶴岡市民の皆様

（文責：神野翔）

2009年度 庄内セミナー 最終発表

温故知新
～受け継がれる庄内の選択～

目次
1. 中間発表時の鶴岡での発見
2. 身体性を伴った意思決定
3. 以上をふまえて
4. 問題意識
5. 庄内の選択
6. 庄内の未来を見る
7. お世話になった方々
8. 参考文献

2班
慶應義塾大学　経済学部1年　保元 大輔
東北公益文科大学　公益学部2年　佐々木 勇輔
慶應義塾大学　総合政策学部2年　神野 翔
東北公益文科大学　公益学部3年　奥泉 佳子
慶應義塾大学　文学部4年　菊池 安奈

1

1

中間発表時の 庄内セミナー 2009

1. 鶴岡での発見

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

○フィールドワークで分かった庄内
- 鶴岡には、古いものを大切にしながら新しいものを取り入れる力がある。
  - 「鶴岡らしさ」「新しいもの好き」
  - 両者をバランス よく共存させる能力に秘められたものとは何か。
    →鶴岡の人々の気質・暮らし・歴史に答えがあるのでは。
- 鶴岡と酒田
  - 酒田が商業的、社交的、商人気質
  - 鶴岡が文化的、秩序を重んじ、武家気質
  - 互いに文化の中心として発展し、競争しあいながらも共存することで庄内は発展してきた。

2

2

中間発表時の 庄内セミナー 2009

1. 鶴岡での発見

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

○富塚陽一 前鶴岡市長を訪問
- 徂徠学に関するインタビュー
  - 徂徠学では、無理やり覚える体験をした。
  - 苦しみ悩んだ結果、体に深く学問が染み込んだ。その経験が、がんばる活力となる。
  - 鶴岡の伝統を自分なりに解釈し、それをエネルギーにするのがおもしろい。
  - 実践哲学を養う所。生き方。チャレンジ。
  - 今あるものを知的に工夫する鶴岡。
    →徂徠学に基づいた、考え方。

3

3

中間発表時の 庄内セミナー 2009

1. 鶴岡での発見

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

○徂徠学の特徴
- 日本の独自性を強く出した儒学。
- 日本の武士道が達成した、儒学の完成体。
- 中国の周王朝の封建制に最も再現した儒学。
- 日本で取り入れたのは、庄内藩と桑名藩のみ。
- 明治期の学者の土台となる学問。
- 福澤諭吉先生も、基礎学問として徂徠学を学んでいた。

4

4

中間発表時の 庄内セミナー 2009

1. 鶴岡での発見

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

○庄内で徂徠学が息づいた要因
- 海路で大阪とつながり、山に囲まれている。
- 外から入ってくるものを、消化し、ろ過してきた。
- 日本全体が中国からの堆積。庄内は特に顕著。
  →庄内では、質の高い徂徠学教育。
- 地域の中で自分のペースを作ろうとする。
- 崩れないスタイルがある。
- 雪崩のように外部のものを取り入れない。
- 徂徠学を貫いた庄内の気質。

5

5

庄内セミナー 2009

2. 身体性を伴った意思決定

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

○「身体性を伴った意思決定」は何なのか。

◇異郷から語られる庄内
- 西には海、その他の方位には山
  →一種の「鎖国状態」を形成
  →「もっとも日本らしい光景がここにはある」
  BY 横光利一、ある飛行家
- 美しい自然、四季折々の変化に富んだ風土や豊かな暮らし
  →人々の心に信仰心を形成

●庄内の自然が人々に与える、繊細な感性が関わっているのではないか。

6

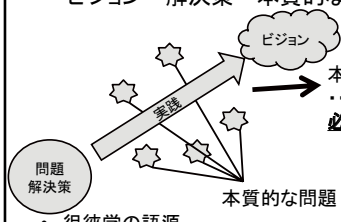
6

庄内セミナー 2009

2. 身体性を伴った意思決定

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

▸「問題発見・問題解決」のアプローチ
- ビジョン→解決策→本質的な問題発見



本質的な問題発見→「実践知」
・・・**身体性を伴った意思決定が必要**

- 徂徠学の語源
  - 分かっている目的を取りに行く。(ビジョンに向かう)
  - まわりまわって未知の新しい価値を持ってくる。(解決のための本質的な問題発見)

7

7

庄内セミナー 2009

2. 身体性を伴った意思決定

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

- 本質的な問題発見→「実践知」
- ・・・身体性を伴った意思決定
- 庄内だから養われる感性。
- 豊かな自然、に豊かな「生命感」の存在がある。

- 富塚陽一前市長へのインタビューより
  - 「生命を感じるところ。健康であればよい。」
  - 「都会の論理や単なる経済学的なものが通用しない所。」

8

8

庄内セミナー 2009

3. 以上をふまえて

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

- 観光客として: 庄内には自然の恵みが充実
  人当たりがよい
- 学ぶ者として: 驚くべき藩校の歴史
  現代にも息づく徂徠学の存在感
- 儒学の伝統息づく人々の気質が、庄内のポテンシャルを生み出すのではないか。

- これらの利点を生かし、庄内地方に活気を与えることは出来ないだろうか

9

9

しかし・・・

負の側面の存在。庄内の孤立化

- 東北での2大人口激減区:庄内、会津
- 盛岡、仙台↑人口増
- 明治以来、徂徠学が縮小の方向へ。
- 労働力人口の著しい減少。
- 商業出荷額の減少。
- 中間発表時の視点
  - 本当に世界の流れに付いていけるのか。
  - 産業を創出→最低限の生活水準がなければ、庄内のポテンシャルを活かせられない。
  - 庄内の孤立化を解消するにはどうすればよいか。10

10

庄内セミナー 2009

4. 問題意識

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

11

11

庄内セミナー 2009

4. 問題意識

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

▸庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

- 個性・・・自ら選択をした。
- 孤独・・・意思に反して、そうせざるを得なかった。

- 我々は前者だと考える。
- 負の側面は、大事な選択をした結果であり、全否定はしなくて良いのではないか。

12

12

4．問題意識

庄内セミナー 2009

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

▸庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

- 庄内が 孤立 したのは、明治以降。
  →明治以降と今現在を視る。
- 明治以降
  – 明治以来の日本の仕事の仕方が間違っている。はじめから間違っていた。（松村先生談、致道館にて）
- 今現在
  – 金融危機の発生。株主至上主義の否定。
  – 日本がおかしいと思い始めている。

13

13

5．庄内の選択

庄内セミナー 2009

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

▸庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

- 「武士道やプロテスタンティズムが薄らいでくると、資本主義は暴走する。」
- 封建制の崩壊が、社会を間違った方向に向かわせた。

14

14

5．庄内の選択

庄内セミナー 2009

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

▸庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

- 徂徠学は封建制への復古を目的とする。
- 徂徠学は、近世上級武士道文明を、確立した。
  – 日本の近代社会の基礎を築く。
- しかし、明治維新から過半の上士層の虚弱化のために残る健康な荘内米沢をも圧服して下級武士文明路線を突き進んだ。→上士層の精神である、武士道の低下。→封建制の衰退。
- 封建制を経ないで、近代化しようとすれば、うまくいかない。（松村先生談）

15

15

5．庄内の選択

庄内セミナー 2009

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

▸庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

- 明治8年までにクーデターをするつもりだった。
- 荘内と薩摩で立派な独立国をつくるつもりだったが、失敗。
- 「庄内の人は、100年以上我慢してきた。」
  – 庄内は、他の日本との 孤立 を100年我慢し、自らの選択をしてきた。
  – 肯定して見ている。
- 中間発表・・・「徂徠学 の負の側面として、庄内の経済のよどみが指摘される。」実は正では？

16

16

5．庄内の選択

庄内セミナー 2009

発見 調査 徂徠学 問題 現状 インタビュー 未来

▸庄内の 孤立 は、「個性」か「孤独」か

- 伝統を保ちながら、進化してきた。
- 明治以降の日本の近代化を受け入れながらも、崩れないスタイルを一貫してきた庄内に感動。
  →他の地方とは違う、庄内が持つ「個性」。

17

17

6．庄内の未来を見る

庄内セミナー 2009

発見 身体性 まとめ 問題 選択 未来

- 庄内スタンダードで、日本の未来を構想することは、庄内の未来を構想することにつながる。
  – 庄内だけの未来を構想するのではなく、庄内のスタイルが日本のスタイルになる未来を構想するのがよいのではないか。
- まずは、庄内で息づく、致道館教育、徂徠学を普及する。
  – 個性尊重、自発学修など
- 庄内が守ってきたものが必要とされる兆しが見えてきた。
  – 例：最近、「子どもに聞かせる論語」が流行る。

18

18

7. ご協力いただいた皆様

庄内セミナー 2009

- 松村 宏先生
- 富塚 陽一鶴岡市長
- 鶴岡市役所総務部総務課 秘書
- 鶴岡市役所企画部企画調整課
- 鶴岡市観光案内所の皆様
- 丙申堂の皆様
- 無量光苑　釈迦堂の皆様
- 鶴岡市民の皆様
- 慶應義塾 教養研究センターの皆様

ありがとうございました。

19

19

8. 参考文献

庄内セミナー 2009

- 鶴岡市 市勢要覧（2007年、鶴岡市企画部企画調整課）
- 鶴岡市の統計書（2007年、鶴岡市企画部企画調整課）
- 生命いきいき文化都市創造プラン―鶴岡市総合計画―（2009年、鶴岡市企画部企画調整課）
- 広報つるおか特集―文化の継承―

20

20

2009年度 庄内セミナー　最終発表

温故知新
～受け継がれる庄内の選択～

2班

慶應義塾大学　　経済学部1年　保元 大輔
東北公益文科大学　公益学部2年　佐々木 勇輔
慶應義塾大学　総合政策学部2年　神野 翔
東北公益文科大学　公益学部3年　奥泉 佳子
慶應義塾大学　　文学部4年　菊池 安奈

ありがとうございました

21

21

第3グループ

致道館における教育～藩校再考～

廣瀬高志／佐々木玲應奈／鈴木佐知子／竹内奈月

＊文中（ ）内はスライド番号

1. イントロダクション（1～2）

私たちは、庄内セミナーを通じて沢山の貴重な経験をさせていただいた中で、特に致道館に注目した。それは、致道館が1805年に設立された当時から、「個性重視」「自学自習」など、現代の教育に通じるような革新的な教育理念をもち、運営されていたからである。致道館の教育は、他の藩校とは全く異なる独自のものだった。その教育理念や手法、成功要因などを研究することにより、現代の教育に活かせる点を見出すことができるのではないかと私たちは考えた。以下、スライドの目次に沿って順に見ていきたい。

2. 藩校（3～6）

1）藩校とは（3、4）

藩校とは、藩当局が主として藩士の教育のために城下に設けた教育機関である。藩士の子弟はみな強制的に入学させ、庶民の子弟は基本的に入学できなかった。藩校が急増した時期は、18世紀後半以降であった。その理由は、その時期は幕藩体制の構造的矛盾と危機が進行しており、改革を迫られていたからである。よって、藩校での人材育成は、藩政の質と密接に関わるため、各藩にとって非常に重要なのであり、藩政改革と藩校の設立には密接な関係があった。主な藩校としては、福島の日新館、茨城の弘道館、岡山の花畠教場、山口の明倫館、熊本の時習館などが挙げられる。藩校では藩ごとに藩士の教育が任されていた。私たちのテーマで取り上げている致道館は、現在の山形県庄内地方に位置するところに設立された。

2）致道館設立の経緯（5）

致道館は、寛政12年（西暦1800年）、当時庄内藩主だった酒井忠徳が重臣の白井矢太夫を校長に任命して設立した。当時、庄内藩は財政危機に陥っており、農村も疲弊し、藩士の風俗も乱れていた。そんな中藩政改革の重要な施策として設立されたのが致道館である。「致道館」の名は、『論語』の「君子学んで以てその道を致す」という言葉からとっている。

3）他の藩校と致道館の比較（6）

では、特殊な藩校として注目されている致道館は他の藩校とどのように異なっていたのかについて、簡単な表をもとに見ていきたい。まず、他の一般的な藩校はその学問を朱子学と定めていたのに対し、致道館は徂徠学を藩の学問としていた。そして、一般的な藩校が詰め込み教育をしていたのに対し、致道館はゆとり教育を、同様にスパルタ的な教育に対し自学自習を推進していた。また、他の藩が画一的な教育を行っていたのに対し、致道館では個性重視の教育方針を取っていた。

3. 徂徠学（7～8）

1）荻生徂徠と徂徠学（7）

徂徠学を提唱した荻生徂徠（1666～1728）は、江戸中期の儒学者である。はじめは徂徠も朱子学を学んでいたが、朱子学批判をしていた伊藤仁斎に共鳴する。その後、仁斎の古義学より古典の解釈を徹底した古文辞学を提唱した。徂徠学は､「一世ヲ風靡」し､「徂徠学ニテ世間一変」したと言われ、それだけ多くの人が学んでいたようである。しかし、徂徠学は､寛政異学の禁（1793年）によって異学とされた。

2）徂徠学の特徴（8）

その理由は、儒学を個人道徳よりも社会制度・政策を重視する学問としていたので、被支配者に政治意識の覚醒を促す危険思想であるとされたからであった。

また、徂徠は画一的な人間のあり方を否定し、人間の多様性を尊重した。すべての人々が君子のような道徳的人間になることを目指したところで社会はうまく成り立たず、各人それぞれの材を発揮し社会一構成員としての役割を担ってこそ、社会は成り立つと考えていたからである。彼は門人の才能を愛し、それぞれの長所を伸ばすに任せて道徳や人格について厳しいことは言わず、自由な開放感を大切にしていた。

では、その徂徠学を基に、致道館ではどのような教育を行っていたのだろうか。

4. 致道館（9～18）

1）教育方法（9～15）

私たちは、致道館の教育から以下の6つの特徴を取り上げた。

①天性の重視とその開発
②興味の喚起
③自発的学習意欲の重視と自学自修
④会業について
⑤飛び級制度について
⑥賞与について

これから順にその特徴について見ていきたい。

①天性の重視とその開発

致道館開校時に、藩主酒井忠徳から教師たちへ、教育の目標・方針・指導上の留意点などを述べた命令書である「仰出書」が与えられた。その中で、計5回「天性」という表現が使われた。これは、能力差を認め、多様な個性を育てることを意図したもので、現代では当然のことであるが、19世紀初頭ということを考えれば、極めて注目に値するものだと言える。校長の白井矢太夫は、教師たちに「良いところをほめて伸ばせば、悪いところは自然に消え失せる」「教師には馬を扱う御者の心得が必要」ということを口頭で伝えていた。

②興味の喚起

幼年生徒にとって「学校は遊び所」となるよう、教師は変化に乏しい内容を飽きないようにさせ、興味・関心を起こさせるような創意工夫をしていた。また、子弟の無礼は注意するものの、それ以外は寛大に扱うなど緊張を緩和し、楽しみのうちに勉学できるように環境を整えていた。具体的には、面白い書物を見せ、遊び用のやり･太刀･木馬などをつくったり、和漢の故事を話し聞かせたりといったことである。「生徒たちが毎日学校に通ってゆったりと過ごしている間にいつの間にか学業や行いが身についているというのが真の教育」という考えのもと運営されていたようである。

③自発的学習意欲の重視と自学自修

致道館では、講義を聴講して知識を蓄積することのみ主とする修学方法は排した。句読所（小学校）では担任教師が指導するが、少数の英才教育となる終日詰（中学校）以上では自分が立てた計画に従って自分のペースで進める自学自修を主としていた。「学問は人から教わるものではなく、自分で学びとるものだ」ということが強調され、教師は生徒たちの学習相談の際も、進め方や調べ方の手がかりを与えるだけであった。生徒たちはすべての雑用から離れ、各室において修学に専念できる環境を与えられていた。

④会業について

致道館での特徴的な学習方法として、会業というグループ学習が挙げられる。会業は生徒相互の切磋琢磨の場であり、学力の自己評価あるいは反省の機会ともなっていた。従って､会業は激励の場にもなっていて、修学意欲を高揚させるものであった。また、これは自学自修の結果を確かめたり、深めたり、反

省したりする極めて効果的な修学法として重視されていて、出席が義務付けられていた。

教師にとっては、生徒の学力はもちろん、その「得手・不得手、短所・長所」がわかる場にもなっていて、指導の手がかりの場でもあった。また、教師たちも会業を開き、教材の研究成果を発表し合い、共同研究に努めた。

⑤飛び級制度について

飛び級制度とは、年数回行われる学業検閲に合格すれば、年齢や修学年数に関係なく進級・進学できる仕組みである。検閲は、一斉テストなどを行わず、学習中の態度や意欲、会業の準備度や発言、課題の成績、出席状況などを総合的に判断するもので、教師全員の話し合いで決めた。このことから、致道館では、教師たちがとても手のかかる大変な作業を厭わずやっていたことがわかる。

⑥賞与について

更に、モチベーションを高める工夫として勉学・行いなど他の生徒の模範となる者を誉め、褒美を与えていた。例えば、朝句読を一年勤続した者には扇子三本を与えたり、句読所に一年階席した者には書籍の難易度を易しいものから難しいものに変えたりしていた、という。「格別御用に相立つ人物」として役人に重用されるよう、学生たちは頑張って勉強した。

2）致道館における生活（16 ～ 17）

学則はかなり自由で、校長や教頭に一言いえば酒を飲んでも煙草を吸っても大丈夫だった。句読所（小学校）では、担任の先生が指導をし、終日詰（中学校）以上からは担任の先生がいないので授業はなく、ひとり勉強と会業が中心で、どうしてもわからない場合のみ先生に尋ねる形式をとっていた。そのほかにも、馬場・剣術・柔術・槍術・弓術・馬術など学業以外の活動も盛んであり、外から専門の先生を呼んで指導していた。また、月に一度は遠足があり、体力と忍耐向上を目指して 24 時間歩き通す、ということも行なわれていた。

3）致道館の教育成果（18）

致道館は、生涯 700 冊の著書を残し、日本のレオナルド・ダビンチともいわれた松森胤保や、北海道の開拓に尽力した松本十郎など、多くの優れた人材を世に送り出した。

また、徂徠学の教えを身につけた役人が多数輩出されたことで、学問を大切にし、行いを慎みしみ、競って行動する気風が生まれ、乱れていた藩士の風俗の改善がみられた。

5. 現代に活かせること（19 ～ 24）

1）致道館教育の基本コンセプト（19）

以上のことから、致道館で行なわれていた教育の基本的なコンセプトは、自由主義、個性重視、という二点であることがわかった。そして、このコンセプトは現代の教育、特に「ゆとり教育」が本来目指

そうとしていた理想に通じるものがあるのではないか、と私たちは考えた。

2）ゆとり教育（20）

ゆとり教育が目指したのは、個々人の特性や資質に応じて個性を生かす教育を充実させる、受身の暗記中心の学習ではなく児童・生徒が自らの力で学び自らの力で考えることのできる力を育成する、もっと学びたいという知的好奇心を育てる、学習意欲を向上させる、というものである。2001年に開始されたゆとり教育だが、2009年も基本的なコンセプトは変わらず、道徳教育を重視し、心をはぐくむことが目標とされている。具体的には、

①「読み書きそろばん・外遊び」を推進する
②校訓を見つめ直し、実践する
③先人の生き方や本物の文化・芸術から学ぶ
④家庭で生活の基本的ルールを作る
⑤地域の力で、教育を支える

といったものが挙げられる。ただ、生徒に「ゆとり」を持たせるために主要五科目の授業時間数が減少し、それぞれの科目について定着するべき事項も減少した。教育現場での混乱もあって、現状の「ゆとり」教育自体が当初の目的を達成できたとは言いづらく、学力低下の声が叫ばれた。その結果、また揺り戻しが起こり、覚えるべきとされる内容が増加するなどに至っている。

3）問題提起（21）

では、なぜ致道館ではゆとり教育と同じようなコンセプトである個性重視と自由主義を掲げながら、荒れた藩士の心を抑えるだけでなく、藩にとって「役立つ」人材を育成することができたのだろうか。それには会業、詩作、評価方法の3つが確立されていたからではないかと私たちは考えた。

4）活かせる点（22～24）

まず会業では、インプットだけでなく自分の意見を相手に伝えなければならないので、自分の意見を相手にわかりやすく伝えるためのアウトプットの場があった。自分の意見は相手からさらに質問や疑問点をぶつけられるため、それに的確に答えようと努力したり、一面的な自分の考えに気づけるようになったりと、インプット型の授業ではできないことがある。このとき指導教師は、生徒各自の個性を細かく把握していた。この会業はある程度の知識が身についてきたころ（現代で言えば中学生ぐらい）から始まり、学年が上になるにつれ増えていった。
詩作では、より面白い、味わい深い作品をつくるためにどうすればいいかということを考えられるので、その過程で発想力を身につけることができたようである。

評価は一回のテストで決めるのではなく、日々の学習意欲態度・日記などから日常の学習を総合的に判断して行われていた。年齢によって次の学年にいける制度は取っておらず、ある一定程度の水準を超えた者が上にいけるような制度を取っていて、良くできる者は飛び級することもあったようである。個々人の実力に応じて、できる人にはどんどん発展的な内容を教えるなど、画一的でない学習を図っていた。

ただ、これらは毎回日記を見るなどの方法により生徒の出来不出来を見分けて評価をしなければならず、指導側の負担が通常よりもかかっていた。このように考えると、個性重視のきめ細やかな指導をするために少人数教育が行なわれ、生徒との濃密なコミュニケーションを実現していたことが致道館教育のポイントだと言える。

では、これらの点を現在にどう生かせばよいのだろうか。このような教育を行うには大人数教育では難しく、指導できる生徒数には限りがある。そこで、これらの方法を公教育がやるのではなく、一般的に言われるような「塾」で行なうことはできないか、と私たちは考えた。
具体的には先ほど挙げた会業、詩作、評価方法などを取り入れる、というものである。会業ではゼミナール形式で授業を行い、詩作では生徒に毎日日記を書いてきてもらい提出して返還、評価方法では個々人を見るという意味で生徒それぞれの能力に合わせ、実力次第で発展的な内容も指導できるようにすれば良いのではないだろうか。

5） まとめ

この度の研究では、致道館の教育から現在の教育に活かせる点を抽出し、それを具体的に実行できる

ようにするにはどのような方法があるかを考えてきた。結論として、私塾のような形であれば、今すぐにでも少人数できめ細やかな教育が実現可能であると言える。しかし、私塾では、経済的に裕福な家庭の子供しか教育を受けられない、という問題がある。奨学金制度の構築も必要となるだろう。

公教育において、このような教育を実現することができれば、日本の教育はよりよいものとなるのでないかと私たちは考える。もちろん、日本全国一斉に導入することは難しいので、庄内がモデル都市として導入し、効果を検証していくことが考えられる。ますますグローバル化し少子化が進むと考えられる日本において、地方と日本全体が発展を続けていくためには、これまでよりも「自分で考え、問題を発見し、解決し、相手に自分の意見を伝えることのできる」力のある人材を多く育てることが必要である。これは喫緊の課題であると言える。また、地方が元気にならなければ、日本全体が発展することはないだろう。致道館では、200年も前から自ら学び深めることを重視し、個性を尊重して、伸長させる教育を行っていた。庄内には、優秀な人材を育成できる素地がある。だからこそ、庄内には新しい教育のケースモデルを創る使命があると思う。今後、更に実現性のあるプランの検討が望まれると考えている。

参考文献

【単行本】

河合敦『温故知新の旅ガイド　藩校を歩く』アーク出版，1994。

斉藤正一『庄内藩』吉川弘文館，1990。

佐々木茂吉『庄内藩の学校　致道館』鶴岡市教育委員会，1991。

山崎誠助監修『わが郷土鶴岡』郷土読本をつくる会，2002。

山形文化フォーラム実行委員会『山形文化フォーラム　出羽の国　藩物語』

【雑誌文献】

安藤豊「今、必要な学習目的観の革新（特集「ゆとり教育の見直し」を検討する）――（提言・なぜ今「ゆとり教育の見直し」か）」『現代教育科学』第48巻、第6号（585）、20-22頁、2005。

【Webサイト】

文部科学省HP「教育改革Q＆A～教育改革に関する様々な疑問にお答えします～」http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kaikaku/pdf/p96.pdf（2009年11月13日閲覧）

山形県鶴岡市観光連盟HP「庄内藩校　致道館」（このサイトの「もっと詳しく」を参照した）http://www.tsuruokakanko.com/cate/p0010.html（2009年11月13日閲覧）

山形県鶴岡市観光連盟HP「庄内藩校致道館の教育」（このサイトの、各リンク先を参照した）http://www.tsuruokakanko.com/ca02/chidokan/kyoiku.html（2009年11月13日閲覧）

致道館における教育
～藩校再考～

グループ3
佐々木玲應奈・鈴[illegible]佐知子
竹内奈月・[illegible]高志

1

目次

- 藩校に関して
  - ・そもそも藩校とは
  - ・全国の主な藩校
  - ・致道館設立の経緯
  - ・他の藩校と致道館の比較
- 徂徠学に関して
  - ・荻生徂徠と徂徠学
  - ・徂徠学の特徴
- 致道館の教育法
  - ・致道館の教育法
  - ・致道館における生活
  - ・致道館の教育成果
- 現代に生かせそうな点
  - ・致道館教育の基本コンセプト
  - ・ゆとり教育とは
  - ・問題提起
  - ・現代に生かせる点

2

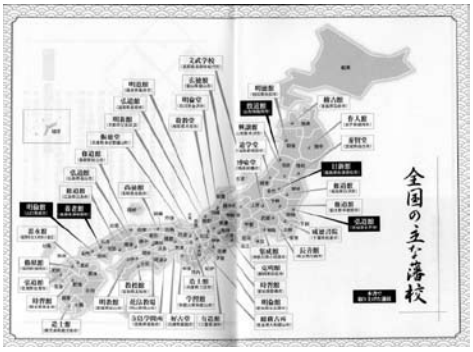
藩校～藩政改革と藩校の設立は密接な関係

藩校は、藩当局が主として藩士の教育のために、
城下に設けた教育機関である。藩士の子弟は皆強制的に
入学させ、庶民の子弟は入学できなかった。
時期的には、18世紀後半以降に急増。
理由：幕藩体制の構造的矛盾と危機が進行し、18世紀後半以降は
その克服のための改革時期

**藩校での人材育成は、藩政と質と密接に関わるため
各藩にとって非常に重要であったと言える。**

3

全国の主な藩校



4

致道館設立の経緯

致道館は、寛政12（1800）年、庄内藩9代藩主酒井忠徳が、
白井矢太夫を校長に任命して設立した。当時、庄内藩は財
政危機に陥っており、農村も疲弊し、藩士の風俗も乱れて
いた。藩政改革の重要な施策として、致道館は設立された。
「致道館」の名は、『論語』の「**君子学んで以って其の道
を致す**」からとっている。

5

他の藩校と致道館の比較

一般的な藩校	致道館
朱子学	徂徠学
詰め込み教育	ゆとり教育
スパルタ的	自学自習
画一的	個性重視

6

荻生徂徠と徂徠学

- 荻生徂徠(1666～1728)江戸中期の儒学者
- 朱子学を批判し、伊藤仁斎の古義学に対抗して「古文辞学」を提唱
- 徂徠学は「一世ヲ風靡」
  →「徂徠学ニテ世間一変」
- 徂徠学は、危険思想として寛政異学の禁（1793年）で異学とされた。

7

徂徠学の特徴

- 個人道徳よりも社会制度・政策を重視する
- 画一的な人間の在り方を否定し、人間の多様性を尊重
- 門人の才能を愛し、それぞれの長所を伸ばすにまかせて、道徳だの人格だのと厳しいことはいわない。自由な開放感を大切にする。

8

敬道館の教育法

6つの特徴
- 天性の重視とその開発
- 興味の喚起
- 自発的学修意欲の重視と自学自習
- 会業について
- 飛び級制度について
- 賞与について

9

敬道館の教育法

①天性の重視とその開発
- ・天性：能力差を認め、多様な個性を育てる
- ・「良いところをほめて伸ばせば、悪いところは自然に消え失せる」
- ・「教師には馬を扱う御者の心得が必要」

10

敬道館の教育法

②興味の喚起
- ・幼年生徒には、「学校は遊び所」
- ・教師は変化に乏しい内容を飽きないようにさせ、興味・関心を起こさせるように創意工夫
- ・子弟の無礼は注意するが、それ以外は寛大に扱うなど、緊張を緩和し、楽しみのうちに勉学できるように環境を整える。

11

敬道館の教育法

③自発的学修意欲の重視と自学自習
- ・上級に進むにつれて自学自修を主とした。
- ・すべての雑用から離れ各室において修学に専念できた。
- ・講義を聴講し、知識を蓄積することのみ主とする修学方法は排した。

12

致道館の教育法

④会業について

・会業は生徒相互の切磋琢磨の場であり、学力の自己評価あるいは反省の機会ともなり、したがって激励の場ともなって、修学意欲を高揚させた。

・教師にとっては会業を通じて生徒の学力はもちろん、その「得手・不得手、短所・長所」がわかり、指導の手がかりともなった。

13

致道館の教育法

⑤飛び級制度について

年数回行われる学業検閲に
合格すれば、年齢や修学年数に関係なく、
進級・進学できる仕組み。

14

致道館の教育法

⑥賞与について

勉学・行いなど他の生徒の模範となる者を誉め、褒美を与えた。

Ex).朝句読一カ年勤続:扇子三本

句読所一ヵ年階席:書籍(難易度:易→難)

その他、昼食・銀貨など

「格別御用に相立つ人物」として任用

15

致道館における生活

16

致道館における生活

- 学則はかなり自由

校長や教頭に一言いえば、酒を飲んでも煙草を吸っても大丈夫。

- 句読所(小学校)…担任の先生が指導する
- 終日詰(中学校)以上…担任の先生がいないので授業はなし、ひとり勉強と会業が中心→どうしてもわからない場合のみ先生に尋ねる
- 馬場・剣術・柔術・槍術・弓術・馬術

(外から専門の先生が来て指導)

- 月に一度は遠足(24時間歩き通す)

17

致道館教育の成果

- 優れた人材を輩出

→松森胤保(まつもりたねやす)

松本十郎(まつもとじゅうろう)

- 徂徠学の教えを身につけた役人を多数輩出したことで、学問を大切にし、行いをつつしみ、競って行動する気風を生んだ

→乱れていた藩士の風俗は改善

18

致道館教育のコンセプト

以上のことをまとめると...

致道館教育の基本コンセプトは
・自由主義
・個性重視
→「ゆとり教育」で目指した理想と
とても近いのではないか？

19

ゆとり教育とは

- ゆとり教育が目指すもの
・個性を生かす教育を充実させる
・自ら学び、自ら考える力を育成する
・学習意欲向上
- 文部科学省（平成21年2月3日）
小中学校新学習指導要領 道徳教育を重視し「心をはぐくむ5つの提案」を発表。
（1）「読み書きそろばん・外遊び」を推進する
（2）校訓を見つめ直し、実践する
（3）先人の生き方や本物の文化・芸術から学ぶ
（4）家庭で生活の基本的ルールを作る
（5）地域の力で、教育を支える

➡ しかし、学力低下を招き、結局揺り戻しの動き

20

問題提起

それでは、なぜ致道館では
個性重視と自由主義
の教育がうまくいったのか？

21

致道館教育から活かせること

①会業
アウトプットの場があることで学習意欲を刺激すると共に、各自の個性を細かく把握。中学生から始まり、学年が上がるにつれ増える。
②詩作
楽しみながらクリエイティビティを発揮させる。
現代なら日記か？
③評価方法
テストなしで、通常の学習を総合的に評価。
年次に関係なく実力次第で昇級。

22

致道館教育から活かせること

①会業
②詩作
③評価方法

総じて、先生が大変！！
・日記を見るのが大変
・個性見るのが大変
・評価をするのが大変

POINT

個性重視のきめ細やかな指導をするために、生徒と濃密なコミュニケーションをしていた！！

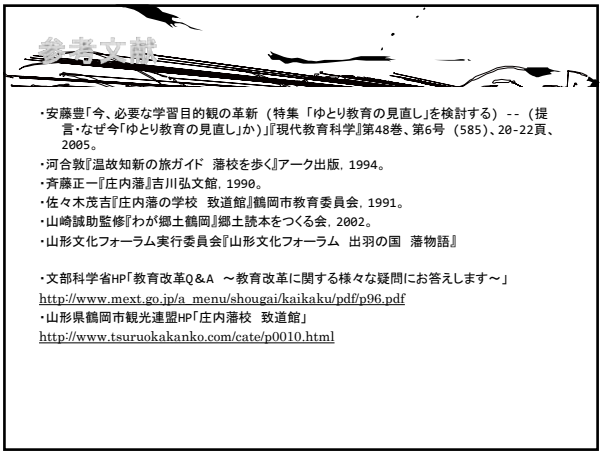
23

致道館教育から活かせること

しかし、このような教育を行った場合、
指導できる生徒数に限界がある！
⇒「私塾」として実現できないか？

具体的には...
①会業：ゼミナール形式
②詩作：日記を通じて個性を見てあげる
③評価方法：実力次第でどんどん発展的な内容も指導

24



・安藤豊「今、必要な学習目的観の革新（特集「ゆとり教育の見直し」を検討する） -- （提言・なぜ今「ゆとり教育の見直し」か）」『現代教育科学』第48巻、第6号（585）、20-22頁、2005。
・河合敦『温故知新の旅ガイド 藩校を歩く』アーク出版，1994。
・斉藤正一『庄内藩』吉川弘文館，1990。
・佐々木茂吉『庄内藩の学校 致道館』鶴岡市教育委員会，1991。
・山崎誠助監修『わが郷土鶴岡』郷土読本をつくる会，2002。
・山形文化フォーラム実行委員会『山形文化フォーラム 出羽の国 藩物語』

・文部科学省HP「教育改革Q&A ～教育改革に関する様々な疑問にお答えします～」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kaikaku/pdf/p96.pdf
・山形県鶴岡市観光連盟HP「庄内藩校 致道館」
http://www.tsuruokakanko.com/cate/p0010.html

25

第4グループ

新たな地方モデル　『素敵な田舎』庄内

佐藤和賀子／田中謙伍／横山　翔／川井俊輝／髙橋　要

イントロダクション

今回の報告のキーワードは「資源」である。私たちは今回のセミナーで、庄内には豊富に資源が存在していることに気づき、それと同時に多くの課題も抱えていることを知った。資源と課題を比較し、私たちが出した結論は、「それでも庄内は素晴らしい」である。つまり、庄内に存在する資源を持ってすれば、抱えている課題の解決すらも不可能ではないというのが私たちの考えであり、むしろ、課題への高い対応力をみせることで庄内が日本の地方のロールモデルとなりえるとさえ考えている。

今回の報告では、課題解決の手段として「地域活性化」に目を向け、そのための資源として「食」と「学問」に注目した。決して完成された内容だとは言えないが、これが我々の２ヶ月間の活動の成果である。是非、一字一句見逃さずに読んでいただきたい。

1）４日間での気付き～庄内の良さ～

夏休み、私たちは山形県庄内地方で４日間の合宿セミナーに参加した。セミナーの中では、羽黒山へ上って汗を流し、農業体験では素手素足で土や野菜とのふれあいを楽しみ、八朔祭や松ヶ丘開墾場見学、致道館見学では庄内の歴史にふれ、そして宿舎では毎日美味しい食べ物を頂くことが出来た。たった４日間であったが、体を使って、頭を使って、私たちは自分たちの五感で最大限に庄内というものを感じることが出来たのである。

合宿セミナーでは庄内のよい部分を多く発見することが出来たが、特に私たちの印象に残ったのは、庄内という土地がもつ「今あるものを活かして新しいものを作り出す知恵」であった。庄内に暮らす人々は、庄内の発展を考えるとき、新しいものを闇雲に取り入れるということはしない。昔から庄内にある自然や建造物を現代にあった形に変化させ、また、庄内の歴史観や自然観、現在までの庄内のあり方にマッチングしたものだけを取り入れて活かしながら、庄内というフィールドを進化させているのである（そのいい例が待カフェや TTCK である）。私たちは、そこに「庄内らしさ」というものの一面を垣間見た気がした。

「庄内らしさ」を表す言葉として、私たちは「変わらないために変わる」という言葉を使っている。これは、自らの守るべきもの（自然、農業、町並み等）を大切に守った上で、時代に合わせて自らを対応させていく姿こそが庄内らしい姿といえるのであり、時代への（庄内として適切な）対応をやめれば、それはすなわち「庄内らしさ」を失ってしまうことになる、という考えだ。それを、自らの進む道を踏み外すことなく、現在まで継続してこられていることが、「今あるものを活かして新しいものを作り出す知恵」の証明である。私たちは、この知恵こそが庄内が地方都市として発展していく上での強みであり、これに加えて多くの資源を有する庄内は「素敵な田舎」になり得る存在であると感じたのであった。

2）４日間での気付き～庄内の課題～

しかし、地方としての良さがたくさんある庄内ではあるが、やはり今後の地域の発展には課題が多いことも私たちは感じていた。

第一に、社会全体の問題でもある少子高齢化・過疎化への対応。統計からもわかることだが、フィールドワークをするうえでも強く感じたのは、街中に人、特に若者が少ないということであった。50年後の庄内が明るくあるためには、なんとかこの現状に歯止めをかける必要があると感じた。

第二に、情報発信力の強化の必要性。今回のセミナーでは慶応義塾大学から多くの学生がやってきて、共に庄内の文化や歴史、美味しい食べ物を楽しんだ。多くの学生が庄内の素晴らしさを感じてくれたのだが、残念なことに、ほとんどの学生がセミナーにくるまで庄内についての情報をほとんど知らないというのが現状だったのである。すべての年代の目に届く範囲で情報を発信することは難しいので、庄内から外部への情報発信が足りなかったとは一概には言えないが、庄内が地方を代表する地域になるためには、今よりも更に積極的で効果的な情報発信を行う必要があるのではないか。

そして、第三の課題として資源認識の甘さが挙げられる。情報発信力にも関連することだが、そもそも情報発信が効果的でない（足りない）のは、庄内に暮らす人々が自分たちの持つ資源の存在や価値を正確に認識していないことにも原因があるのではないだろうか。そう考えると、外部に情報を発信する前に、自分たちが持つ資源はなんなのか、それにはどのような価値があるのか、また、その資源を使ってどのくらいの価値を生み出すことが出来るのかを、まずは地元の人々が再確認することが必要なのである。

これ以外にも、庄内には私たちが直接は体験することのなかった多くの課題が存在し、庄内が新たな地方モデルとなるにはこれらの課題の解決が重要になる。では、これらの課題を一体どうやって解決していけばいいのだろうか。

私たちが出した答えは、「資源を活かした地域活性化」であった。ここからは、私たちが考える「庄内における地域活性化」について説明していきたいと思う。

（文責：髙橋要）

1. 庄内資源再認識の必要性

1）東北公益文科大学でのアンケートの実施

＊アンケート資料ページ参照

2）庄内の資源を再認識せよ。～アンケート結果とインタビュー結果から ～

アンケートや現地で数回行ったインタビューから、庄内の良いところは何かと聞くと自然、食べ物という回答が多く挙げられるが、その具体例についてはほとんどの人が答えられないという問題があることがわかった。出羽三山は知っていても個々の山の名前は言えない、庄内名物は何か言えないという人が多くいた。これは庄内の人たちにとって自然や食べ物が普段から触れているものであり、特別なものではないため普段は意識していないということが原因として考えられる。しかし、庄内活性化のためにはより正確な庄内資源の認識とより広範囲、高品質の情報発信を行うべきである。これらを円滑に進めるためにも庄内の人たちはもっと文化について学ぶこと、教育することが必要である。 普段から触れている当たり前のものがいかに恵まれた資源であるか認識するためには他の地域との比較を行い、客観的に自分の地域を見つめなおすことが重要であろう。また、このような客観的な視点から庄内の資源を再認識することは地域への愛着が生まれ、若者流出防止にもつながるとも考えられる。以上のことから庄内の資源を再認識することは庄内活性化のために今後ますます課題になってくると言える。

3）地域活性化について

2）では庄内活性化のために、庄内の資源を再認識することが必要であると述べた。私たちは庄内セミナーに参加し実際に触れた庄内の活性化や他の地域の活性化を考えるなかで、一体どういう状態が活性化状態なのか議題に挙がった。

結論から言えば、地域活性化とは技術進歩や経済的な豊かさの追求ではなく、経済的な豊かさから精神的豊かさへシフトすることであると私たちは考えている。地域活性化は地域の経済的な発展一辺倒であってはならない。それは市場原理主義が生んだ格差を見ても明らかである。必ずしも経済の発展が

人々の幸福に結び付くとは限らないということを念頭に置いて、地域活性化に努めることが必要だろう。

4）庄内がロールモデルとなり日本全体を活性化させる

今後日本は少子高齢化や人口減少に対して、それらに適応できる社会を作ることが求められるだろう。資源や食糧を自給できない日本はグローバリゼーションのなか国際競争を強いられており、人口減少は日本の経済成長に大きく影響する重大な問題と言える。特に地方は人材不足や情報格差をいかに補い、成長していくかが課題であるといえよう。この背景のなかでこれら少子高齢化人口減少問題に対する政策は、少子化の原因である子供の減少傾向を改善する人口政策と少子高齢化や人口減少に向き合いその変化に対応していく適応社会政策の二つに分けられる。特に後者については地域住民がひとりひとり考えて行動していくべき問題であり、行政任せにすること決してはできない。また地域ごとに違った歴史、文化、産業を鑑みて地域それぞれの対応が求められる非常に複雑な問題でもある。一方で、地域の生き残りをかけたこの闘いを切り抜けることは、他の地域に対して有意性を示すことになると言える。そのような意味でも庄内は庄内だけの地域活性化に取り組み、日本の地方の目指す姿となるべく成長していかなければならない。対応力を全国に見せつけ、少子高齢化にうまく対応することができれば、庄内のブランド向上につながるだろう。そして、庄内が日本の地方のロールモデルとなり日本全体を活性化させることができれば、庄内の未来は非常に明るい。そうなるためにも庄内は今ある資源を活かし、新しい付加価値を生み出していくが求められると言えよう。

5）具体的な庄内活性化の提案〜資源を活かすきっかけ資源としての映画村〜

ここでは庄内活性化について、庄内映画村を有効活用した具体的な提案をまとめる。まず、ここで挙げる庄内映画村はもともと、地域活性化のツールとして平成 18 年に設立されたものであることを認識されたい。別紙のアンケートでは映画村がもっと発展してほしいという意見もあったが、庄内の人々も映画村に対して慎重に考えなければならない。というのは、映画村の発展が地域の活性化につながらなくては意味がないということを明確にしておかなければならないからだ。あくまでも映画村は庄内に人々が来るための「きっかけ資源」であり、本来見てもらいたい「庄内の資源」ではない。

しかし、この「きっかけ資源」から「庄内の資源」へ関心がシフトしていくような仕掛けが十分に整っておらず、庄内の産業全体がバランスよく発展していないということが現状であろう。そこで私たちは「きっかけ資源」から「庄内の資源」へ関心がいくような架け橋が必要であると考えている。たとえば庄内セミナーの 4 日間で食事する際に主に利用させていただいた待カフェは、庄内映画村という「きっかけ資源」から庄内の食という「庄内の資源」へ関心をシフトさせる架け橋となっていると言える。映画村目当てで庄内に訪れる若い層にも支持されるように店内やメニューがデザインされており、また一方では庄内の食にこだわった食事を提供することで庄内の本来の資源についても触れてもらえるように

なっている。このような「きっかけ資源」から「庄内の資源」へ関心がいくような架け橋となる企業や大学、制度が庄内に必要だと考える。

（文責：田中謙伍）

2. ２つの構想案～「食の都」と「学問都市」～

今ある資源を生かして、庄内はどのような将来を描くことができるだろうか。私たちは庄内の食と自然の豊かさ、公益文科大学と慶應義塾大学との連携に着目し、庄内への関心を呼び起こし活性化を促す「きっかけ」として、「食によるきっかけ」、「学問によるきっかけ」の二つを提案したい。

1)「食の都」の提案　～「食べること」を問い直す～

「食によるきっかけ」として、まずは「食の都」構想を提唱する。すでに庄内では３人の「食の親善大使」を中心に庄内産食材・産品が積極的にアピールされ、「食の都庄内」定着に向けた取り組みが行われている。JR 東日本主催「新潟デスティネーションキャンペーン」において、新潟エリアとの連携によって庄内の食の魅力を打ち出していることも記憶に新しい。こうした取り組みをふまえた上で、私たちはさらに一歩踏み込んだ「食の都」構想を打ち出したい。すなわち、庄内は単に「食べるもの」だけを提供する場となるのではなく、食、環境、地域、身体の関連性を重んじた、「食べること」それ自体を捉えなおす場をめざす、ということである。

①現代社会の「食」概念

「食の都」構想の背景には、現代社会の「食」概念に対する疑念がある。

農業に直接接することがない人々、特に都会に住む人々は既に調理されたものを食べる機会が多く、それがどのように作られたのかを考える機会はほとんどない。目の前のラップやプラスチック容器に包まれた食品。背景を感じさせない食べ物たちは、現代人の食の概念を脅かしてはいないだろうか。また、食べ物で足りない栄養はサプリメントで補えば良いという思想が一般化している現代では、ともすれば食と人間の身体が乖離しつつあると言えるのではないだろうか。

私たちはセミナーでのだだちゃ豆やサツマイモの収穫、現地の人々との対話を通し、自分たちが普段口にするものが作られた土地や水、生産者等の「食」の背景と向き合うことができた。食物は土、水、空気といった環境によってつくりだされ、その食物が私たちの身体をつくりだす。４日間を通し、食を考えることはすなわち環境・地域を考えることであり、自分自身の身体を考えることであることを痛切に実感したのである。

食に対する概念の揺らぎに加え、食料自給率の低下や食品添加物の安全性、環境問題が叫ばれる今日、「食べること」そのものを問い直す「食の都庄内」の存在は、大きな意義をもつと言えよう。

②在来作物に見る、「食の都」構想の可能性と課題

「食の都」構想を実現化させるキーとして、「在来作物」を取り上げる。在来作物研究会によれば、在来作物とは、だだちゃ豆、民田なす、カラトリイモなどのように「ある地域で世代を越えて受け継がれてきた作物」を指し、明確な定義はない。特徴としては、スーパーなどで売られている品種改良を経て「飼い慣らされた味」となった商業品種とは異なり、野生種ならではの独特な苦みや辛み、強い香りをもった、個性豊かな点が挙げられる。2007 年現在、山形県全域の在来作物品目数 133 品目に対し、庄内地域 64 品目、村山地域 34 品目、置賜地域 31 品目、最上地域 26 品目と、地域別品目数の中で庄内地域は群を抜いており、在来作物は庄内にとって独自の貴重な資源であると言えよう。

在来作物は、単に「食べ物」としての機能をもつだけでなく知的財産としての役割ももつ。在来作物は栽培に手間暇のかかる、多様性に富んだ作物である。そのため、一つひとつの作物には地域の歴史や文化、栽培や利用のノウハウといった農業技術史、食文化史の情報が詰まっている。さらにまた、その多様性ゆえに様々な遺伝情報を有しており、品種改良や医療への応用が期待されている。

こうした在来作物が「食の都」構想に果たす役割は大きい。例えば、独特の苦味や風味を活かした食育への活用は、食と「身体」との結びつきを、生産者から若い世代へと栽培方法を伝達する世代間交流は、食と「地域」との結びつきを成り立たる。また、庄内独自の在来作物のルーツを知ることは、庄内独自の「環境」を知ることにつながる。

現在、在来作物については山形大学農学部が中心となって研究会を設立し、発展・保存に務めている。しかしながら、生産性や収益性の悪さ、個体間の形質のバラつき、日持ちや品質のそろいの悪さといった理由による市場からの駆逐、生産者の減少・高齢化を背景に、その品目数は年々減少している。在来作物に限らず、現存する庄内の自然・地域・作物を護り「食の都」構想を実現させるためには、農業人口を確保し、資源としての庄内の作物を存続させる必要がある。

次世代の担い手が庄内資源を再認識し､作物を「食べるもの」としてだけでなく包括的に捉えることができれば、需要やビジネスチャンスの増加、現在の農家の在り方・農家に対する考え方の再確認につながり､「食べること」そのものを問い直す「食の都」の構築・維持が実現するだろう。

（文責：佐藤和賀子・川井俊輝）

2）学問都市の提案～庄内と公益を問う～

「食の都」と並ぶもう一つの構想案として「学問都市」構想を提唱したい。これは、大学や学生が主体となって地域ネットワークを形作るシステムである。行政でも住民でも企業でもない、独自の立場・第三者機関としての大学には大きな可能性が秘められているのだ。新たな視点を持ち、新たな時代を担う、大人でも子供でもない学生にこそ他にはないエネルギーがあり、学生が毎年入ってくる大学には地域を率先するだけの力があるはずだ。

また、地域ネットワークを重要視するのは、庄内における「公益の実践」としての地域ネットワークがまさに未来を先導すべきものだと考えるからである。資本主義や民主主義が改めて考えられつつある今日、時代は大きな転換点に位置しているといえる。一部の者優先、目先の利益優先では限界があり(2008 年のリーマンショックをはじめとする金融危機は記憶に新しい)、個々・社会が本当の意味で利益を得るために重要な「公益」の概念が意識され始めている。たとえば近年しばしば耳にする「win-win」や、江戸時代の「三方よし」の考え方など、いわゆる「協力原理」が見直されつつあることは明らかだろう。特に庄内でこそ、と考える前提として、中間発表で分かったように、庄内には根本となる「庄内らしさ」を保ちつつ、新しい時代の技術や考え方を上手く取り入れるよさがあるからだ。さらに、権力と民衆が協力してきた庄内平野の歴史や、自ら学ぶ姿勢を育む致道館教育は「公益学」の実践にふさわしい地であることを証明している。

加えて、地方は場所・人・資本に限りがあるため、これらを活かして活性化するには、企業（産業）・行政・住民の適度なつながりが求められるようになる。これはまさに「公益」の概念と一致しており、庄内の発展に不可欠なものである。こうした背景に加え、今後の地方分権のさらなる進展を踏まえると、「庄内における新たな地方モデル」として「学問都市」構想を提唱することは、庄内地方のみならず社会全体にとって有益であるといえよう。

①学問都市の可能性～二つの活動事例を考える～

実際に地域ネットワークに対する貢献の可能性を考えてみたい。ここでは農業体験プロジェクト、情報技術セミナーの二つの例を挙げる。

第一に農業体験プロジェクトについてであるが、庄内も他の地域と同様に農業人口低下が問題となっていることを念頭に置きたい。「食の都」構想とも関連するが、庄内の資源再発掘のためには庄内の学生が農業に少しでも近づくことが不可欠となる。本セミナーでも農業体験の場が設けられたが、こうした機会をより増やすことで、資源を考えるきっかけになるだろう。大学の授業の一環としてでもよいし、学生団体を立ち上げてもよい。最初は単発の小プロジェクトであっても、何度も繰り返すうちにリピーターや農業経験者が増えるだろうし、そうなれば農家の負担も削減できる、学生には刺激・よい経験となる、大学には地域のつながりに貢献することで信頼を得ることができて資金その他の協力を仰ぐ力強い土台となる。やがてプロジェクトが永続化してきたら、当初のメンバーではなくプロジェクトを中心とするために NPO 法人化や名物授業化を狙ってもよいかもしれない。「食の都」構想を学生たちが担うのも意義あることだ。さらには、TTCK や映画村とのつながりを利用して、都心部の人を農業体験プロジェクトに巻き込む手も考えられるし、日本らしさを求めている外国人観光客や留学生のニーズとマッチする企画にもなりえるはずだ。このように観光や国際化といったキーワードとつなげることも可能で、

非常にチャレンジしがいのあるものだと言える。

第二に情報技術セミナーについてであるが、ここで提案したいのが学生による住民へのセミナー実施だ。大学で学んだ情報技術を今度は学生が教える側となるのである。住民には生涯学習の一環にできる利点が、学生には教えるための学習内容の深い理解・地域住民との対話を通したコミュニケーション力獲得・レクチャーを通した計画立案や問題発見解決能力養成といった複合的・実践的な能力を身につけるきっかけとなる。文字通り「公益の実践」の機会を設けるのだ。とはいえ、特別な単位を認定するなどの大学側のサポートも重要となるだろう。当然、学生や住民は強制されるのではなく、自ら積極的に活動する必要がある。また、情報ネットワークについて補足すると、現代に不可欠なITの普及という点は当然ながら、情報ネットを地域固有な形で利用することで、地域住民の横のつながりを豊かにし、地域発展に役立てることが重要だ。特に庄内は映画村もあり、他の地方よりメディア要素に対して強みがあるといえる。そこで、実際に情報ネットを考えるに当たって、少子高齢化・過疎化を考慮すると、地域住民への情報教育の必要性が考えられ、せっかくなら学生も住民も最大限の利益を得る手段を試したらよい、というわけだ。

そもそも、少子高齢化・過疎化に対処して地域が活性化するためには一般に「①地域の特色を活かす姿勢」「②行政と住民の協力」「③人材育成」「④国際化」「⑤交通整備」「⑥都市との連携」「⑦情報ネットワーク」が必要だと言われているが、上記の活動例だけでもそのほとんどを補えることがわかるだろう。「学問都市」構想にはそれだけの可能性が秘められているのである。

このように、独自の立場の者が他の立場と協力することで庄内を発展させてゆく試みが求められている。特に、大学には「学問都市」を率いる新しい可能性が見出せるのである。コメンテーターの酒井氏曰く「地域を変えるのはよそ者・若者・ばか者」だそうだ。この激動の時代、時代の大きな転換点において、今後の社会発展のためには企業・住民・行政・大学がそれぞれに出来る形で社会に働きかけなければならない、という「公益学」を庄内は積極的に押し出せるはずである。もちろんそれは単に慈善活動をしなさいというのでなく、各々の利益の追求を経た上で、ということだ。

②次代を担う学問都市～東北公益文科大学と慶應義塾大学～

「学問都市」構想に対する批判として、大学はボランティア団体ではない、という考えもあるだろう。確かに大学は本来、社会から独立した高度な研究機関である。事実、アメリカでは社会に迎合しすぎてアミューズメントパーク化した大学の話さえあるほどだ。しかし、社会から独立した機関だからこそ果

たせる役割・可能性があるのは前述の例示の通りであろう。また、地域からの信頼を得ることで、資金をはじめとする多くの協力がより好ましい形で得られるのも事実である。何より、世界を先導する新しい大学の形として「学問都市」構想を打ち立てることに大きな意義があることは間違いない。加えて述べるならば、東北公益文科大学と慶應義塾大学に関しては設立の本来の目的からして次代を担う「学問都市」構想案に直結するものを持っている。もちろん庄内の未来を担う教育機関として、山形大学農学部、産業技術短期大学庄内校、鶴岡工業高等専門学校なども忘れてはならない。しかしここでは進行の都合上、先の二つの大学についてだけ言及したい。

そもそも東北公益文科大学は大学中心のまちづくりを想定して始まった大学であり、それは「公益」の理念にも反映されている。現在でも社会起業家養成講座を開くなどの取り組みがなされているが、より積極的に公益学の実践をすべきだ。学生が自らの手でまちづくりに貢献することで、短期的に地域活性化に直結することは明らかだ。さらに、自分たちの手でまちを創ってゆく実感を得ることで若者の庄内に対する愛着が生じ、過疎化や情報発信不足という問題解決にもつながることとなり、長期的にみても活性化に大きな貢献を果たすことになる。こうした資源のためのきっかけ資源として東北公益文科大学を活用するためのヒントとして、ここで今一度致道館教育を見直してみたい。なぜなら学生や大学が自ら進んで活動を行う姿勢と、自学自習を大きな柱とする致道館教育とが、「自主性」という点において共通しているからだ。また、致道館が庄内らしさを担い続けてきたという点で、とくにこの場合においては、他の「自主性」を重視する教育よりもはるかに参考になると考えたからである。致道館では、自主的な学習を学習者が行えるようになるまで、ある程度の決められた学習を強制することになる。多少強制的でも実践してみることで、自主的な活動を生まれさせるきっかけを作るのである。先の情報技術セミナーの例では単位の認定を提案したが、このように大学側からある程度の働きかけが必要なのである。東北公益文科大学は大きな可能性を秘めており、「公益学」を実践・地域ネットワークを率先する存在として、寄せられる期待は大きいものといえる。

また、慶應義塾大学は本来、社会を先導する事業家養成を目的として作られた塾である。だからこそ単なる研究機関の枠を超えて、庄内とのつながりをより活かす姿勢が必要だろう。ここで、慶應義塾側における地域ネットワークの中心拠点となるTTCK（慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス）について言及したい。おもにバイオ技術の開発、生命の根源の探究を行っており、この分野の研究はまさに時代の最先端を担うものである。学問内容が専門的すぎるため、地域への開かれた大学としての活動は困難にも思えるが、できる限りのことはされているようである。たとえば、からだ館（致道ライブラリー）の公開や地元高校生向けバイオキャンプ、そして国際会議の定期的な開催などである。しかし、慶應義塾大学の学生、慶應義塾大学を利用できる東北公益文科大学側にはまだまだ行動の余地があることは間違いない。慶應義塾側からの働きかけとして、すでに湘南藤沢キャンパスの学生によるフィールドワークの実施があるが、こうした試み・活用をより積極的に行うべきだし、またその十分な価値が庄内にあることは疑いようがない。また、東北公益文科側は良くも悪くも慶應ブランドを利用できるだろう。ただしあくまでもきっかけ資源、架け橋としてでなければならない。最終的には東北公益文科大学が独立し、自主的に活動してゆくことが重要である。

以上の説明の通り、「学問都市」構想としての大学・学生は庄内におけるきっかけ資源であり、一地方の目先の利益などにとどまらず、この激動の時代を切り開くのに十分な「新しい地方モデル」を打ち出す可能性を秘めているのである。

（文責：横山翔）

3. まとめ

今回の報告では「食」と「学問」というふたつの要素に絞って地域の活性化についての提案をした。しかし今後、庄内に存在する資源を持ってすれば、様々な角度からの地域活性化、そして様々な角度からの地域の課題解決を果たすことが出来るだろう。

そのためには、まずは地域住民が庄内という地域を見つめなおし、自分たちのもつ資源と、その資源を使って自分たちが果たすことの出来る社会的な課

題の解決について再認識していく必要がある。自らを客観的に分析し、自らが生み出すことの出来る価値を見極められたとき、庄内は地方としての理想的な姿に向けて歩みを進めることが出来るのではないだろうか。

繰り返しになってしまうが、庄内という土地は本当によい土地である。それは、「自然の豊かさ」や「人の温かさ」によるところもあるが、それらも踏まえて、一地方としての潜在的な発展性の高さが何よりの魅力と言える。冒頭でも述べたように、日本の地方を代表する存在になることも不可能ではないと私たちは考える。庄内の人々が感じているよりもはるかに、庄内という土地に寄せられる期待は大きいのである。

田舎でありながらも、様々な魅力にあふれた山形県庄内地方。現在抱えている課題を、自らが有する資源を活かし、自らの力で解決することが出来たとき、庄内は新たな地方モデルとしての完成をみるのではないだろうか。

（文責：髙橋要）

参考文献

赤尾勝己『生涯学習概論――学習社会の構想』関西大学出版社、1998.3
浅井経子編『新図書館情報学シリーズ1　生涯学習概論』理想社、2002.2
伊藤眞知子ほか『大学地域論――大学まちづくりの理論と実践』論創社、2006.5
小松隆二ほか編『大学地域論のフロンティア――大学まちづくりの展開』論創社、2007.3
岩井克人『会社はこれからどうなるのか』平凡社ライブラリー、2009.9
大宮登ほか編『大学と連携した地域再生戦略　地域が大学を育て、大学が地域を育てる』ぎょうせい、2007.3
片山善博『市民社会と地方自治』慶応大学出版会、2007.8
加藤諦三『大学で何を学ぶか』ベスト新書、2009.5
神野直彦『地方自治土曜講座ブックレット№70　分権型社会の地方財政』公人の友社、2001.7
出井信夫『図説地方財政データブック〈平成19年度版〉』学陽書房、2007.9
西垣通『情報都市論』NTT出版、2002.4
橋本行史『地方自治ジャーナルブックレット№42〈改訂版〉自治体破たん・「夕張ショック」の本質――財政論・組織論からみた破たん回避策』公人の友社、2007.5
原丈人『新しい資本主義』PHP新書、2009.5
船津衛『地域情報と地域メディア』恒星社厚生閣、1994.12
保母武彦ほか『夕張破綻と再生――財政危機から地域を再建するために』自治体研究社、2007.2
町田洋次『社会起業家［よい社会］をつくる人たち』PHP新書、2000.12
森政稔『変貌する民主主義』ちくま新書、2008.5
矢作弘ほか編『シリーズ都市再生3　定常型都市への模索　地方都市の苦闘』日本経済評論社、2005.7
吉田和男『地方分権のための地方財政改革』有斐閣、1998.8
米田公則『情報ネットワーク社会とコミュニティ』文化書房博文社、2003.2
山形在来作物研究会「どこかの畑の片すみで――在来作物はやまがたの文化財」山形大学出版会、2007

参考URL

おいしい山形推進機構事務局「地産地消」〈http://www.yamagata.nmai.org/tisan/tisan.html〉（2009年9月25日）
庄内観光コンベンション協会「食の都庄内を彩る食材たち」〈http://www.mokkedano.net/miyako/syokuzai/index.html〉（2009年10月18日）
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスホームページ（注：このサイトからTTCKに関する複数のニュース記事を参照）〈http://www.ttck.keio.ac.jp/〉（最終アクセス2009年9月26日）
慶應義塾大学ホームページ（注：このサイトからTTCKに関する複数のニュース記事を参照）〈http://www.keio.ac.jp/〉（最終アクセス9月26日）
東北公益文科大学「創立10周年記念事業の概要」〈http://www.koeki-u.ac.jp/general/l003001800152.html〉（2009年9月19日）
文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」〈http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp/004.htm〉（2009年10月11日）
金沢大学「地域活性化プロジェクト」〈http://cr.lib.kanazawa-u.ac.jp/project/〉（2009年10月11日）

新たな地方モデル
『素敵な田舎』庄内

4班
横山 翔
川井 俊輝
佐藤 和賀子
田中 謙伍
高橋 要

1

アウトライン

- セミナーを通して
  ～庄内の資源をもっと活かすべき
- 資源の再認識、資源を活かすことで活性化
  ＝新たな「地方モデル」確立
  ～映画村と待カフェの例
- 2つの構想案
  「食の都」構想
  「学問都市」構想

・まとめ

2

4日間の合宿セミナー

3

4

4日間で気付いた庄内の良さ

今あるものを活かして
新しいものを作り出す

変わらないで変わる、素敵な田舎

5

4日間で気付いた課題

・少子高齢化、過疎化
・情報発信力
・需要のなさ
・資源認識の甘さ

⇒資源を生かした地域活性化の必要性

6

地域活性化とは

・経済的豊かさから精神的豊かさへ
・日本の地方発展のロールモデルとなれば庄内のブランド向上にもつながる

↓

・市場原理主義からの脱却のさきがけ
・庄内の対応力の見せどころ

＝資源を活かす

7

公益大でのアンケート

	嫌なところ	好きなところ
	活気がない	自然が多い
	交通の便が悪い	食べ物がおいしい
	お店がない	落ち着いた雰囲気
	除雪が下手	人が温かい
	仕事がない	のどかな雰囲気

8

庄内の資源の再認識

アンケート結果
自然、食べ物が出るけど具体的にはでてこない

もっと文化について学ぶべき

ロイヤリティが生まれれば、人材転出にもつながる

9

資源を活かすきっかけ資源 映画村

もともとは地域活性化のツールとして出来た

映画村の発展が地域の活性化につながらなくては意味がない

あくまで映画村は庄内に来る「きっかけ資源」であり、
本来見てもらいたい「庄内の資源」ではない。
「きっかけ資源」から「庄内の資源」へ関心がいくような仕掛けが必要
例,待カフェ

映画村がもっと発展してほしいというアンケート意見もあったが、
庄内の人々も映画村に対して慎重に考えなければならない

10

きっかけ資源としての映画村

「きっかけ資源」から「庄内の資源」へ
関心がいくような仕掛けが必要

例,待カフェ

庄内映画村 → 庄内の自然や文化

11

2つの構想案

・「食の都」構想
　～食によるきっかけ
・「学問都市」構想
　～大学によるきっかけ

12

食について考えたこと

待カフェでいただいた庄内の食べ物
庄内桃、庄内メロン、庄内ぶどう、ブルーベリー
庄内豚、庄内米、だだちゃ豆、麦きり、芋煮
南禅寺豆腐、とうもろこしの味噌汁

13

在来作物

庄内における品目数の多さ
133品目中　64品目が庄内産

存続の危機
日持ち・品質・生産性・収益性に問題

知的財産としての価値
農業技術史・食文化史の史料
多様な植物遺伝資源

「食の都　庄内」

14

食の都庄内　構想

都会組
すでに完成された食べ物を食べることが、
それが何でできているのか、どこから来たのかを考えないようにしていた

収穫から調理までを実体験することで
口にするものやそれが作られた土地や水と少しでも向き合うことができた

「食べるもの」だけでなく「食べること」について考える

食と環境の結びつき～水・空気・土への配慮
食と地域の結びつき～食育・医療への応用など

15

学問都市構想

・大学が主体となる地域のネットワーク
・短期的な活動、長期的な活動

・公益大が中心になるべき
・慶應の働きかけ

16

公益大に関すること

・東北公益文科大の理念
・公益学の実践～学生によるまちづくり

・致道館教育と自学自修
・多少強制的でも実践させてきっかけをつくる
・自主的な活動を生まれさせる

17

TTCKに関すること

バイオ
バイオ技術の開発、生命の根源を探究

地域ネットワーク
慶應ブランドの利用、専門的な学問

18

まとめ

- 庄内の資源をもっと活かすべき
- 資源の再認識（例. 映画村と待つcafe）
- 資源を活かすことで活性化
  ＝新たな「地方モデル」確立
- 2つの構想案
  「食の都」構想
  「学問都市」構想

19

20

アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

庄内地域に関わる人の代表として東北公益文科大学の 3 年生と 4 年生を対象にアンケート調査を実施した。

① 基本データ
② 庄内に足りないと思うもの(出身地別)
③ 庄内・都会・鶴岡・酒田それぞれのいい部分・いやな部分
④ TTCK に期待したいこと
⑤ 庄内に残りたい理由・残りたくない理由
⑥ 庄内のアピールポイント・資源
⑦ 2050 年の理想の庄内
⑧ 4 年生データとの比較

①基本データ

アンケート調査結果[対象：東北公益文科大学 3 年生]

出身＼性別	男	女	計
庄内	13	16	29
庄内以外の県内	34	22	56
県外	9	12	21
計	56	50	106

②庄内に足りないと思うもの（質問対象：庄内に対して満足度の低い学生）

庄内	・交通機関　・ショッピングセンター　・雇用　・活気 ・大学の周りになにもない　・車がないと不便すぎる　・バスの本数が足りない
県内	・遊び　・活気　・人　・ゲームセンター　・24 時間営業の店 ・若者向けの店　・娯楽施設　・交通の改善
県外	・交通の便のよさ　・エンターテイメント　・交通機関　・本屋　・文具屋 ・学用品のそろう店　・娯楽

③庄内・都会・鶴岡・酒田それぞれのいい部分・いやな部分

回答が多かったものを上位に記載、囲い数字は回答数である。

	いや	いい
庄内	1．交通の不便さ⑨ 2．店が少ない⑤ 3．遊ぶところが少ない③ ・仕事がない　・景気が悪い　・不便 ・ものがない・さびれている	1．自然が多い⑭ 2．落ち着いた雰囲気（マイペース・ゆったり・まったり・静か）⑦ 3．人が温かい② 3．水・空気がおいしい②

アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

	・深夜まであいている店がない ・遅れている　・イベントが少ない ・つまらない　・送料が高い ・人がいないところは極端にいない ・ほしいものが買えない　・寒い ・説明会が遠い	・歩きやすい　・農作物が手に入りやすい ・自分の生活にあっている ・都会に比べると環境がきれい ・田舎的なところと都市的なところが混ざり合っている　・平和 ・広い　・車移動　・風景 ・食べ物がうまい　・道がきれい
県内	1．交通の不便さ⑰ 2．店がない⑧ 3．風が強い⑦ ・遊ぶところが少ない⑥ ・利便性が低い③ ・活気がない② ・若者が利用できるような場所が少ない② ・ほかの大学の学生がいないので刺激が少ない ・気性が荒い人が多くてなじめない ・若い人(地元人)が町にいない ・人がいない　・冬寒い ・商店街が静か　・田舎 ・働くところがない　・夜が暗い ・乾燥肌になる　・雪が多い ・車が多い　・バイトする場所がない ・大学の場所が悪い　・少し寂れている ・控えめ(PR) ・運転が荒い人が多い ・街の整備が出来ていない ・ほしいものが手に入らない ・イベントがすくない ・自転車がさびる	1．自然が多い 25 2．海がある⑦ 3．人が温かい⑥ ・落ち着いている（ゆっくり・のどか）⑤　・住みやすい② ・お米がおいしい② ・食べ物がおいしい②　・景色がよい② ・空気がうまい②　・海が近い② ・程よく田舎　・風がある ・地域密着で交流しやすい ・環境がよい　・親切　・おくりびと ・気軽に挨拶してくれる　・遊ぶところがたくさんあるところ ・ごみごみしてないところ ・開放的である　・発見がある ・人が少ない
県外	1．交通の不便さ⑨ 2．雪がひどい③ ・店の閉店時間が早い ・車の運転が荒い　・風が強い ・趣味を扱っている店が少ない ・店の種類が少ない ・ものがない　・不便	1．自然が多い⑧ ・庄内弁　・落ち着く ・人が気安く、融通が利く ・人のつながりが深い　・米がうまい ・田んぼがある　・ほどよく田舎 ・空気がきれい　・風があって涼しい ・食べ物がおいしい

アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

◇都会のいやなところ・いいところ

	いや	いい
庄内	1．人が多い⑮ 2．空気が汚い⑦ 3．ごちゃごちゃしている④ 3．物騒④ ・せまい②　・交通量が多い　・水がまずい ・うるさい ・落ち着かない　・怖い ・自分の生活にあっていない ・無駄におしゃれをする　・歩く ・星が見えない・心がゆったりしない	1．店や遊ぶ場所がたくさんある⑨ 2．何でもある⑦ 3．交通の便がいい⑤ ・様々なもの、建物がある②　・便利 ・いろいろな人がいる ・深夜まであいている店がある ・情報があふれている ・個性的なものが受け入れられる ・職がある　・栄えている ・多種多様　・イベントが多い
県内	1．人が多い 25 2．人が冷たい⑥ 3．空気が汚い⑤ ・うるさい④　・ごみごみしている④ ・自然が少ない④　・窮屈 ・高い建物が多すぎ　・建物が多い　・暑い ・息苦しいイメージ　・時間が早い ・常に並んでいる ・新しいものについていくのが大変　・こわい ・すごしにくい　・ビルばかりで威圧感がある ・疲れる　・移動が面倒　・物価が高い ・やたら明るい　・水がまずい ・危険な場所やものが多い　・混雑する ・ごみが多い　・環境がよくない　・汚い	1．交通の便がよい⑪ 2．店がそろっている⑨ 3．何でもある⑥ ・便利④　・楽しい場所がたくさんある④ ・買い物がしやすい③　・華やか② ・にぎやか②　・就職活動しやすい ・明るい　・流通が活発 ・あまり移動しなくても店がある ・情報が早い　・いつでも店が開いている ・気候がいい　・人が多い ・新しいものに触れることによって新しい発想や様々な考えが出来る ・行きたいところがある。 ・電車の本数が多い ・飲み屋がたくさん ・いろんなことが出来る ・自分の興味があるものにすぐ取り組むことが出来る
県外	1．人が多い⑧ 2．空気が悪い⑥ 3．疲れる② 3．水が汚い② ・せわしない ・マニュアルに沿った対応をされる	1．様々な店・施設がある⑥ 2．何でもそろう⑤ 3．交通の便がよい③ ・遊ぶところが多い②　・情報が早い② ・便利　・ほしいものがすぐ手に入る

アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

◇鶴岡のいやなところ・いいところ

	いや	いい
庄内	1．道が複雑④ 2．駅前が廃れている② 2．遊ぶところがない② ・なにかと酒田と張り合おうとする ・渋滞する ・道が狭い　・広い　・田舎　・雪 ・夕方の渋滞 ・中心部にばかりお金を使って農村部に行き届かない ・市街地に駐車場が少ない	1．赤川花火大会② 1．歴史的なものがたくさんある② 1．買い物する場所が多い（酒田と比べて）② ・人が温かい　・海がきれい　・食べ物がおいしい　・まったりしたイメージ ・地域に特色があること ・空気　・酒田よりは遊ぶところが多い ・自然がきれい　・平和 ・農村部が多い　・土地柄を生かした起業 ・駅前で遊べる　・伝統が息づいている ・いい人が多い　・庄内病院がすごい
県内	1．道が複雑⑨ 2．道が狭い④ 3．雪② 3．交通の便が悪い② ・何を考えているかわからない ・ごみごみ　・なまり　・田舎 ・移動手段がない　・風が強い　・夕方の渋滞 ・バスや電車が少ない ・歩道が少ないところが多い ・控えめ	1．城下町の雰囲気③ 2．広い② 2．店が多い② 2．花火大会② 2．観光名所が多い② 2．酒田より都会的② ・町並みがきれい　・少々活気がある ・海岸がきれい　・自然 ・県内でも比較的に栄えているので買い物しやすい　・おいしい店がわかりやすい ・オリジナリティのあるものが多い ・町が明るい　・町で若者をよく見かける ・雪が少ない　・心霊スポットがある ・食堂が多い　・おもしろい店がある ・住みやすい　・おいしい店が多い ・ゲームセンターがある　・景色 ・遊ぶところが密集している　・見学したりする所が多い　・文化的 ・どこへ行っても興味を引くものがある
県外	1．交通の便が悪い③ ・道が複雑　・道が狭い(街中) ・除雪が下手　・天候	・駅前が便利　・赤川花火大会 ・ある程度のものをそろえられる　・赤川 ・店がある　・にぎやかでものがある

アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

◇酒田のいやなところ・いいところ

	いや	いい
庄内	1．遊ぶところが少ない② 1．田舎過ぎる② ・交通手段が限られる ・大学側の町が発展していない ・何かと鶴岡と張り合おうとする ・運転手のマナー ・鶴岡に負けている ・中町などは駐車場に困る ・なんとなくせかせかしてる　・仕事がない ・駅前で遊べるところが少ない ・駅前が悲しい	1．自然② 1．るんるんバスがある② ・海がきれい　・観光地 ・ハキハキしたイメージ　・景色がきれい ・道がきれい　・海が近い　・平和 ・運転しやすい ・天気予報で鶴岡ではなく酒田と表示されること ・住みやすい ・漁業に力を入れていると思う ・道がきれい　・ロケ地がある ・街が清潔そう
県内	1．風が強い⑦ 2．交通が不便⑥ 3．店が少ない④ ・不便②　・なにもない(観光地・ショッピングモール)②　・遊ぶ場所が少ない②　・雪② ・けち　・つまらない　・町に人がいない ・きれいに開けた海がない　・冬の道路 ・買い物が三川しかない ・店が開いていない ・駅前の商店街が暗くて怖い　・町が暗い ・買い物をするところがない　・夕方の渋滞 ・車椅子の人が街を移動できない ・ゲームセンターが 2 つしかない ・最上川をはさんで大学側の地域に店が少ない	1．海⑧ 2．のどかさ⑥ 3．自然が豊か⑤ ・食べ物がおいしい③　・雪が少ない② ・ラーメンがうまい② ・商店街の人が優しい ・山・川・海の三点セット　・環境がよい ・見晴らしがよい　・住みやすい ・活気がある　・公益大がある ・アピール力がある（鶴岡に比べて） ・交通の便がいい　・港
県外	1．交通の便が悪い⑦ ・冬がつらい(風が強い)　・除雪が下手 ・運転が下手　・文句をすぐつける ・雪が多い　・風が強い　・天候 ・店まで遠い　・ものがない	1．自然④ ・夕日　・のどか　・売り手の人は親切 ・海が近い　・海 ・田んぼがある　・魚がうまい

④TTCK に期待したいこと

庄内	関東の人にも庄内のよさを伝えてほしい 知名度アップ 就職先を増やしてほしい

アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

	先端技術を取り扱っているので、雇用の面などでも貢献してほしい これからの庄内の将来性を研究してほしい 出来る範囲で ほかの大学の交流などに動いてほしい どのような形でもいいのでプラスになるようなことをしてほしい 学力向上 酒田でもっと見える活動をしてほしい せっかく鶴岡に出来たので、地元のことについての研究もしてもらいたい 若さで庄内を一緒に活性化してほしい 庄内の文化レベルを上げてほしい
県内	庄内の活性化 地域発信ではなく、より地域に密着していってほしい 公益大生とのコラボ企画をたくさんできれば 庄内を有名にしてください 大学との連携をもっとしてほしい 慶應より公益大が貢献するべき お金 神奈川の慶應とさらに連携して庄内と東京の関係を密にする活動をしてほしい 地域づくり、街づくり 発展させてほしい 地域の活性化 セミナーの開講など 授業内容が知りたい 専門分野で成果を上げ、庄内を全国に知らしめてほしい 庄内セミナーのように、都会の学生にきてもらったりして庄内を知ってもらいたい 地域の人も気軽に出入りできる開放型になってほしい もっと公益の学生とかかわって街づくりなどを企画してほしい
県外	貢献というよりも、庄内にあるということをアピールしたほうがいい 庄内の発展 雇用の創出

⑤庄内に残りたい理由・残りたくない理由

理由	残りたい	残りたくない
庄内	1．地元が好き⑥ 2．地元だから⑤ 3．地域貢献したい② ・行ったことのないところには住みたくない	・庄内にいるだけでなく、より多くの物事を見てみたい ・外の世界を見てみたい ・都会に比べると就職が厳しく、居続けるの

アンケート資料ページ

庄内セミナー4班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

	(怖い) ・住み慣れているから　・親しみがある ・ほかの地域ではいまさら住めない ・自分の地域で学んだことを生かしたい ・おいしい料理が多い	が難しいと思う ・就職したいところがない
県内	・人が温かく、海があるから　・環境がよく住みやすい ・暮らしやすいから　・環境がよい ・すみ続けたいと思うところだから	1．地元に帰る⑮ 2．職がない④ 3．地元じゃないから③ ・ほかの土地を見てみたい② ・知った土地に長居したくない ・刺激が少ないから　・進路場所でない ・言葉になじめない ・飽きた　・庄内が好きでない　・勤めたいところがない ・海が近いから　・県外に就職したい　・冬の運転が怖い ・生活していくには不便で、知っている人も少ない ・交通の便の悪さ　・ほしいものが手に入らない
県外	・好きな人がいるから	1．地元に帰る⑦ 2．就職先が少なそう② ・楽しめる場所がない　・何かと不便 ・交通の便の悪さ ・いいところより悪いところが目立つから ・ほかの県で生活してみたい

⑥庄内のアピールポイント・資源

庄内	1．豊かな自然⑬ 2．食べ物⑫ 3．映画村⑦ ・お米②　・人の温かさ②　・2つの文化圏の違い（内陸と庄内?） ・何もないところ　・住みやすさ ・のどかさ　・田舎のよさ　・庄内産の野菜や果物
県内	1．自然⑭ 2．食べ物(庄内豚・だだちゃ豆・メロンなど)⑬ 3．映画村⑧ ・海⑥　・お米⑥　・出羽三山④　・人のやさしさ③　・美しい風景③ ・水産物②　・酒②　・宗教(即身仏)②

アンケート資料ページ

庄内セミナー4班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

	・ラーメン②　・のどかなところ②　・歴史的なもの(観光地など)②　・風 ・最上川　・環境のよさ　・おくりびと ・海岸線　・カイトサーフィン　・庄内平野　・水　・アルケッチャーノ ・空気　・国宝　・農業　・鳥海山 ・滝　・漁業　・教育
県外	1．自然の多さ⑥ 2．庄内映画村② 2．食べ物② 2．公益大が公益学を学んでいるということ② ・はえぬき　・松の木　・鳥海山の美しさ　・庄内弁　・地産地消 ・海産物　・海産物や果物などの食文化 ・魅力的な風景や観光地　・米どころ　・アウトドアスポーツの場 ・日本海がきれい　・農産物　・文化　・気候 ・名産品　・だだちゃ豆のおいしさ

⑦2050年の理想の庄内

庄内	・今と変わらない姿 ・交通面がもう少し便利になってほしい ・人がにぎわっている ・もっと都会的に ・どこに住んでいても暮らしやすい ・現状維持 ・交通網が発達してほしい ・活気が戻って明るい町になってほしい ・コンパクトな町になってほしい ・イトーヨーカドーくらいは出来ていてほしい ・今より活気があればいい ・とりあえず面白くて住みやすくて老人に住みやすい町 ・仙台を越える東北屈指の経済都市 ・今のまま ・自然が豊かな庄内であってほしい ・自然を残して、ほとんど今と同じであってほしい ・このまま田舎の風景を残してほしい。農・食・映画村に力を入れつつ、住民を大切にする地域であってほしい。 ・今のままでいいと思う ・人と自然が共存している ・老人がほとんど

アンケート資料ページ

庄内セミナー4班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

	・あまりフランチャイズは増えてほしくない ・今までどおり緑豊かなおだやかな地域でいてほしい ・買い物をする場（車での移動）だけでなく、人が歩いて楽しいところ、年齢を問わず人生を楽しめるところであってほしい
県内	・一度きたらもう一度訪れたくなるような温かいところ ・自然があり、食べ物がおいしいところ ・新幹線が通っている ・畑はなくならないでほしい ・若者が就職のため庄内を出なければいけないという現状を打破し、活気と魅力に満ち溢れ、若者も庄内を出たくないと思わせる姿 ・今と変わらなくていいと思う@@ ・発展しすぎない、自然豊かでゆっくりとした時間が流れる庄内 ・人が変わらず温かい庄内 ・高齢者も若者も同じ場所に集まるような元気な町 ・素敵な田舎 ・今よりよくなっていてほしい(駅前など) ・今までと同じように田んぼが多くあってほしい ・今あるものが残っていてほしい ・最近取り上げられている映画などの発展(ロケ地として) ・食べ物がおいしい ・現在のアピールポイントを他県にアピールし、他県から見ても尊敬されるようになっていてほしい ・今までと同じく、人が優しくあってほしい ・暮らしやすくなっていてほしい ・今のままでいいと思う ・少子高齢化が進んで町が廃れる→新しい街づくりがなされ、老人の暮らしやすい町になる ・今と変わらずにあってほしい ・自然豊かな姿 ・元気 ・今と変わらず自然が多くあってほしい ・近代的に発展するのではなく、田舎の風景を残して発展してほしい ・きれいな海 ・都会 ・豊かな自然 ・今と変わらないでほしい ・地方だけで生き残れるような県政をつくってほしい ・周りの県が人工的な建物が多くなっても、自然の多さを残していってほしい ・公益大が好印象の大学になっていてほしい

アンケート資料ページ

庄内セミナー4班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

	・地方都市の発展型 ・現在のようなのどかな姿を保っていってほしい ・若い人からお年寄りまで快適に過ごせるような場所であってほしい ・このままの姿を残しつつ、全国にもどんどん知ってもらえるようになってもらいたい。 ・自然がきれい ・住みやすい庄内 ・るんるんバスとか、車を使わないで移動しやすい地域になってほしい ・地場産業が盛んになってほしい ・人がにぎわい栄えている街 ・せめて三川並みのショッピングモールと映画館くらいはほしい ・大都会になる ・変わらずこのまま ・今のままよいところを残し、アピールしていける地域 ・自然がそのまま残っていてほしい
県外	・このまま変わらず、自然豊かな庄内であってほしい ・交通網が充実してほしい ・交通の便がよくなって、歴史的な建物や豊かな風景はずっと残っていってほしい ・形は今のまま、あるものを活用して人が増えたらいい ・街は街で発展し、自然を減らすことのない姿 ・自然と現代文化の共栄 ・新幹線が通っていてほしい ・首都 ・今ある自然を残しつつ、交通が便利になってほしい ・公益大が全国的に有名になってほしい ・地方産業のトップ ・今より多少発展していてほしい ・自然を大事にしてほしい ・今と変わらない心の休まる街 ・若い人がたくさんいる

⑧4年生データとの比較

4年生基本データ

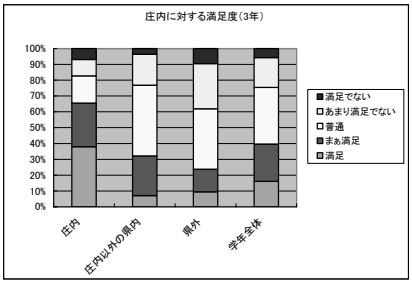
出身＼性別	男	女	計
庄内	15	17	32
庄内以外の県内	15	5	20
県外	3	9	12
計	33	31	64

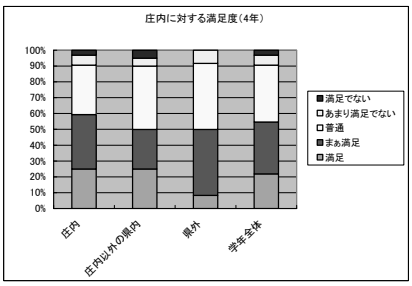
アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

◇庄内に対する満足度





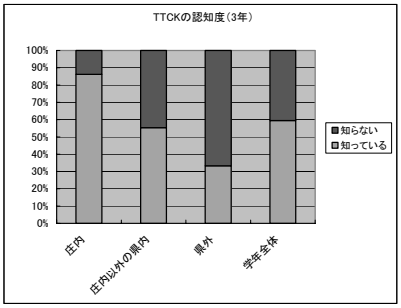
２つの学年を比較してみると、庄内に対する満足度は全体的に４年生のほうが高くなっていると言える。特に庄内以外の県内、県外出身者の満足度が高くなっている。実感ベースではあるが授業の数が少なくなって庄内を楽しむ余裕が出てきたということも一因になっていると考えられる。

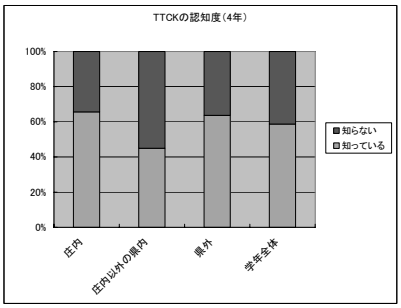
アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

◇TTCK の認知度





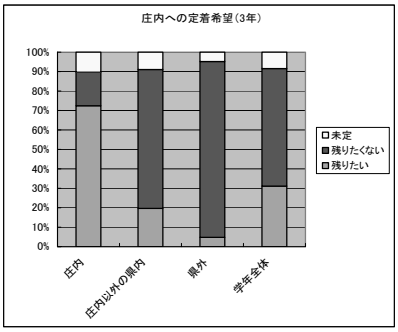
各学年全体の認知度はあまり変わらない。庄内という狭い土地にある教育機関であるのにもかかわらず、公益大高学年の学生の認知度が６割程度しかない原因として、公益大生の学外に対する関心が低い、あるいは TTCK の情報発信が足りないなどが考えられる。公益大と TTCK の連携を考えるならば、お互いの存在や活動内容について把握できる環境を設けたり、合同で学習する機会を設けたりすることが有効かもしれない。

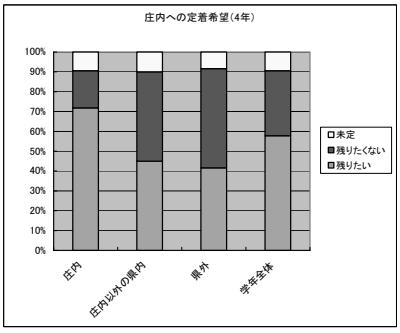
アンケート資料ページ

庄内セミナー4 班最終報告書

1．庄内資源再認識の必要性―①東北公益文科大学でのアンケートの実施

◇庄内への定着希望





3 年生に比べ 4 年生は庄内へ残りたいと答える人の数が多い。4 年生就職活動を経験し、考えが変わるのかもしれない。来年度の 4 年生に同じ調査することができれば有意義な結果が得られるかも知れない。

庄内セミナー活動報告会

横山千晶（教養研究センター所長／法学部教授）

2009年11月14日(土)の13時30分より、18時15分まで慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎のシンポジウムスペースにて庄内セミナーの活動報告会が開催されました。8月31日から9月3日にかけて開催された庄内セミナーでの最終報告会では、学生たちの発表に大勢の観客よりコメントとアドバイスを寄せていただきました。これらの熱い反応に応えるべく東北公益文科大学と慶應義塾大学の学生たちが、遠距離をものともせず、メイルや電話、テレビ会議などを通じて協働で調査を続け、11月14日の最終報告会に臨んだのです。13日の夜に東北公益文科大学の学生たちが「来日」し、総勢19名の参加者はまず再会を喜び合いました。

報告会当日はプロジェクト・リーダーの慶應義塾大学羽田功経済学部教授による開会と司会のもと、慶應義塾大学教養研究センター所長挨拶、鶴岡市東京事務所長岩城公志氏の来賓代表挨拶、羽田功教授によるセミナーの紹介を経て、庄内セミナーに参加した4つの班が、パワー・ポイントを使いながら発表を行いました。15分の休息を一回はさんでの発表は各班それぞれ20分。そして各発表の後、10分間活発な質疑応答が交わされました。

「山伏がおしえてくれたこと」(1班)では庄内の「公益」のバックボーンとしての出羽三山信仰について分析し、「温故知新～受け継がれる庄内の選択～」（2班）では夏に調べ発表した庄内藩の伝統をさらに展開し、なぜいまだにそのような伝統が庄内にしっかりと根を張っているのかについての分析を行いました。「致道館の教育～藩校再考～」（3班）では、致道館の教育と運営を細かく調査しながら、その方法がいかに斬新で、現在の教育に対してもさまざまなモデルを提示しているのか、という点を論じました。最後の「新たな地方モデル『素敵な田舎』庄内」（4班）では夏のフィールド・ワークでの「気づき」を学術的に調査することで、庄内が内包するさまざまな資源をどのように活用していったらよいのか、ということを松ヶ岡の「待カフェ」で食事した経験などを引きながら、食と学問の双方から提案を行いました。各班の発表が進む間に清家篤塾長も会場に駆けつけ、後半の発表も活気を帯びていました。

今回の報告会で注目したいことは、各班の参加学生たちが夏の間に積極的なフィールド・ワークを展開したことと、そこでの発見を独自に跡付けていったことの2点です。それぞれが自分の大学に戻った後では、夏の間に気づいたことや、問題意識をさらに協同で調べることで問題解決の糸口を模索し、東北公益文科大学の学生が中心となってふたたびフィールド・ワークを行って、たどりついた結果を共に確認していったのです。学生たちはまさに体験と調査の循環を思う存分味わうことができたといえましょう。

各班の発表のあとに、致道博物館館長酒井忠久氏、松岡物産株式会社社長酒井忠順氏、慶應義塾大学名誉教授松村宏氏、東北公益文科大学大学院研究科長大歳恒彦氏、鶴岡市総合研究所研究顧問東山昭子氏、財団法人致道博物館常務理事酒井天美氏、慶應義塾大学経済学部教授不破有理氏の7名のコメンテーターから貴重なご意見とコメントを頂戴しました。

コメンテーター全員に一致していたことは、学生の健闘をまずたたえてくださったことです。酒井忠久氏は一つひとつの発表にさらに学術的なアドバイスを加えつつも学生たちの大胆な発想と行動力を高く評価なさいました。同時に実はその大胆さは、庄内の出羽三山神社の全国とのコミュニケーションネットワークの構築や映画村などの運営、現在の庄内の教育指導にもつながっていることに言及し、過去と今を学生たちの目の前で見事につなげてくださったのです。続く酒井忠順氏は中間発表からの飛翔力を具体的な点から比較し評価しながらも、内容に合ったタイトルのつけ方、プレゼンテーションの構成、インタビューするときのサンプル数の妥当性やキーワードの定義、事象を比較するときの根拠、提案の持つ現実性について、一つひとつ丁寧にコメントをくださいました。さらにどこをどう改良する

必要があるのかという適切なアドバイスを、自分自身の経験に基づいて行ってくださった点、よき兄貴分として学生の視点に立った「アカデミック・スキルズ」の伝授を行ってくださいました。3人目の松村宏氏のコメントは、夏の経験をもとにさらに調査して、独自に徂徠学について読み込み、なおかつその真髄に真摯に向き合おうとした学生の「踏み込み」に言及し、その中に徂徠学の原点を見つけていただくというこれもまた、歴史と学問と学生を見事につなげる内容でした。同時に徂徠学を貫く学問や事象に対する姿勢に触れられ、学生たちを大いに激励してくださいました。大歳恒彦氏はこのセミナーの主テーマ「庄内に学ぶ『生命（いのち）』――心と体と頭と」の中の身体性に改めて言及し、学生たちが体験に基づく気づきを出発点として調査を始めたことの重要性を確認してくださいました。同時にそれぞれのテーマにおいて、実際に今何が起こっているのかを紹介した上で、いのちと公益の意義と課題について、学生たちの注意をふたたび促しました。東山昭子氏は庄内に根付く自律と自立のキーワードに言及し、現在庄内で展開されている教育活動・ボランティア活動・農業・食・観光の文化の事例をこのふたつのキーワードから語りなおすことで、学生たちの発表のバックグラウンドを固めてくださいました。酒井天美氏はセミナーの「母親」として学生の協働力のすばらしさをあらためて評価し、今後この人的ネットワークを大切にしてほしい旨を強調なさいました（なおこの点にコメントを加えれば、酒井天美氏の激励に鼓舞され、参加学生たちは慶應と東北公益文科大学共同で、庄内を愛し支えていく学生団体を立ち上げようと現在楽しみながら奮闘中です）。最後のコメンテイターである不破有理氏は学生たちの連携力を評価した上で、庄内セミナーの学問上の目標である「知る・見る・表現する」に言及し、学生たちが「気づき」という言葉を大切にしていた点をあらためて指摘しました。自分だけでは気がつかないような事実、あるいは今まで当然だと思っていた価値観に「気づくこと」と「感動」を通して、新たな知見に落とし込んで入った学生の今回の姿勢を忘れないようにもう一度学生に促したのです。同時に不破氏は夏の発表と今回の報告会に来てくださった庄内のかたがたの熱心なアドバイスとコメントの重みと暖かさにも触れ、これらの意見を活かしながら、さらなる研究へと進んでいくことを勧めることで、コメントの総括としました。

報告会は清家篤塾長の最後の挨拶で幕を閉じ、続いて一同は日吉図書館で開催中の展示企画『慶應義塾と庄内――「ハートの教育者」田中一貞』の見学へと移り、観覧しながら羽田功教授によるギャラリートークに耳を傾けました。今回の展示では、鶴岡出身で、慶應義塾初の社会学教授、かつ図書館の初代監督（館長）である田中一貞（1872～1921）をめぐる図書館所蔵のさまざまな資料や、庄内資料館から送っていただいた絵葉書や資料などとともに、明治はじめに書かれた『北役日誌』も特別展示されました。後者は庄内地方の開拓に成功した旧庄内藩の士族が政府の要請で北海道開拓に派遣された様子を絵入りで報告したものです。

最後に一同は懇親会に移りました。会場でも和やかな雰囲気の中で庄内をめぐる思いを語り合い、あらためて本セミナーで培われた「つながり」を体感することで報告会は盛会のうちに幕を閉じました。

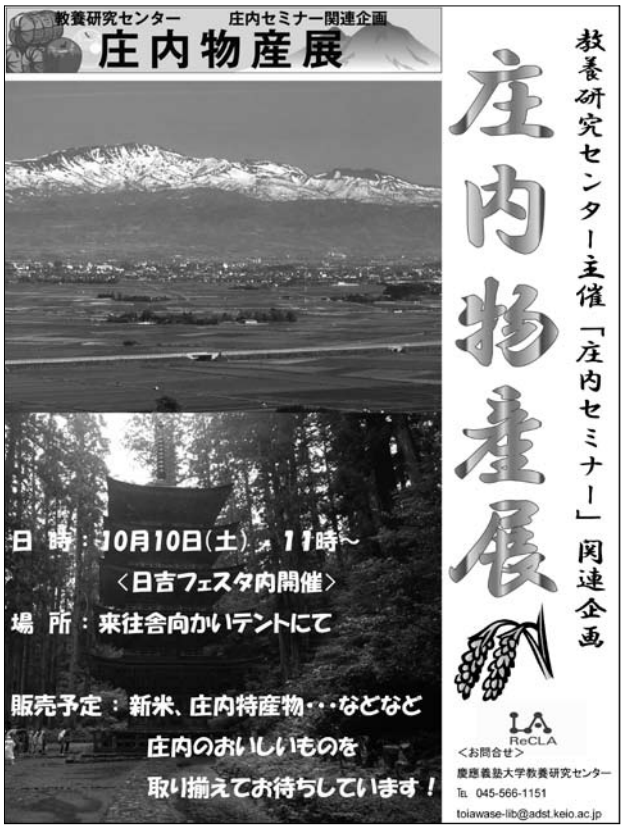
2009 年度「庄内セミナー」報告書

資料編

資料１：庄内セミナー　参加者募集ポスター

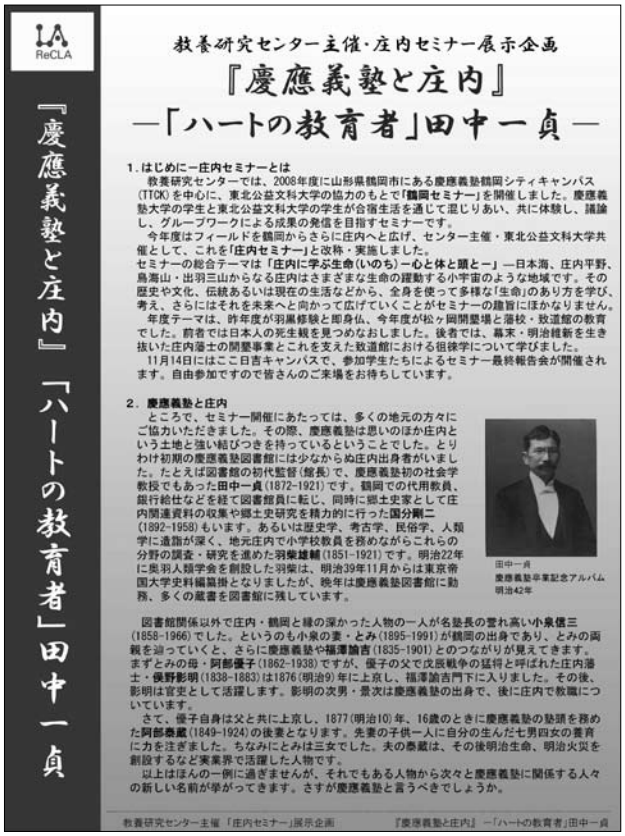
資料２：庄内セミナー「プレ企画」ポスター

資料３：庄内フェアポスター



資料４：庄内フェアチラシ

資料５：庄内セミナー　活動報告会ポスター



資料６：「ハートの教育者」田中一貞展パネル

２００９年９月１日	山形新聞	２８面

テーマは「激動の時代を生き抜く―」

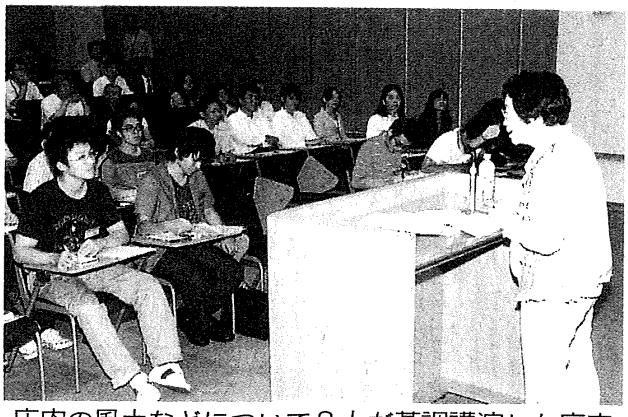
学生らが「庄内」学ぶ 鶴岡

慶応大教養研究センター主催の庄内セミナーが31日、鶴岡市の東北公益文科大大学院で始まった。２００８年度に開かれた鶴岡セミナーに続いての開催で、今回は「激動の時代を生き抜く―松ヶ岡開墾場に学ぶ生命（いのち）のつながり」をテーマに、慶応大や東北公益文科大生計19人が庄内について学ぶ。

プロジェクトリーダーの羽田功慶応大教授と横山千晶同センター所長、共催者の立場から黒田昌裕東北公益文科大学長があいさつした。郷土文学研究家で公益大非常勤講師の東山昭子さんが「庄内の風土 人と文学―藤沢周平の世界」、郷土史家で元酒田市史編纂（さん）委員の須藤良弘さんが「酒田町の発展」と題して基調講演した。

このうち、東山さんは庄内には日本の原風景が残っているとし、映像を交えて豊かな自然を紹介した。さらに出羽三山信仰や庄内藩酒井家の治世などを解説。藤沢周平文学の特長として▽折り目正しく緻密（ちみつ）な文章▽凛（りん）としてけなげで温かい人物描写▽生活者に救済をもたらす文章―などを挙げた。

学生は9月3日まで同市松ヶ岡で合宿し、羽黒山登山に挑んだり、松ヶ岡開墾場を見学し、最終日には学んだことを発表する予定。

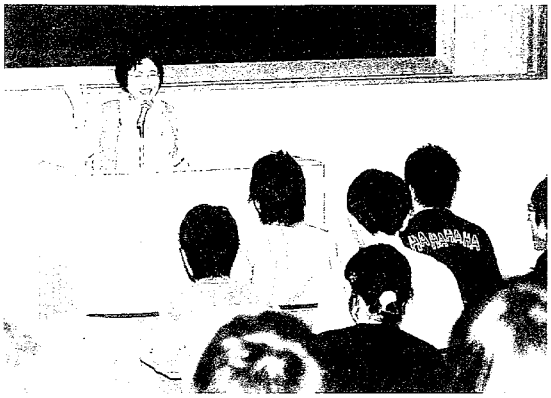


庄内の風土などについて２人が基調講演した庄内セミナー　＝鶴岡市・東北公益文科大大学院

2009年9月3日	荘内日報	6面

未知に出会い視野広げる

慶應と公益大 合宿形式で庄内セミナー開催



慶應義塾大教養研究センターと東北公益文科大の学生たちが庄内をフィールドに合宿形式で学ぶ「庄内セミナー」が31日から9月3日までの日程で、鶴岡タウンキャンパスなどで開講されている。

庄内セミナーは、同センターが教養課程の1―2年生を対象に昨年度初めて実施。日常とは異なる環境の中で、未知なるものに出会うことで学生たちに「学び」のフィールドを広げてもらおうというもの。昨年度は同センターの単独事業だったが、本年度は「激動の時代を生き抜く―松ケ岡開墾場に学ぶ生命（いのち）のつながり」をテーマに公益大との共催。

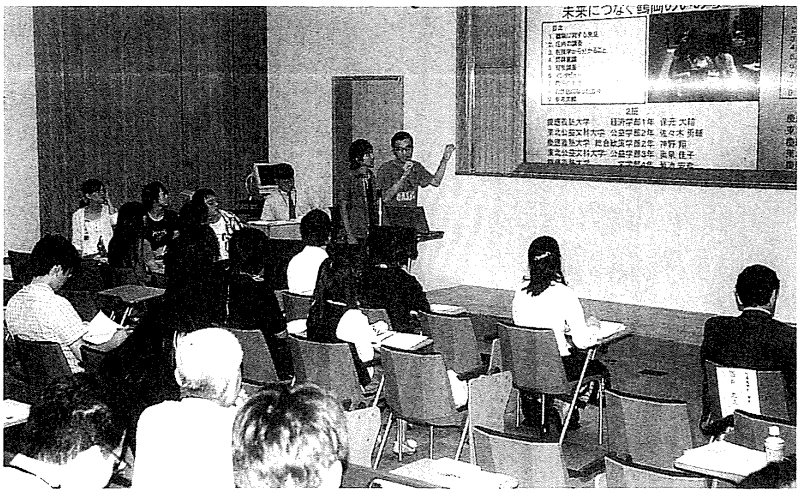
今回は、両大の学生約20人が参加。鶴岡市羽黒町松ケ岡の東北振興研修所に宿泊しながら、松ケ岡、徂徠学と致道館などをテーマに講義を受けるほか、松ケ岡本陣や開墾記念館、庄内農具館、新徴屋敷、致道博物館などでのフィールドワーク、羽黒登山、サジマイモ収穫などの農業体験、グループディスカッションを繰り広げる。

初日の31日はオープニングに基調講演が行われ、公益大非常勤講師で郷土文学研究家の東山昭子さんが「庄内の風土 人と文学―藤沢周平の世界」、元酒田市史編さん委員で郷土史家の須藤良弘さんが「酒田市町の発展」のテーマでそれぞれ講演した。

このうち、東山さんは講演の中で「藤沢さんの作品を見てから庄内を見るとまた違った魅力を知ることができる。藤沢文学が弱者を救済する作品が多いのは藤沢さんが農家の出身だったからだと思う。藤沢作品を若い世代が受け継いでいくこと で、日本人の精神文化の独自性をつないでいく」などと話した。

最終日の3日は、東北公益大大学ホールで、セミナー参加者による公開プレゼンテーションが行われる予定。

2009年9月6日 | 荘内日報 | 7面



庄内の原点にふれた

慶應と公益大 合宿セミナーの成果発表

慶應義塾大教養研究センターによる庄内セミナーの学生プレゼンテーションが3日、鶴岡市の東北公益文科大大学院ホールで開かれ、慶應大と公益大の学生たちが3泊4日のセミナーで学んだ成果を発表した。

庄内セミナーは、同センターが教養課程の1―2年生の希望者を対象に昨年度初めて実施。本年度は「激動の時代を生き抜く―松ケ岡開墾場に学ぶ生命（いのち）のつながり」をテーマに公益大と共催した。

セミナーには両大の学生合わせて20人が参加。先月31日から3日まで、鶴岡市羽黒町松ケ岡の東北振興研修所に宿泊しながら、松ケ岡、徂徠（そらい）学と致道館などをテーマにした講義をはじめ、松ケ岡本陣や開墾記念館、庄内農具館、致道博物館などでのフィールドワーク、羽黒登山、サツマイモ収穫などの農業体験、グループディスカッションを繰り広げた。

プレゼンテーションでは、セミナー参加者が4つのグループに分かれ、出羽三山の山岳信仰や致道館、徂徠学などをテーマに発表した。

慶應大4年の鈴木佐知子さん(23)は「庄内の風景を見て感動した。特に過酷な修行を行っている羽黒山の山伏を見て、世界観が変わった。とても充実した4日間だった」、同大3年の菊地高史さん(22)は「庄内を訪れたのは2回目で、あらためて人々の心の温かさに触れた。口先だけではないこつこつと積み重ねていく気質に感動した」とセミナーを振り返った。

一方、公益大3年の佐藤陽香さん(20)は「地元に住んでいて分からなかった致道館や徂徠学など、庄内の原点を見ることができた」、同大4年の高橋要さん(22)は「都会に住む慶應大生とともに学んだことにより、庄内は素晴らしいことを実感。庄内に住むことを県外の人からとてもうらやましがられ、誇りに感じた」と感想を話した。

庄内セミナー参加者による学生プレゼンテーション

2009年10月17日	荘内日報	6面

慶應大「日吉フェスタ」
人気集めた庄内コーナー
学生、区民に特産品をPR

慶應義塾大日吉キャンパス（横浜市港北区）でこのほど、学生と周辺地域の町内会や商店街が連携するイベント「日吉フェスタ」が開かれ、特別参加した庄内の物産と観光PRのコーナーが人気を集めた。

同フェスタは、日吉の街を盛り上げようと2003年に始まったプロジェクト「ヒヨシエイジ」のメーンの行事。首都圏以外では唯一の慶應大の施設となる先端生命科学研究所が鶴岡市にあり、庄内地域をフィールドにした同大の「庄内セミナー」が実施されている縁で、大学側からの打診を受け庄内観光コンベンション協会と鶴岡市、鶴岡地区物産協同組合（本間三雄代表理事）などが協力して初めて出展した。

日吉地域以外の出展は庄内だけで、赤カブなどの漬物、からからせんべい、ただちゃ豆を使った加工品、板麩、塩納豆などを販売。併せて庄内観光をPRするパンフレットを配布した。慶應大側も庄内のPRに全面協力。大学職員がだだちゃ豆を使ってスイートポテトを手作りして販売したり、「映画『おくりびと』の舞台となった庄内の新米です」と大声を張り上げて来場者に呼び掛けたり人たちに強くアピールすることができた」と話した。

慶應大日吉キャンパスのフェアで、人気を集めた庄内の物産コーナー

2009年11月15日	山形新聞	24面

精神文化 地域資源 教育…

「庄内」学び、提言

慶応大教養研究センター主催の庄内セミナー活動発表会が14日、横浜市の同大日吉キャンパスで開かれた。慶大や東北公益文科大の学生が8月末に鶴岡市内で合宿をしながらセミナーなどを開催しており、その成果を発表した。

この日は、両大学から計19人の学生がフィールドワークなどを通じた研究成果を披露。庄内藩酒井家18代当主で致道博物館長の酒井忠久さん、酒井さんの長男で松岡物産社長の酒井忠順（ただより）さん、東北公益文科大大学院の大歳恒彦研究科長ら7人がコメンテーターを務めた。

学生たちは出羽三山がはぐくんだ精神文化や庄内の地域資源、個性を重んじた藩校・致道館の教育などについて提言。これに対し、酒井忠久さんは「庄内映画村は、庄内の自然や文化を生かす『きっかけ資源』だと思う」と強調、酒井忠順さんは「庄内の食の魅力を発信するため、生産者により光を当てるような取り組みが必要では」などと語った。

コメンテーター（右側）を前にして、研究成果を発表する学生たち＝横浜市・慶応大日吉キャンパス

横浜で慶大と公益大学生 研究成果を発表

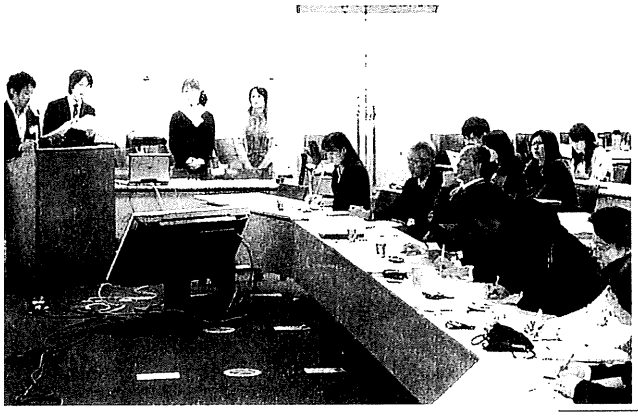
日吉キャンパス内では、関連事業として8月に映画「おくりびと」を上映。宇生雅明庄内映画村社長の講演も行われた。10月からは、鶴岡市出身で慶応義塾図書館初代館長を務めた田中一貞さんの資料展が今月17日までの日程で開かれている。今月9～14日には庄内米を使った「庄内ランチ」なども販売された。

去年の鶴岡セミナーに続いての開催。歴史と自然豊かな庄内をフィールドに、学生に多角的に研究する機会を提供するのが狙い。庄内には慶応大先端生命科学研究所のほか、東北公益文科大大学院があり、両大学の交流を促進させ、将来的には学生の交流事業も計画している。

２００９年１１月１９日	荘内日報	２面

未知なるものとの出会い

庄内各地でフィールドワーク
慶大と公益大合同合宿の成果報告



慶應義塾大と東北公益文科大の学生による合同合宿「庄内セミナー」の成果報告会が14日、慶応大日吉キャンパス往来舎で開かれた。

同セミナーは、慶大教養研究センターと公益大が8月末から9月初めにかけ3泊4日の日程で開催。日常とは異なる環境に身を置き、未知なるものに出会うことで学生に「学び」のフィールドを広げてもらう狙いで、両大の学生が「激動の時代を生き抜く―松ケ岡開墾場に学ぶ生命のつながり」を学習テーマに庄内各地でフィールドワークなどを繰り広げた。

庄内からはコメンテーターとして酒井忠久致道博物館館長、松岡物産社長の酒井忠順氏、鶴岡市総合研究所顧問の東山昭子氏ら5人が出席。来賓や学生ら約60人が聴講した。

慶應義塾大と東北公益文科大の学生が合同合宿で「庄内」についての研究成果を発表

両大の学生4、5人ずつの4グループがそれぞれのテーマで研究成果を発表。「山伏が教えてくれたこと」をテーマにしたグループは、「出羽三山の修験者たちは単に自己を極めるだけでなく、修行を通して他者のため、社会のために尽くそうとする公益という精神的バックボーンがある。それは『お山（先祖）が見ている』という信仰（世界観）に根差している」とまとめた。

「温故知新～受け継がれる庄内の選択～」のグループは、「現代に息づく徂徠学の存在感、庄内が明治以降日本の近代化を受け入れながらも崩れないスタイルを一貫してきたことに感動した。これがほかの地方と違う庄内が持つ『個性』だと思う。最近の子供に聞かせる論語などは流行るのでは」などと報告した。

それぞれの発表を受け、酒井忠久致道博物館館長は「地元に住んでいる私たちにとってとてもありがたい発表だった」と感想を述べ、徂徠学については「徂徠学の原点は『人の解釈は見るな』といって、まず自分が原点を見ろということであったと思う。徂徠学の原点をもう少し見つめて、そういうところを取り入れた提言を頂いて『庄内スタンダード』ができれば良いと感じた」などと話した。

2009年12月26日 | 荘内日報 | 2面

論説委員室

次世代につなぐ大学連携講座

東北公益文科大学兼任講師として、開学当初より後期講座「山形の文化」の一部を担当し、今年9年目を迎えた。山形の文学を講じる毎週90分の講座は、素直で真摯な若者にふるさと山形の風土と文学を語る緊張感のある楽しい時間である。「学ぶことは誠実を胸に刻むこと。教えることは未来を語ること」とするアラゴンの言葉が生き、啄

東山昭子

同時の交流を、今に体感できる幸せの時間だからだろう。そうしたご縁からか、今年は慶応義塾大学と東北公益文科大学生がコラボして、庄内をフィールドに学ぶ『庄内に学ぶ「生命」―心と体と頭と』をテーマにしたセミナーに関わる機会を得た。

両大学の学生たちと、確かな企画で人と地域と知の世界を結ぼうとする教授陣が、寝食を共にしての学びをそば近く見ながら、庄内の内外に大きな応援隊が形成されていくのを快く感じることができた。寝る時間を惜しんでの学生同士の討論があり、検証があり、現地確認がある中で、お互いの立場を尊重し合いながら、確固たる「自分育て」が成されていく経過は見事であった。

慶応義塾大学教養研究センター所長・横山千晶法学部教授、庄内セミナー・プロジェクトリーダーの羽田功経済学部教授を中心にする指導陣によって、松村宏氏をはじめ、専門分野の最高の研究者を招聘してのセミナーは、参加学生の熱意とともに、8月の鶴岡でも、11月の横浜でも広く市民に公開された。それぞれ黒田昌裕学長、清家篤塾長本人が参加し、適切な未来志向の助言があり、所期の目的を感動の中に達成したと評価された。

日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山の自然と歴史風土の中で育まれてきた「いのち」の在り様と、慶応義塾において進められてきた「いのち」に関わる多様な研究・教育の成果を複合させ、「知る・見る・表現する」という「行動の教養学入門」を通し、生きる力の基盤となる教養力を身につけさせよう。首都圏に生活し都市型の価値観で動く学生と、単科大学で多様な関心や興味の持続力不足になりがちな学生をコラボさせ、庄内の歴史風土の実地研修の中で、協同する喜びを感動的に体験させよう。学習者一人ひとりの天性に応じた長所を伸ばし、学ぶ意欲を育む実学と自学自習を重視した藩校致道館教育の在り方を、今を生きる力として検証しよう。それらを通し「人と人をつなげ」「土地と土地をつなげ」「知と知をつなげ」て自立心と自律心・社交力を育む学びを趣旨とする企画が組み立てられていた。

松ケ岡での3泊4日の日程には、羽黒山登山や八朔祭参加、だだちゃ豆収穫や芋掘りの体験も入り、地元関係者との直接のふれあいも重ねられた。グループごとに自らのテーマを設定し、発表を組み立てて、7月鶴岡の公益大大学院ホールで発表された内容は、11月の慶応義塾大横浜日吉キャンパスでは、格段に進化しレベルアップした内容に成長していた。学生たちの強靭な若さと社会に出て発揮されるだろう実践力を期待させる確かな変容があり、庄内への関心の深化があった。同世代的にコメンテーターとして活躍した松岡物産社長酒井忠順氏の指摘も深い共感を呼んだ。

高齢化し少子化する社会の現実にあって、未来をつなぐ若者の育成は大事な務めであり、ふるさとへの愛着の涵養は根づいて生きる知恵と優しさを生む源泉である。首都圏と地元在住の若者たちの庄内再発見に学びながら、それを支える知的連携に新しい「ふるさとづくり」を体感できた。

東北公益文科大学での今年の講座は終了したが、新春には100人を超す学生たちの「山形の文学」のレポートが提出される。真剣に取り組んだ成果に今年もまた新しい感動を味わえることを期待し、次世代につなぐ任を果たそうと念じている。

庄内セミナー協力団体・個人

【団体】（順不同）

鶴岡市
酒田市
鶴岡商工会議所
酒田商工会議所
鶴岡市教育委員会
酒田市教育委員会
庄内観光コンベンション協会
財団法人 致道博物館
庄内藩校 致道館
財団法人 東北振興研修所
松岡物産 株式会社「待 café」
松ヶ岡開墾記念館
鶴岡地区物産協同組合「でがんす」
株式会社　平田牧場
株式会社　山形新聞社
株式会社　荘内日報社
慶應義塾生活協同組合
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス
慶應義塾大学日吉メディアセンター
慶應義塾大学三田メディアセンター
慶應義塾福澤研究センター
慶應義塾大学出版会

【個人】（順不同、敬称略）

富塚陽一（前鶴岡市長）
酒井忠久（財団法人致道博物館　館長）
酒井天美（財団法人致道博物館　常務理事）
酒井忠順（松岡物産株式会社　社長）
黒田昌裕（東北公益文科大学　学長）
高橋英彦　(東北公益文科大学　教授)
遠山茂樹（東北公益文科大学　教授）
白　迎玖（東北公益文科大学　准教授）
須藤良弘（元酒田市史編纂委員）
東山昭子（鶴岡市総合研究所　研究顧問）
松村　宏（慶應義塾大学　名誉教授）
山田鉄哉（松ヶ岡開墾場　理事長）
宇生雅明（庄内映画村株式会社　社長）
平野克己（庄内映画村資料館館長）
加藤有倫（冨士酒造株式会社　代表取締会長）
高橋健彦（鶴岡市企画調整課　課長）
渡部幸一（鶴岡市企画調整課　調整主任）
岩城公志（鶴岡市東京事務所　所長）
阿部知弘（鶴岡市東京事務所　係長）
三浦　達（鶴岡市観光物産課　係長）
梅津夕子（鶴岡市観光物産課　主事）
伊藤賢一（鶴岡市羽黒支所いでは文化記念館　調整主任）
田中茂雄（財団法人東北振興研修所　理事長）
高山邦雄（財団法人東北振興研修所　常務理事）
細井　功（致道館文化振興会議会長）
三矢正士（致道館文化振興会　事務局長）
早坂和男（株式会社エル・サン　専務取締役）
吉村大輔（塾員）
大沼哲也（塾員）

スタッフ

羽田　功（経済学部　教授）	プロジェクト・リーダー
横山千晶（法学部　教授）	教養研究センター所長
不破有理（経済学部　教授）	教養研究センター副所長
長田　進（経済学部　准教授）	
表　　實（東北公益文科大学　副学長）	
大歳恒彦（東北公益文科大学大学院　研究科長）	
小磯勝人（慶應義塾大学出版会）	記録
若木保美（東北公益文科大学　企画広報課）	事務局
日水邦昭（教養研究センター）	事務局

謝　辞　―あとがきに代えて―

庄内セミナー・プロジェクトリーダー
羽田　功（経済学部教授）

庄内セミナーについてご報告してまいりました。庄内セミナーは、庄内にフィールドを広げ、かつ昨年度ご協力いただいた東北公益文科大学を共催校として迎えることで、昨年度の鶴岡セミナーをより発展させたものです。おかげさまで昨年度に続き成功裡にセミナーを終えることができました。鶴岡や庄内の方々にも喜んでいただけたようですし、山形新聞や荘内日報にも取り上げていただけました（資料編を参照）。また、横浜・日吉キャンパスでのプレ企画や成果報告会あるいはセミナー関連企画にも多くの参加者があったことは、庄内セミナーが幅広い関心を呼び起こしたことの証左でもあります。こうした成果を踏まえて庄内セミナーをより充実したものに発展させたいと考えております。

さて、今回の庄内セミナー開催にあたってはほんとうに多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。まず、昨年度同様に企画の当初から一貫して私たちの準備に伴走してくださった前鶴岡市長・富塚陽一氏をはじめとする鶴岡市役所、鶴岡市教育委員会、阿部正一市長をはじめとする酒田市役所、酒田市教育委員会の皆さまに感謝いたします。市のご協力がなければ多くのプログラムは実現しなかったと思います。

次に松ヶ岡開墾に関する貴重なご講義を賜ったばかりでなく、諸資料のご提供や開墾場、致道館、致道博物館での実地調査活動にさまざまな便宜を図っていただいた致道博物館館長・酒井忠久氏、同常務理事・酒井天美氏、松岡物産社長・酒井忠順氏に心より感謝したいと思います。特にお殿様をはじめとする酒井家と鶴岡、庄内との堅い絆にはたいへん強く心を打たれました。ありがとうございました。

さらにセミナーを通じて地元の若い方々との交流の機会を持ちたいという私たちの希望に応えて、東北公益文化大学の学生に対してセミナーへの積極的な参加を呼びかけるばかりでなく、学生の参加に際してさまざまな形で便宜をはかってくださった同大学の黒田昌裕学長、高橋英彦教授、遠山茂樹教授、白迎玖准教授をはじめとする教職員の方々に心よりお礼を申し上げます。すばらしい学生さんたちでした。

関連企画も含めてセミナーのそれぞれの局面で私たちを支えてくださった方々――平田牧場グループ会長の新田嘉一氏、山形県庄内観光コンベンション協会、鶴岡商工会議所、酒田商工会議所、にもお礼を申し上げます。

もちろん、すでに本文中にお名前を挙げさせていただいておりますが、セッションの趣旨に応じて質の高いお話を聞かせていただいた講師の先生方あるいは学生たちのプレゼンテーションに対するアドバイスやコメントを賜ったコメンテーターの方々のご協力がなければセミナー自体が成立しなかったことは言うまでもありません。あらためて感謝申し上げます。と同時に、一般公開した講演やプレゼンテーションに多数の市民の方々のご参加があったことは私たちセミナー関係者や学生たちにとってとても大きな励みとなりました。ありがとうございました。

しかし、私たちが何よりも感謝したいのは、限られた時間の中で「心と体と頭」を目一杯に使って見、聞き、調べ、考え、議論し、まとめ、発表にまでこぎつけてくれた合宿セミナーの参加者たちです。少し大げさかもしれませんが、彼らの頑張りがなければセミナーの開催は意味がなかったとさえ思っています。セミナーを作り上げ、成功に導いてくれたのは彼らの存在にほかなりません。彼らには、ぜひともこの力と経験を次のセミナー参加者へ伝えていってほしいと思います。

最後になりましたが、庄内セミナーへのよりいっそうのご理解とご支援をお願い申し上げまして、庄内セミナー・スタッフ一同の謝辞とさせていただきます。皆さま、ほんとうにありがとうございました。

慶應義塾大学教養研究センター
2009 年度「庄内セミナー」報告書

2010 年 3 月 20 日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　横山千晶

〒 223-8521　横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL　045-563-1111（代表）
Email　lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

©2010 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。